

---

# **学園精霊 勇者の時間**

ウラノス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学園精霊 勇者の時間

### 【Zコード】

Z8097D

### 【作者名】

ウラノス

### 【あらすじ】

精霊の世界へ門を開き、その力を使役する魔道精霊士。しかしそれには生まれながらの素質が必要だった。無いものが、有るものに勝つための方法。その一つが鍊金術。学園都市オリオン。そこは鍊金術を教える、世界で唯一の教育機関。少年は、有るものから無いものへと転落する。過去に傷を負う少年が、行き着いた先。・・・そこは女子高だった。一打逆転！勇者なります！これは、一人の少年と、女の子が多めに出てくる、割とシリアスで、コメディの、熱血なお話です。

## プレリュード

関東方面行の電車は、もつすぐじのプラットホームに飛び込んでくる。

俺はカバンを片手に田の前の少女、とこひこほすこし年を重ねている彼女・・・アリアと、その後ろどうづむく、長い金色の髪（ハーフだ）を後ろに下ろした、カトレアと共に前髪で隠れた視線を向けた。

「もう、行くから」

MASTER・Knightの彼女なら絶対に見せない涙で、その洋菓子のように甘く奇麗な顔をぐしゃぐしゃにしながら強気に見つめる彼女の顔を、俺は久しぶりに見た気がした。

さつきおれの頬を張り飛ばしたその右手で、今度は左手を添えて自分の顔を覆っていた。

カトレアさまは少し視線を俺に向けた跡、すぐにまたうつむいてしまった。

よく見るとポタッと、彼女の精霊属性でもある水の粒が地面に落ちていた。かすかな嗚咽も聞こえる。

その一人の顔に罪悪感と寂寥感を感じながら、俺は何も言えなくな

つた。

ああ、また泣かせてしまった。

発車の案内が遠くに聞こえる。このまま別れるのか。最後まで情けないまま。

頬に残る真っ赤な手の跡に沁みる何かを感じながら、彼女に背中を向けながら、俺は自分の席へと向かつた。

転入する学校のパンフレットを開けたけれども、しばらく目を開けられなかつた。

思い出すのは自分のしてしまったことと、それを許してくれた彼女たちの温かさと、それから逃げ出した自分の情けなさ。

まだ目を開けられない。

開けたらそれが目に見えてしまつから。

学園都市オリオンは、生徒数1万人の巨大大学オリオン大学系列の学校が密集する超巨大都市らしい。

全世界で唯一、鍊金術師の養成科があることでも有名な場所だ。

そんな学園都市の中にある高校、私立オリオン大学付属学院高等部は30人12クラス（A～L）の生徒数1020人の結構大きな学

校に、俺は通うことになる。

一つの敷地の中に様々な学校が存在し、また商店街やレストランなどが購買代わりとして生徒たちの間では御用達である。一般の人も使用できるひしい。

年に一回の学園都市内全てを巻き込んだ対抗の体育大会と協力の学園祭があるんだとか。

以上、新幹線の中で三回は読んだパンフレットの中身である。

「着いたら制服に着替えとかなきやな。準備しどこ

・・・バッグの一一番下に入つてた。

気分を入れ替えようとしたとたんにこれだよ。

「二二二が、学園都市オリオン?二二二本当に群馬県某所?」

新幹線を降りてから学園都市オリオン行きの電車に乗り、そのまま学園都市内へ。

その後、西地区を通りすぎ中央駅で降車。前髪を払つて顔をあげてみたときに浮かんだ最初のイメージだ。

「ヨーロッパなんじやないのか?二二二はヨーロッパなんじやないのか?」

高等部地区は学園都市の南側にあり、校舎と寮がヨーロッパ風の作りになつてゐるのが特徴だ。

ちなみに中央に大学の巨大な塔の形をした校舎群があり、北に中等部、西に初等部、南が高等部で東が研究所となつていて。

商店街はその間を縫うように伸びており複雑かつ広大で・・・確實に迷う。

地図を広げても「こ」がどこだかがまったくわからない。

「約束の時間は・・・とにかく過ぎちゃつてるしな」

人っ子ひとりいない。まあ授業中だからしょうがないけど、しうがないけど誰かいてほしい状況である。

暖かい暖色系で統一された石畳の上をとぼとぼと歩く。

にしてもきれいな街並みだ。向こうに見える白い建造物は、たぶん学生寮なのだとと思うのだが、もうホテルのようになしか見えないしさらに言つならユーロッパの洋館にしか見えない。

「シリウスとはえらい違ひだな。まあ世界からして違うんだけど」

昔自分がいた場所が、とても冷たい場所だったことを思い出す。それを思い出せばアリアとカトレアさまも思い出してしまつわけで・・・。

「今頃訓練かな。それとも教授たちのねむい授業でも真面目に受けているのかな」

思い出しても戻れないことは分かっている。彼女達に会いたいのなら、せめてこの学校を卒業し、一人前として会いに行くしかないのだろう。

魔導精霊に見放された自分は、もうどうしようもないのだろうけど。

「すいません、陽乃 紅姫さんですか？」

・・・いつも下の名前を呼ばれるのは苦痛だ。

紅姫と書いて【べにひめ】ではなく【ひづき】と呼ぶ。

なぜ姫の字を男に使うんだよ・・・と思うのだが、母親の頭はお花畠だから親父がせめて読みだけでも男っぽくしてくれたらしい。一杯の抵抗だったのだろう。

その両親もだいぶ前に死んでいるから、詳しいことは分からぬ。

うんざりしながら、

「はい、俺ですけど・・・」

と、振り返った俺はその女性のあまりの美しさに2度見をしてしまつた。

黒く長い髪を風に揺らし表情があまり出ないお人形のような美しさを持った、この街並みとは正反対の、背の高い純日本の美人だった。

前髪越しに天使を見た気がした。って言つのは言い過ぎなのだろう

か？

「よひやく見つきました。学園はひひです。つこてくべださー」  
そひ言われてよひやく、その女性が来ている制服が自分の持つているパンフレットに乗つているものと同じものだと気づいた。着る人が違うと服も変わって見えてしもひ。まあ言ひやひ悪いがこのパンフの人ブチャイクだしな。

「？　はやく来てください。授業はもう始まっています」

冷たい声だったが、どこか感情のこもつていそつな声だった。

なんとなく、今の声にガツ「一はわぼれてラッキーって感じの声だつた気がした。具体的だな、俺。

「ああ、すいません！」

俺は慌ててついていった。

途中ではぐれて、二回くらじ迷子になつた。

俺は方向音痴だったらしく。ショック。

駅からじばりへ歩いた先に、その学校はあった。

なんといつか、もつねこは

「お城じゅん」

お城だった。

「なにをなさっているんですか？」

今の声には、さわやかとしろよ的な感じがした。

「いや、お城だなあと思って」

素直に答える。じまうよつじまうじつの場合せ、門から学校までが遠いのだと思っていたが、じまは門までもが長いらしげ。

「せつあむ言いましたけど、授業中ですよ?」

あ、今度は怒っている。じまの人は感情を顔には出さなくとも、かなり豊からしい。

ふと、俺はこの人の名前も知らないままついてきていたことを思い出した。

「わつじえぱ、お名前は何と申つんですか?」

「・・・大地 八雲です。」

「わうなんですか・・・」

・・・

無音地帯。少しの春の匂いが辺りを包む。シリウスでは感じなかつた季節がここにはある気がした。

のも最初だけ。後はひたすら沈黙沈黙沈黙

「や、八雲さんは何年生なんですか？」

・・・沈黙に押しつぶされるベタレ紅姫。

そんな声が聞こえる。

ふつと感情の見えない黒の瞳を紅姫にむけ、その赤い唇から冷たい口調で言葉を出す。

「一年C組特務科所属です。出席番号入りますか？」

「いえ、いいんですけど・・・特務科？」

ところづき今は「冗談なのだろうか。声色がすこし弾んでいた気が・・・。

「特務科と言つのは・・・向ひつて聞いてください。この学院は、少し特殊なんです」

再び沈黙

「とにかく、すこません」

「なにがですか？」

「いや、すこしく怒つてらっしゃるから、なにか聞いてはいけない」とだったのではないかと

すると彼女・・・じやなくてハ雲さんは、ひどく驚いた顔・・・ではなく声で聞き返してきた。

「どうして分かったのですか？私が怒っているだなんて」

「いや、声にすこしく感情がこもっているんで・・・」

「信じられない・・・親にこれまでかれたことなんてなかつたのに・・・」

「あの？ハ雲さん？」

「私とあなたは同学年です。敬語は不要です」

すこし寂しさを感じさせる声で彼女はそう言った。場面は少しずつ変わってゆく。なんだか大学の方はすこしく近代テクノロジーな感じのする高齢ビルが乱立しているようなのですが・・・気のせい気のせい。

「ならハ雲？」

「初対面ですよ？私たちは」

「ほりやつぱりハ雲さんじやないですか」

「・・・敬語をやめると言つたのですが・・・」

そんな呆れと疲れを感じさせる声でいわ niede

「それより校門が見えてきましたよ。あのが私立オリオン大学付属学院高等部です」

なにげなく校門を通り過ぎる時に目をやつた。

【私立オリオン大学付属女子学院高等部】

俺の世界が止まつた気がした。

「えええ！？女、女子高！？」

慌てて八雲を見る。

「大丈夫、共学です」

「でもこのプレートが」

何回見ても大学付属『女』学院の文字が。

「今年から共学化したんですね」

声からして嘘はついてないだろ？

「どうぞ、共学でなくては試験受けられないでしょ」

それもそうだ。

「でもおかしいですね。この学院の女子担当での男子学生が多いせいで、編入も新入生も全員落とされたと聞いていたんですが・・・」

「え？ もしかして男子は・・・」

「はい。おそらくあなた一人であることが確定です。」愁傷様・・・いや、この場合はおめでとう、でしょ」

「こんどは世界が止まり、そして崩れた。

「リリが生徒会室です。一度顔を出しておいた方がよいでしょう」  
学院はすでに昼休みだった。というより、中の構造も洋館そのものと言つた感じだった。

パニック防止とかで隠されてここまで来たのだが・・・職員室よりも先に生徒会？

「この学院は、教師と生徒会が同じくらいの権力をもっていますし、生徒間のことは生徒同士で片付けることも大事なことだそうです」

特に大きなドアの前でそう説明されるが、

「あ、緊張するな」

そう言つと彼女はすこし笑つた声で

「まあ生徒会のメンバーは全員あなたと同じクラスの2・Cの生徒です。そんなに硬くならなくても大丈夫ですよ」

「え? 一年生なんですか?」

「はい。一年生で構成されています。それより早く入りましょう」

といつより後ろの校庭から破壊音が聞こえてくるのだが。これが練金術?

「失礼します」

「あ、ちょっと危ないかもおおおおお」

その大きなドアをあけた瞬間、田の前にはまつ黄色のバレーボール。

よけるか夢の旅に出るかの選択肢が見えた。

俺は旅立つほうを選んだ。

「だいじょうぶう？ 転校生君」

「飛んできたボールに当たっちゃうなんてさ、反射神経が鈍いんじゃないの？」

「だよねえ？ あたしなら避けるもん」

ひどい言われようだな。

といつよりも頭に感じるこの柔らかさは・・・すっと薄目を開けると、無表情の美女が俺を膝枕していた。

あー。ビツビツで・・・って膝枕！？

「おおおう！」

ガバッと跳ね起きる。あ、焦った

「あら、おきましたか」

相変わらずの無表情美人・・・じゃなかつたハ雲さんは、氣だるげにこっちに顔を向けた。

「ど、どうして一つすか？」

何言つてんだよこいつ・・・みたいな顔はしないでいただきたいなーなんて。

「氣絶した思春期男子は膝枕が一番効くんだヨ　・・・だそうですが」

「JJKは深くは聞くまい。たぶん　の存在に気づけたのは俺くらいだ  
わ！」

「はあ・・・。どうもありがとうございました。」

「どういたしまして」

あら？

「さつさの一人は？」

さつさ俺にバリー・ボーをぶつけたあの一人の少女だ。

「あの一人は生徒会補佐の熊田 小橋と大橋姉妹です。室内での不適切な行動のため、罰として【大学からお越しくださった鍊金術科特別講師と行く都市 周全力マラソン】に行っています」

「この広大な都市を一周するのも大変そうなのに、 とこうといひ恐怖を感じざるを得ない。」

「え、 厳しいですね」

「といひより最近のあの一人の素行は目を見張るものがありました」

「声からざまあ見ろへへん つて感じがもう受けれる。

つて、今氣づいたけれども・・・

「生徒会のメンバーはまだ誰もいませんね」

かなり豪華な執務机と、壁いっぱいの資料が並ぶ生徒会室の中には、まだ誰も座つてはいなかつた。

まあ誰かいたんなら八雲さんも膝枕はできないだろうけども。

「いえ、これで全員です」

「な？」

そう言うと彼女はスッと席に着いた。

部屋の一番奥の、まさに王座と言つた感じの椅子にだ。

その王座の前の執務机には、こう書かれていた

生徒会長  
と

「私が生徒会長になつてまだ日 nichigatitte imasen。顧問も決まつていない状況です」

ん？その他の選挙を勝ち抜いた方々は？

「我が学校では、生徒会長がその権限で全てを決めます。顧問も役員も、全てです」

予算も、とまではいかないんだね。安心安心

「あと予算も」

独裁ジャン！

「それはまた・・・うれしい機能がいっぱいな生徒会長ですね」

「それほどでもありません」

でも声がへへん つて言つてる。

「あの、それで・・・話は変わるんですけど、俺は明日から登校でいいんですか？」

準備するものだとあるのだろうか。

「いえ、明日は動きやすい服と筆記用具だけで十分です。現在の学力と運動能力の測定をします」

「さらりと大変なこと言いますね」

明日って・・・まだ寝る場所も決まってないってのに

「その前に、寝る場所とか・・・？」

「わが校は完全寮制になっています。ほかの高校との共同寮があるのでそこに入つてください。場所は後で案内いたします。あとバイクは許可されていますが、この都市の中のみでお願いします。申請その他は私ではなく、担任にお願いします」

「いや、その担任をまだ知らないんですが」

「明日お願いします」

大変だつたな。

な。 というよりも八雲さん、無表情なのに感情豊かでうつ氣全開だった

でも俺の前髪を見て顔色・・・もとい声色一つ変えなかつたのは、あの人気が初めてかもしねえ。

まあまだクラスの人とも会ってないし・・・ってそう言えればここの男子俺だけやん！――――

どうなる？俺！

つづーく

## プレコード（後書き）

どうでしたか？長かったですでしょか・・・。

次がすぐ出せるよっこ、がんばりますー応援よろしくお願いします！

## プレリュード第一番

俺は今、体育服一枚で広大なグラウンド（しかも地下）に一人途方に暮れている。

連れてきてくれたはずのハ雲さんも担任の先生もいない。

・・・新手の虜めなのだろうか。虜めなんだろうなー。

身に覚えがなさすぎるんだけどさ。

一時間前の話。

朝から連續三教科の学力テストを受けた俺は、もう身も心もくたびれきつっていた。

「つーか全部の強化のテストに明確な悪意を感じざるを得ないんですが」

「気のせいです」

ちなみに俺はまだ生徒会室から一歩も出でていない。

まだ編入生の俺を迎える準備ができていないとか。ちなみに今日は金曜日。八雲さんは今日も編入生指導の名目で授業をサボッ・・・いえ、公欠している。

朝の6時に呼び出されたのだから眠くてしおうがないのだが、それ以上にテストに疲れた。

「いや、あんな問題始めてみましたよ」

どんな問題かと言ひつと、

国語・・・全編にわたってひたすら感想を述べよ。それも解答用紙がひたすら作文用紙。ひたすら手抜きな問題だつた。

数学・・・全編にわたってどう見ても難関私立の入試最終問題詰め合せ。手抜き以前にいろんなとこに引っ掛かっている。と言うか問題の最後についている（～年度～大学）の文字くらいは消しとけよ。

英語・・・突然私はボブだと名乗る中国人が入ってきて50分間ひたすら英語で漫談。意味不明なのに加えて途中で故郷は富山だと言つていた。どちらへんがおかしいのかもう説明が付けられない。

といつた内容だ。

氣付いてほしい。英語はもう問題ではないことを。

「私は特に何も感じませんでした」

嘘つけ！声が笑つてんぞ！

「どうより俺本当にこの学校に入るしかないんですか？」

となりのオリオン大学付属学院高等部【水無月】はたしか男子も半数はいたはずだ。

「残念ながら、一度入学手続きが完了したらもう『この学園都市内の転校は不可です』

「なんで…」

「…・隣の方が奇麗多いとかで転校手続きを出した方が大勢いるからです」

・・・じぱつちり？ねえ俺つてじぱつちり？

「そんなことはどうでもいいですから、わざと昼食を済ませてください」

まだ買つた弁当（充実した商店街にて購入）のパックを開けてすらない俺をせかすハ雲さん。この状況を見てから言おうね。

「ハ雲さんは食べないんすか？」

さつきからずつと座つている【副会長】の机の隣、【書記】の机の上に置いてあるバッグからよつやく弁当を取り出し開く俺。

訪ねた先のハ雲さんは、その豪華な【生徒会長】の執務机の椅子にもたれかかるように（体が椅子に包まれているように見える）しながら気だるげに（表情は変わらない）こつちを見ている。

「私はこれで」

とサンディッシュのお弁当・・・しかも手作りのそれを取り出す。

う、うまいっ！

「パンクッ」

「あげません」

「パンクッ」

「あげません」

「パンクッ」

「あげません」

・・・・

・・・・

「あなたのせいで約束の時間に間に合いません

一人して学校の廊下を走りながら（洋館作りだからもちろんフローリング？いや、木張り？）怒った声で俺を責める八雲さん。

「一時から俺の担任と会つ約束があつたらしい。言えよ。会つといつ よハ雲さん。

「いや、ムキになつたハ雲さんも悪いでしょ?」

あのあとサンディッチの取り合ひを1時間もしてしまつた。アホだ。俺もアホだがハ雲さんも相当頑固と言つたか・・・ノリがいいのか?

「私はあなたがしつこく言い寄つてくるからそれを・・・」

「ああ! いくら授業中で人がいなかつてそんな誤解を招くような危険な表現は「つきました。ここです」・・・つて俺が先に走つてるんですから止めてくださいよ!」

「そーー教室分くらい先走つてしまつた!

「失礼します。ミナノ先生に用事があつて来ました。入つてもいいですか」

その抑揚のない声でパーフェクトな職員室に入るときの決まり文句(違うか?)を話すハ雲さん。

とにかく生徒会室に比べて相当質素・・・といつよりも普通な職員室だった。生徒会ずつー。

「ああ、水原先生ならさつき【野戦場】に準備しに先に行かれたよ。

「

中年くらいの女性の先生が教えてくれた。・・・というか、この学校の教師は全員女性が定年過ぎたおっちゃんしかいないよつだ。まあ元女子高なら仕方がないのだろうけども。

「わかりました。ありがとうございます」

結局おれは一言も言葉を発しなかつたんだが。入ってよかつたのかな？

「【野戦場】？そんなもんがあるんですか？」

そんな・・・これは軍か？軍演習場だったつけか？

「ちがいます。【野戦場】とは第十四グラウンドの通称です。・・・ばかですね」

ああ。もうこの人、言葉でバカって言っちゃってるよ・・・。

「第一四グラウンドって、この学校十四個もグラウンド持ってるんですか？」

見たところ、校庭は大きいのが一つと小さいのが一つの計二つしかない。体育館も一つだ。

「いえ、この学園都市全体の公共グラウンドのことです。この学園都市にはグラウンドは大小合わせて三十個あります。まあ高等部地区にその三分の一がありますが

八雲さんによると、その公共グラウンドは必ず学校の生徒なら自由に使用して良いグラウンドとそういうじゃないグラウンドがあるらしい。今回行く第一四グラウンドは、その中でも教員の許可と引率の必要な特別グラウンド。なにがあるのかな?

それに北野や、北野には学園都市を一つの学校として考えてこいつだ。だつて今普通に校門出ちゃつたし。

まあ広大と言つても一つの街に高校が三つも四つもあるんだから文句は言えない。

そういひじてこるひちこ、そこかこ大きなグラウンドに出た。

### 【第一四グラウンド】

「八雲さん? 間違えてません?」

「どうみても一四には見えない。数字にしても無理ですよね~。

「いえ、間違えていません」

わいぱつと書こ切る八雲さんだが、ここはまだ見ても・・・

「一四ですかね?」

かると八雲さんはにやつとした声で

「地元、です」

そう言った。

確かに階段があった。厳重な門がその先にあるんだけど。

「はやく着替えてください」

体育服は、白地にブルー。

そして冒頭に戻る。というわけだ。

だが今俺の目の前にはスーツを着こなしたナイスバディーの若い女性が立っている。

八雲さんは階段に座っている。

名前聞いてね一年聞いてねー

「さつそく運動力を測定しようか。まず君は靈力を使えると聞いているのだが」

「あ、はい。この学校の入学条件でしたんで一応は・・・」

この学園都市オリオンは精靈魔導士こそいないが、全員に鍊金術を教えるというのが方針だ。だから新入生じゃない限り靈力は必須条件となってしまう。

そもそも靈力とは体の内側から発生する、生きる力の余分な部分である【陰の靈氣】と、空気とは別のものすべての生き物から放出される陰の靈氣の変わった姿である【陽の靈氣】を混ぜ合させ、組み合わせることで発生する力だ。

訓練すれば誰しもが手に入れられるが、一般に【靈力の才能】と呼ばれる靈力変換効率は人それぞれに差があり、これが高いほど少ない靈力で大きな力（馬力）を出すことができる。

だがただ靈力を出していてもなんの役に立たない。ただ陽の靈氣に変化してそこら辺に漂うだけだ。

だから精靈魔導や鍊金術を身につけ、形を整えて力を出す。

世界の基本だ。

「ふむ。ならばその手に持つている鍊金核を作動させてくれ

鍊金核つて・・・この片手に持つている小刀のことだろうか。

「あの、わかんない・・・」

「ああ、その鍊金核に靈力を注ぎ込む感覺だ。もっと砕けて言つと・  
・・そうだな、全感覺を鍊金核に集中させるんだ。血を通わせる感  
覚だな。いや、難しいか・・・」

少し頭をひねりながら考え込む仕草をする若くてナイスバディーの女性。いや、長いから担任（仮）でいいか。

「ああ、だいたいわかります」

精靈魔導は鍊金核の代わりに【コントラクト】【アシスト】を使う。

「コントラクトとは生まれながらに利き腕に刻まれた紋章で、それが  
あるかないかで精靈魔導士になるか供給者（精靈魔導士が使う言葉  
で、陽の靈気を出すだけのためこう呼ばれる）になるかが決定する。  
ちなみにこれがないと魔導門を開けない。そしてこれが消えること  
も……ないはすだつた。

「ならやつてくれ

すこしずつ神経を鍊金核に向けて行く。

「おわあっ

いきなり鍊金核が光った！？

そのまま鍊金核は刀の形に落ち着いた。

「ほおー、きなりできるなんて！」

感嘆の声をあげる担任（仮）。いや、ハ雲さんも少し驚いた声を上  
げた。

「これが・・・鍊金核？」

緑色の光を上げる刀。いや木刀のようなものなのかもしれない。

「せうだ。まあたくさんの形があるが、一番使いやすい刀型にした。  
それを中心にして靈力をからだの外に纏うことができる。たとえる  
なら体で練つた靈力をからだの外に出す感覺だ」

やつてみるが・・・なかなか難しいぞ？

「さう簡単にできるものじゃないさ。それじゃあテストに入れる

そう言つて担任（仮）は俺の持っていたものと同じよう小刀を取り  
出した。

「IJの状態は【Initial state（初期状態）】略して  
【IS】だ。そしてこれが・・・」

そのままきゅっと鍊金核を握り、

「Release（解除）〇〇」

一言つぶやくともうそれは俺のとおなじ刀型になつていた。

「【Arms form（武器形態）】まあここからはそれぞれの  
型番やら名称やらだな。ちなみに私のと陽乃のは【TBP-a01】  
通称ボクター。きちんと受けなきやケガじやすまないかも」

そのままボクターを振りかぶり俺のまづに振り下ろした。

尋常なひざの速度で。

「よー・ハ雲」

私は階段を降りてきた日焼けした褐色肌でショートカットの少女に顔を向けた。

「あいつが男子転校生? ザイ・ブンとちーさいのな」

彼女の名前は火崎 薫。私と同じ学年、クラス、特務科だ。

「つーか前髪なつが! あれじゃ顔見えねーんじゃねーか?」

「・・・彼、他人と目を合わせてしゃべるの苦手のようですのでしようがないのでは?」

そう、私とおなじ。人との関わりを最低限捨てている人間のような気がする。

「ふーん。にしてもなんでまた特務科用の編入メニューやつてんの? 男子だから? いくら人手不足でも使えねー奴はいらねーし」

「[J]のテストの結果を見ればわかるのでは?」

そう言って私は午前中のテストの結果を見せた。

ちなみにあのテスト事態には全く意味はない。肝心なのは疲れやストレスなどで発生する特殊な靈力の余波を測定するものだ。

「[J]こつはす[J]いな。今の私と変わらないくらいあるじゃねーか!」

「ちなみに彼、シリウス学苑からの編入生です」「

シリウス学苑・・・秋田にある精靈魔導の超名門校。別に精靈魔導が使えないっても入学は可能だが、一定の供給者足る靈力は必要だ。

「まあ必要最低基準の靈力は軽く満たしてるけど・・・運動能力の方がないときついんじゃねーのか?」

「それを今テストしようとしてるんですけど?」

野戦場のほうに目を向けると、陽乃 紅姫は【HS】の練金核を作動させようとしていた。

「まあ、もう簡単にいくような物でもないんだよなー。私たちの代で一番早くリリーズ出来た奴でも一時間かかったしな」

「ちなみにあなたでしたが。」

「もうだつたつけ?」

「私が一時間10分でした。まあ気にしないやこませんけど」

「まあ、あと二、三時間は覚悟しておけ。」

「おいおいー八雲ーありや決めちまつんじゃねーか?」

「いくら靈力が高くても・・・

「つむ・・・」

彼は、陽乃 紅姫は、完全なリリーズを成功させていた。

唸るボクターをとにかく避ける。

んなもん受けたら腕碎けるつてー

「躲すだけか? つまらんぞ!」

そう言つてせらりとボクターを振り回す手を加速させる担任（仮）。

いや、あんた楽しませるためにやつてませんからー

命、かけてますから！

「はん！動きが単調な攻撃に対してそんなに間の抜けた躲し方じや・

・・

ガツと背中に道がなくなる。やばー！障害物か？

「ひたな風に追い詰められてしまう。躲せるか？」

担任（仮）の右手とその手に握るボクターが輝きを増す。

何か来るのは本能的にわかっている。

だが悲しいかな逃げ場が全て封鎖されている。

「当たつても気絶程度だ。まあ、受けるなり躱すなりしちゃうよ?」

グツと空氣・・・いや、靈氣が吸い付けられる。

「突破!」

くつ!こいつは確実だ!確実に死ぬんだ!

一気に振りぬかれるボクター。多分靈力を附加させて衝撃を飛ばす技だろう。ならそれをかわす!

なぜなら受けたら痛いから!

まだ、まだ、まだ、まだ、まだ、まだ、まだ、まだ、まだ、今?つお!今  
だよ!

体を畳一杯反らす。鼻かすつた。

皮ムケタ。

「なに?躱したか!」

一氣に下まで振り下ろされたボクターだ。

すぐに第二波は打てまい。  
チャンス!ここで俺は・・・

距離をとった。

乱れた前髪を直す。

だつてーー！あのオネーサン一瞬眼がマジになつた！

ポニー・テールに結われた茶系の長い髪を風になびかせ猛禽類のよつな眼でこっちを見る担任（仮）

「陽乃……何かやつていたか？」

言葉は堅いが口調はとても楽しんでいたようだった。

「護身術を、嗜む程度に」

「成る程。なじみの護身術とやらのレベル、見せてもらひえるかな？」

鋭かつた眼が、さらに細くなつた。

いや、瞬きか。ゴメン。

「お手柔らか……」

ミナコ先生の唸るボクターをかわす……って言つたりやつれと一緒かもしけないけれど、少しずつ陽乃 紅姫は受け始めていく。

もちろんそこに止めるという動きはない。だが少なくともやつきのように逃げ回つてしまい。

「あいや……すげえな。私たちはまだまだだけど他の連中、じゅう歯

が立たたねー動きだ

薫が感嘆する。無理はない。

「・・・でも、避けの動きに無駄がなさすぎます」

「確かに。あれじゃ攻撃なんてできやしねえ。あとあんだけ動いていふのにセレまで乱れていなーあいつの前髪は脅威だね」

普通いくらい避けると言つても相手との間合いで取りあつたり、それができなくて正面を向くはずだ。

前髪は・・・知りません

「背中でも何でも平氣で取られやがる。まあそれでも全部紙一重でかわしてんだけどな」

彼はもしかして・・・

「・・・攻撃の動きを必要としないのなら、たしかにあれで完成なのがもしけません」

わたしの言葉は薫には伝わらなかつた。

背中の方からひどく痛そつな音と悲鳴（男の）がしたからだ。

「つまう・・・あつや氣絶もんだ

かわしながら攻撃を流す。

相手の獲物の側面を滑らせ、すれすれの部分をからだをひねってかわしていく。

前髪が乱れるが我慢するしかない。

んー。アリアに感謝だね。叩き込まれた（文字通り）甲斐があるつてもんだ。

「やるな。端から攻撃をする」とを捨てた動きだ

「む」ついで叩き込まれたもので

横薙ぎを縦に変えて振り下ろされるボクター。

そのまま横にスライドして距離を取ろうとする。

だがそこからさらに軌道が・・・変わったあーーー？

「連蛇！甘いことだよーーー！」

「うなりやー！」

そのままこいつに突きをするボクターに直接俺のボクターの先を当てて軌道を滑らせる・・・・・うとしたがあまりの衝撃に俺のボクターが弾かれてしまった。

「ぐつーーー！」

間一髪のところでターンを入れながらしゃがみこむ。そのままステップ。前髪が持て行かれちゃってるが・・・ってまたボクターの軌道が変わった！？

「いつたろ？連蛇。軌道を無理やり捻じ曲げるれっきとした鍊金技だ。そしてこうみるとどうなる？」

まさか！

「突破！」

さっきのバカパワーがねじ曲がって来た。こいつはもう・・・いい夢旅気分だ。

『気がついたら空の上だった

なんていう夢を見た。

## ペレコード第一番（後書き）

今回も長過すぎった・・・かもしません。

次にそれはーもつと読みやすくー

## プレリュード第二番

ベットの上で目を覚ます。

「あー・・・まだ頭ががんがんする」

最後にボクター（鍊金強化）で脳天にクリーンヒットを食らって気絶。俺の頭がい骨に感謝。

こんな氣絶の仕方をしたのはまだ小学校に入る前にしていた護身術講座の時にアリアが前の日の喧嘩を根に持つて繰り出した幻の左を食らって以来だ。

アリアに殴られたのはあれが最後だが、あまりに痛かった。

「・・・編入生相手のテストだからって、ここまでする必要ありましたか？」

「すまん。ここまでするつもりはなかった。」

「まったく。ミナ「先生もいい大人何ですから、加減と言つものを覚えてください」

「まあいいじゃねーかハ雲。それで?センセーはあの編入生をどうするつもりだい?」

「・・・まだ鍊金術と言つものを知らないからしちゃうがないだろ?」

が、いざれは特務科に入れようと思つ。八雲はどう思つ?」

「私はそれより……」

ベットのまわりに掛けられた白いカーテンの向こうで声が聞こえる。

以外にも担任(仮)は、生徒に叱られているようだ。

そのまえに、頭に乗つてゐる氷が完全に溶けてしまつてゐる。気持ち悪いのに加えて顔中びしょぬれだ。

うつとうしい前髪を払いのける。

久しぶりの視界クリーンだ。外気が冷たい。

「あのー」

その声にカーテンの向こう側の人達は焦つたようだ。シャツとカーテンが開く。

「大丈夫ですか、けがの具合は……って失礼ですが誰ですか?

?」

「いや、陽乃 紅姫ですけど」

え?なんか違う人にもなつちゃつてる?何々?一大事?

「おまえ、前髪上げてんのか?」

褐色肌のいかにもスポーツ系の女の人が聞いてくる。

「はあ。髪に張り付いて気持ち悪いので・・・の前にどなたですか？あと先生の名前も聞いてないんですけど・・・」

驚かれてもこっちが困る。あんた誰だよ。

「ああ、すまない。私の名前は水原 美奈子だ。美奈子先生でも先生でも水原先生でもなんとでも呼んでくれ。そしてこっちにいるのがそこにいるハ雲と同じクラスで特務科、そして昨日副会長になつた火崎 薫だ」

先生はポニーを翻しながらニコッと笑つた。ん、美人。すんげー美人。

「そういうことによろしくな！転入生君？」

「こっちのスポーツできそつうな女人・・・薰さんだっけ？も、お人形みたいなハ雲さんやキリリとした先生とはまた違う、人懐っこさのなかにある頼れる姉貴って感じの美しさがある気がした。

「あ、陽乃 紅姫です。よ、よ、よろしくお願ひしますね？」

きちんとアリアに言われたとおり、相手の顔を見てにつこり笑つて頭を下げる。うん。完璧だつずえ！

「あ？あーうん。よろしく」

「お？お？。よろしくな！」

一人して顔を赤くしているのだが・・・俺は成長した自分を必死に

褒められたのに、少しでも見逃しかねつていた。

それから一時間の休養を八雲さんから言い渡した。

ん?ハ雲さんも顔赤かつたな。俺に恋でもしたか・・・つてのはないな。悲しいけど。

「どうか編入していきなり保健室。一日田中の間にまだ授業にすら出てないのに・・・」

時間はもう6時。つーか八雲さん生徒会室来いつて言ってたけど、どうだつづ一話・・・

まあ仕方がないからとりあえずシーツをたたんで保健室を出る。

薬品の香りは、いろいろと悪い出すから好きじゃない。

あの日々を。

夕日差し込む廊下をとぼとぼ歩く。たぶん生徒会室は一番上の階だ。

「ああ、氣分も黄昏」

つというよりこの校舎、かなり作りがシンプルなようだ。

一つの大きな縦長の校舎が「丁」と一つあり、そのとなりに「ノ」の字になるように小さな校舎が渡り廊下で繋がっている。

まあ全部洋式の造りになつてゐるんだけど。

そして正面玄関入つてすぐの場所に巨大な階段がある。貴族の屋敷のような奴だ。

「たしか西の方の階段を下つてきた気がしないでもないから・・・」  
「ひつちに・・・んであつちに・・・」

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

「迷つた」

完全に迷つた。一二一二二だ? 今何階だ?

「やつべー! 気分が倍速で黄盲・・・」

ああ、憎きかな方向音痴!

「んー誰かに聞ひにこもそもそもそも今日学校休みだし・・・

部活生もまったくいない。そういうえばほとんどの部活動は他の高校や大学なんかと共同してゐるんだっけ。

「んつと・・・よこしょ」

階段を上がつてくる人影。夕暮れの田差しが逆光で、よく見えないが・・・シリヒットと声からして女の子だ。まあ女子高だし。

その少女は、何冊もの本を抱えて、ふらふらになりながら階段を上つてきていたようだ。

危なつかしいことにの上ない。

「あつ・・・あやあ」

それは一瞬の出来事。顔までつみあがつた本のせいで階段を踏み外し、そのまま本の重みで急速落下。

階段最上段からの落下。落ければ怪我じやすまされないことは確かな高さだ。

「間に合えー! リリーズ!」

ポケットからロープを取り出しボクターへ解除。

下へ下へと重力にひっぱられながら階段を落としていく女の子。

間に合わない? くそったれがあああ!

のばされた手を追いかけ自分も落下する。

ボクターを軸にして靈力を足に付加。そのまま跳んで彼女の手をつかみ・・・

迫る地面。コンクリートに恋をするほど俺はドミじゃない。ドミじゃないんだ！

彼女を上にし抱きとめながら落下の重力を流す、いわゆる空中回転をかます。

ボクターによる靈力供給の賜物だ。そのままバランスよく着地。足にものすごい衝撃と、なれない靈力の使用での疲労が一気に流れ込んでくるがそこは男の子の気合いでカバー。

呆然とするその少女に笑いかけるだけの余裕はないのだが、そこも男の子の気合いでカバー。

舞い上がるつむぎの前髪を払いのけ、まるでお姫様だっこのような状態にも気付かないまま、軽く話しかける。

「生徒会室つてどー?」

・・・彼女は、気絶した。

「・・・まつたくもつて迷惑な話です」

氣絶した少女を抱えたままじつよつもなくパニックになっていたところに、大きな音を聞きつけ隣の部屋から八雲さんが現れ・・・つて俺けつこう近くまで行けてたんだね。やつたネ！

そのままその少女を抱いたまま再び保健室へ。

ベッドに寝かせ、怪我がないかのチェックが済んだ後、お説教が始まった。

ちなみに彼女は木葉 冂と言つ名前で、これまた俺とハ雲さんとなじクラスらしい。

んー、顔だけ見るとすっぽり頭よさそうな美人さんだ。なんというか、インテリ?的なオーラが出てる。髪は短めにバッカリ切りそろえられてる。

「聞いているのですか?だいたいあなたは編入生としての・・・

無表情に冷たい口調で説教食らつのは、精神的に病んでくるな。

ハ雲さん、怖いつす。

「失礼なこと考えてませんか?」

「イイエ。マッタク」

私はこの日、王子様を見た。

優しく、力強く、かつこいい人を見た。

甘く女性のように整つた顔だった。

私を助けるために必死になつてくれた。

私はこの日、恋に落ちた。・・・。

「ん」

「あ。目、覚めた？」

私はこれを夢だと思っていた。

でも目を開けたその先には・・・前髪の長い見るからにヘタレそうな感じの、でも声色や背丈からさつきの彼だと思われる、男・子・学・生が心配そうにこつちを見ていた。

「? なんで男子学生がここにいるの?」

すると彼の後ろから、盛大な溜息が聞こえてきた。

「…厄介なことになりましたね」

生徒会長がなんでここに！？

「彼はこんとこに・・・

「編入生！？」  
「！」

「そ。なんかおんなじクラスだそつだから、その、よひしべ

同じクラス、そしてこの出来事……。

そしてこれを週明けまで私と生徒会長と特務科のミナコ先生と薰と  
補佐役の双子しか知らない……。

「運命の人」

「?なんか言ったか?」

「いいえ?なんでもないわ。こちらこちらよろしくね?紅姫クン!」

絶対にものにしてやるわ。彼を。この手で。

そのためには誰よりも彼と近くならなくては。だから下の名前で呼  
ぶ。一歩リードする。

私は始めてこの学年トップの頭脳を、勉強以外のこと回し始めた。

とても楽しくなってきた。

今日は、たくさんの人と知り合つことができた。

俺としては、かなり頑張った一日だ。

明日は早速鍊金術の補習だ。

勉強の方は、むしろシリウスのほうが早いくらいだが、鍊金術はそもそもそんな教科がないんだからしょうがない。

ミナコ先生張り切つてたな。

死ななきやいいんだけど。

あとバイトも決めておかないとな。

仕送りなんて全くないし。貯金はかなりあるが、手をつけるには気が引ける。まあ特務科に入れれば奨学金で授業料免除だそうだから、それまでは努力していくしかないだろう。

とにかく、死ななきやいいか。ね？アリア、カトレアさま。

俺は何もない部屋で窓から見える星を見ながら、そんなことを考えていた。

## 第一話・ワルツ

朝。

寝汗をかいた髪を搔きあげ、自然と田が覚める自分に驚く。

・・・が、睡魔が俺を優しく誘惑する。

いやーんもーと寝て行ってーん

わかつてゐる睡魔よ。俺はお前を置いてこくなといふことが。

れあもう一度行くひじやないかー夢の国へー

「・・・それは一度寝とまつりのやつ」

そつすね。

昨日は星が輝く窓も、今は鮮やかな青が眩しい。

晴れた日の朝は、なんか興奮するよな。

「・・・今何時だと思つていらっしゃるんですか?」

「ん? 朝の8時・・・つて! 朝の連続テレビ小説始まつてんじやん

やつべー見逃したら付いていけなくなつちやー

!」

テレビのチャンネルを探す。（リモコンなのに、チャンネルと言つちやうの。秋田は田舎なの）

「違います。今朝はあなたの登校初日の日です。ちなみにすでに遅刻してゐるんですが」

・・・登校初日？

遅刻？

「おいおい坊主ー朝礼もう終わつちまつぞ？」

キッチンで勝手に食パン焼いて食つてる薫さん発見。

ん？ちょっと待て？

「なんで勝手に人の部屋に入つてるんすか！？」

「いや、今気付いたのかよ・・・」

「あなたが約束の時間になつても現れないため電話をしたんですが  
出ず、仕方がないので寮まで来たらなんと不用心にドアが開いていたため、一抹の不安と寝坊の確定したあなたへの制裁に対するワクワク感を胸に入つてみました。」

無表情かつ冷めた声でこんなことを言われても、反応できない。

まあ声が笑つているから[冗談だらうけど

「まあでも起しそうとしたら、寝顔にノックアウトされたつてか？」

## ケラケラケラケラ

わ、笑い方豪快だな。

「薰……余計なこと言わないことを強くお勧めします」

「ん? 私はノックアウトされたけど?」

「私は至りてやつこつたことはありません。勘違いしないよう」「またまたそんなこと言つちゃつて! 頭から水蒸気噴き出したの誰だつけ?」

「薰? 私の話を聞いてました?」

いや、その前に何の話?

「あの、遅刻じゃないんですか」

「ああ、いいんだって! 遅刻の原因は編入生君の寝坊つてことになつてるし? ケラケラケラケラ」

〔冗談じゃない! なんて恐ろしい女の子だ!〕

「寝てもしつづけ…」

「急ぐのはあなたです。」

「坊主、朝飯食ないともたねーぞ?」

ベットからはね起き服に手をかけ……

の前に、

「着替えますから部屋から出でていって下を……」

あ、昨日の補習の筋肉痛がつああ

「[イ]がおまえの新しいクラスだ。初めが肝心だと聞く。外さないよ[イ]にな」

「[イ]を振り返って美奈子先生が一ヤリと笑う。

「ハーダルあげないでください」

教室の上には【2・[イ]】の文字が。[イ]が俺の新しい出発点。

昨日買ったメガネをクイッと上げて、しつかり前髪を梳かしておく。

気合を入れて、行きましょう。

ガラガラガラ

「はやく席に着くんだ。はい、起立……」

気をつけ一礼一おはよ[イ]やこまするどきに行つてもおんなじのあいさつ黄金律を決め、みんなが席に着く音を聞く。

「いよいよだぞ、俺！はずすなよ

手に何度も精神安定剤を出す。いや、これはだめだ、でも飲まなきややつてらんねえ・・・っ。

「えー今日から、編入生が来ることは言つてたよな。入つてくれ！」

・ かっちはつちのまま、教室に入る。うう・・・みんなの目が痛い・・

「いんにちは、陽乃 紅姫です。ベニヒメって書いてハカキって呼びます。よろしくお願ひします」

黒板にチョークで名前を書きながら決めた、自虐<sup>じゆ</sup>の上ない掴みを発動する。

—  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

あら？ 反応が…

笑つてたよね？俺。

—

アリア、どうやら俺は編入初日から外したようです。

「せ、先生・・・編入生つて、男の子?」

「そつだ。仲良くな

「ちゅうとヨシ！あんた地味田の娘つて嘘じやないのよー。」

「違うわよナナアーあんの双子がああー。」

「でもなんか超前髪長くね？」

「つーかメガネと前髪で顔見えねーし」

「なんかすつ」とい地味田なことは当たってるよね、ヨシ」

「なんか男の子って新鮮ー」

以上、俺の知らない所で行われていたガールズネットワークでした。

「フツ、やっぱりあのままでいう私の考えは当たったようね。ここで一気に私がアプローチをかけることで彼に大きな印象を与えると共に、他のクラスの連中が話しかけるきっかけを作ることで潜在的な部分での仲間を作りやすくしておけば・・・クックク

「」「この前はありがとう

「ん？ああ、確か木葉さんだっけ？」

HRになつてアヤノ先生と薰さんと八雲さんが出て行つてから一人寂しく机にポツンしていた俺に、背中から声がかかつた。

「うーむ、JJKやつて見るとななんかす「」いかわいいな、この人。

「うふ、」ウカキくんは前はJJKしていたの？」

長めのボブのゆるしながらわづげなく俺の前に座る。

うん、女の子万歳。

「秋田の方から来たんだ。木葉さんはもとからJJKの人？」

まあ群馬出身つてのも都会と言つて良いものかは知らないが。

「ううん。東京なんだ」

「そりなんだ、俺修学旅行でいつたことあるんだ」

「修学旅行ね・・・」

「楽しかったんだよねー建物おつきくても、焦つた焦つた

思い出を熱く語る俺。東京はでかい。なんせ首都だ。

「くつアツハハハハ

「なんだよー！笑わなくたつていいじゃないか

「だつて、建物つて・・・アツハツハハハ

むつとしてる俺だが、笑っている木葉さんはかわいいから、まいつか。

「なにに？木葉もうなかよくなつたの？あたし田嶋奈々子。よろしくう？」

「あ、ナナずるいー。よろしくね？陽乃くん。あたし喜子つて書いつの。漢字ダツセーから四シド四口」

「うおう！なんか元気よさげな女の子達だな・・・

「あ、よろしく」

「ちよつとちよつと！ナナ、ヨシマジ邪魔なんすけど」

「うちは力四！」

「えつとえつと水瓶です。よろ・・・「ちよつと//キそんなんじや  
だめだつてーあ、私キヨウでつすー」そんなあ、かぶせないでよ  
おー！」

「お？なんか人だかりが・・・

「つーか秋田から來たんだー」

「メガネとつてー後前髪もー！」

「なんでこの学校にきたん？」

「ん？ん？ん？ん？んー？」

「ちよつと他のクラスの奴來てんじゃねーかよ

「まあいいんじゃない?といつより陽乃クンー!」だけの話、彼女いんの?」

「いや、いないんですけど・・・」

アリアは幼名馴染みだらうし、カトレアをまもそだ。

あ、ちなみにカトレアをまつて言つのはシリウスの・・・まあ絶対的トップの四天空の一角、ネプトゥーネス家の一人娘で俺とアリアの姉代わりで近所さんだつた人だ。ちなみに一歳しか変わらないが、俺より背が高い。ちなみに特務科の皆さんも全員高い。

まあ詳しく述べ、機会があれば。

「いないですけどあ?いないけど、そう言つた対象の女の子はいたんだねえ?」

なんか木葉さんがピクッとした気がするが・・・

「いません!生まれてから一人もいません!」

「まあいいだらうな

「ハウツ」

ナナさん、刺さります。

「はいはいはーい質問しつもーん!」

「わたしも～つていうかメガネ外して～！」

「ちよっとおわな」でよー！」

「いぬせえな～やんのか？」

「怖じよお・・・誰か助けちゃくれませんかあ

つてか女の子つてこんなに怖かったか？ん～怖かったな。

つてなんか人おおすさるよ！

どうにかして――――

「いや私がやんわりとやばくない？みたいな雰囲気を作りながら彼を助けるようなしぐさを見せる―完璧よ。

いま私には一人の幸せが見えるわ・・・

「ねえ、みんな？ちょっとこれは ガラガラガラ 「おいおい…さつさと席に着かんか！一時間目のチャイムは鳴ったぞー」 チツ・・・

「

「やべー死にかけだー！」

「ゾンビ足速やいからな」

「撤収！撤収！」

それきまであんなにたくさんいた人だからが一気に散つていく。

いつ言った所はむしろ感服する。

にしても失敗しちゃつたじゃないのー。たぐあの歩く寿命の神秘め  
!まあいいわ。策はある。

フツフツフ

机上の理論は完璧よ。

「・・・すいません遅れました」

「遅れまつしたーさーせん」

フツフツフツフツフツフ

ハ雲はイライラしていた。顔には出さないが。

編入生の彼を迎えてから一週間。

まあ一応やじつまの方は減つたのだが、問題は彼のほうにあった。

バイトは寮の下の階で営む定食屋らしい。何回か行っている・・・  
とこうか常連の場所なので気にはならないし、毎日きちんと鍊金術

の補題を受けてくる。

だが行く先々でちやほや&特別扱いされてなんとなくいい気になつているような気がするのだ。

なんとなく同じクラスの木葉さんといつも一緒にいるし。

それが一番気になつた。

なんでこんなにもイライラするのかはわからなかつた。

ただ漠然といやなのだ。

「これが・・・恋といつやつでしようか。なんてね」

ただ、そういう可能性は自分でもあるのかもしないと思つてゐる。なんせまともに話した男の人は父と使用人を除いて彼が初めてだ。

「おーい八雲！次は鍊金術の日だら？·さつと行こうぜー。遅くなつたらまた遅刻扱いされちまうべ」

「わかっています」

まあどうあえずこのイライラを彼にじぶつけるとしまじょ。

ほつゝほつゝしてやります

毎週金曜日は午後いつぱいを使って鍊金術の授業だ。まあ実は一回目なんだけど。

「この前は木葉さんと組んだから、今日もそなうのかな？」

「『ウキくん！また私「陽乃紅姫クン、私と組みましょう」と……なんでもない』

「ん？今日は生徒会長と？」

「いいですよ。でも相手になりますか？薰さんじゃないと大きがするつてこの前言つた気が……」

「いいんです。今回は私が陽乃紅姫クンの成長をチェックさせてもらいます」

そういうと生徒会長はボクターをリリーズした。

なんかいつも増してオーラが禍々しいような……

それにチェックってあの時の痛い記憶が……

「あの、フルネームはちょっと勘弁してもらえませんか？」

ボクターどうしで軽く組みながら話す。

「なら何と呼びましょうか。『ウキくんは既に使用済みですし陽乃くんでは新鮮味に欠けます』

「いや、なんでもいいですよ？」

「なら紅ちゃん？」

「バブー……って違うでしょ！」

「いい反応です。そうですね、では姫は？」

「いやです。それにどう考へても俺男でしょう？」

姫って・・・変態じやん俺。

せめて向こうでもお姫様くらいの悪口だった。

「嫌がる姿勢が気に入りました。私は姫と呼ぶことにしました」

「えええ！？」

「いい反応です。ますます気に入りました」

「えええ？決定？ちょっと待つてくれ！恥ずかしそうるー！」

「それでは姫。さっそく模擬戦に入りましょう。チヨック開始です」

なんか口調が怖い。

嫌な予感しかしないが・・・

「突破衝対貫！」

「ギヤアアアアアア！」

武道鍊金術の基礎、突破の一対一用術らしい。通称「式」。食らうと  
氣絶するが、まだ体外鍊金を応用しきれない俺にとっては必殺の一  
撃だ。

「コ、コウキくん！何か出でるー・出ぢやつてねー」

「ケラケラケラケラ！ おまえサイエーだな！」

「やめにやめに！」なにをじている！」「どうした陽乃！」

だれか戻して！早く戻して！

いやだよ船頭さん！まだそろそろちには行けないよ！

「ふ、スッキリしました」

すんなよ！



## 第一話・ワルツ（後書き）

女子高生R：「というわけで、紅姫クンが元女子高のオリオン大学付属学院高等部【きさらぎ】に編入いたしましたー！」

女子高生P：「ヒノリあんた誰よ？」

女子学生R：「作者さんから」の作品の人物の調査と紹介を頼まれた2-Cの良心、ナナさねー！」

女子学生P：「ナナかよー」の部屋暗くて顔わからんないってーちなみにヨシだかんね？」

ナナ：「しょうがないじゃない？ 身内を調べる仕事なんだし。面割れたら次の鍊金授業で公開処刑だよ？」

ヨシ：「怖！ そんなリアルな単語使わないでよ！ ……っていうかその調査つて仕事は私のキャラを立てるために用意された仕事だと思つてたんですけど」

ナナ：「邪魔だけはしないでよー？ 失敗したらたぶん作者から出番減らされんよ？」

ヨシ：「ええ！ ? 今後ヨイ役が予想されてるのこそりこ減っちゃうのー？ 勘弁してよ！ 一話毎の読了時間平均一分未満なんて悲しそうやんよ！」

ナナ：「その数字のほうがリアルで怖いわ！ ヨシ！ 次からばつちつ

紹介できぬまつた謹んで上げておへわよー。」

ミシ：「了解ー、つていうか紹介できなきゃ消されて、調査バレテも消されるんだね・・・私たひ」

ナナ：「カヨウ達よりマシよー。まあ失敗したらあの子ひに回るんでナナ・ミシ：「世界一こせな引き継ぎ作業ね・・・」

ナナ・ミシ：「次回からわたくし紹介を始めますー。お楽しみに。。。・みんなさよなら、ビバババヒー」と云ふ。」

作者：「なんかこういつのつて書いて少し寂しくなつてへるよーな・・・ハツー向でもないぞー!なんでも・・・」

次回＝紅姫の毎日？お楽しみにー

## 第一話・ワルツ第一樂章

それからついに一週間が立つた。

鍊金術の応用に入つてから生傷は増えるしなんかハ雲さんはピリピリしてるし薰さんは俺のバイト先の定食屋【オタメ】でバカ食いしてつけを溜めていくし、木葉さんはたまに俺を危ない田で見てくるし何回もヨシさんとナナさんにメガネ取られそうになるし・・・はあー。

そして今日の補習は第七グラウンドにて四集。しかも特務科との正式な配属訓練だ。

つーか特務科って何かをまだ聞いていない。

そんでもって、なんでも第七グラウンドはこの学校の地下にあるやうな。

しかも今日はいきなり実戦訓練。楽しみで楽しみで涙が出てきたよ。

でも・・・

「・・・迷った」

「ヨリビーッだ?」

たしからせん階段をひたすら上つて来たからこゝは地下のはずだ。

でも田の前にはどう考へても相当長い間使われていかない雰囲気の鎧

びついた扉。

「まあでも入ってみないとわっかんないよね」

ノブを回せうとするが開かない。

パスワー・・ド・・ヲ、ニコ・・・ニユウリョクシテク・・・ク  
ダサイ

明らかににはグラウンドではない。それはわかっている。だけども気になるお年頃つてやつだ。

「それにパスワードって響きは男を狂わせるのや」

自分でも意味のわからない言い訳をしながらドアの隣についてるパスワード照合機に手を伸ばす。

たぶんボイスが出たんだからいつも動いるはずだ。

「それに22桁のパスワードが合づわけがないしね

多すぎだろ数字。

まあ適当に入力する。

「適当適当。えっと、09121521051324182118  
つとー」

ん~我ながら適当だ。会つわけないな。

パスワード照合完了。ドアガ、開キマス。「注意クダサイ

「つおー当たつた！ それになんか声も元気になつてるー！」

ドアからカチリとドアの開く音。

ガチャ

「失礼しまーす・・・って汚い！」

部屋の中は、なんとなく研究所だつた場所のようだ。。

だつた、と過去形なのはあまりに時間が立つて錆びついてしまつて  
いるからだ。

それにほんどの物という物が壊れていたり倒れていたり。かつて  
火事でもあつたのか焦げてしまつているものもある。

そんな研究所だつた場所・・・。お化け屋敷っぽくてわくわくすん  
ゾ！（悟空風）

「探検探検また探検」

そういう広い場所のようだ。どんどん奥に広がつていてる。

開かない扉はボクターでふつ飛ばしながら進む。

まつ暗闇だけど体外鍊金のおかげで十分に見える。

まあ体外鍊金とは、体に靈力を纏うことです。一話参照。

何個かまだ生きている機械があるようで、じつやうそれらの機械があの入り口のロックシステムを動かしてこるよつだ。

電源来てるのお驚きだけどね。

どんどん進むと、開けた場所に出た。

さつまでは歩く場所がないほど機械でびっしりだったのに、この部屋にはまったくない。

その代りにひときわ大きな真っ赤な扉がそびえ立っていた。

パ・・・パスワ・・・ワードヲニユウリヨクシ・・・シテクダサ  
・イ

おおう覚えてねえ！読了時間2・3分程度戻つて見てこなきや！

口に出しててよかつたあ

「ええつとなになに？『パスワードって響きは男を狂わせるのさ』・  
・・つてここじゃねえ！んつと『そもそも22桁』・・・つてそこ  
でもねえ！んつとあつたあつた！『09121521051324  
182118』つと」

パスワード入力完了です。アリガトウゴザイマシタマタオコシク  
ダシマセー

もう来ねえよ

その部屋は、明らかにほかとは違つた。

空気が違つ。造りがちがつ。そしてなにより

「なんだ? なんで俺はこんなにも・・・」

胸の奥でなにかが震えている。なんだこれは? なんで俺はこんなにも・・・

「こんなにも靈力が共鳴してる? いつたい何があるんだ?」

その先には、たしかにそれがあった。

丸い台座の上に大事に置かれ、さらにその上からガラス・・・いや、靈力強化ガラスをかぶせられたケースに何重にも包まれ、それでも光と闇をその身に載せながら放つ深紅の輝き。

「籠手? ・・・いや、手甲?」

幾筋もの飾り彫りと窪みにルーンの文字。間違いなく魔導具だ。

その輝きから目を外すと、ケースの側面は古代ルーン文字で埋め尽くされていた。

「なになに? えっと・・・ああ、これは動詞活用か! そうすると・・・【】の宝戒に触ることなかれ、求めることがなかれ。触りし者求めし者、その身をもつて禁忌となし、無限の苦痛に囚わるであらう。この宝戒、選ばれし者を選びし物。その身に女神の祝福あらんことを。その身の全てを解き放たんことを・・・】だつて?」

あいかわらずルーンは言いたいことがわからない。もっと単刀直入にいけよ。

「でもどいつてこんなところに魔導のルーンが？」

「それはかつてそれがこの場所で研究されていたからです」

ビクウウウウウウウウウウ

「ヒヤウツー や、ハ雲さん！？」

そこには確かにハ雲さんが立っていた。

「・・・ そんなに驚く」とですか？姫の鍊金の余波を辿つてきただけです」

「ああ、なーんだ。この前の頭殴られたショックで幻覚見えたかと思つた。

「その・・・やつきの研究つて？」

「そもそもその赤鐵甲は、コントラクトのない供給者にコントラクトを附加せることができる物だそうです」

「えええ！…そんなことが可能なんですか！？」

コントラクトとは、そもそもそれ自体がいまだに解説されていない不確かなものなのだ。解説されていないから、俺は苦しんだ。附加せらるなんて不可能もいいところだ。

「私はその場面を知りませんし、そもそもこの研究中にも一度も成功していないようです」

「まあ、幾人もの犠牲者を生んでしまった、歴史に消えた悲しい兵器ですが」

犠牲？まさかそれって・・・

「姫は天精戦争って知っていますか？」

「ええ。」

天精戦争・・・5百年前に起こった、今よりも数百年先の技術を有する天亩種族と名乗る者たちと、今の精靈魔導士の原型となつた精靈騎士団と供給者達の、十年間続いた歴史上最大の戦争だ。

確かに勝者は精靈騎士団だった気がする。歴史は苦手なんだ。これ以上解説できない。

「その戦争のいわゆる末期、天亩軍は精靈騎士による圧倒的な魔導攻撃により壊滅の危機に立っていました。そこで天亩軍はその技術の全てをかけてコントラクトを開発することを決意します」

そこから先はだいたいこうだ。

一人の協力者から取れるだけのデータを取り、それをもとに急ピッチで開発を進める。

そして一年の歳月をかけて遂に完成。もうほとんど壊滅寸前の天亩軍にとつては正に救世主だつた。

しかしへじで予期せぬ事態が発生する。

天宙の技術者たちは、焦りすぎて人体実験をすっぽり抜かしてしまつていた。

しかしもつ時間がない天宙軍は強制的に実戦投入するが誰一人としてまともに使えなかつた。

それどころか次々とその激痛と浸食で人格崩壊していつてしまつた。

そしてそういうしていりうちに天宙軍の首都が陥落し、戦争は終結。研究所はその兵器と共に土の下深くに埋められてしまつた・・・そうだ。

「まさかその兵器がこの紅鐵甲で研究所つていうのが・・・」

「姫は勘がいいですね。そう、じじです。そもそもオリオン都市とはこの研究所を悪しきことに使わないように監視・保管するために作られたものですし」

そんなものがあつたのか。

「でもなんでハ雲さんは知つているんですか？」

「生徒会長にでもなれば、知つてて当然のことです。まあこの秘密は私を除いて学院長と一部の教職員だけしか知りませんでしたが。姫も知つてしましましたね」

「まさか、秘密を知つたものは・・・」

そんな、まさか！

「消されます・・・なんてそんなことがあるわけないでしょ？バ  
力を言つてないで第七グラウンドへ行きますよ。迷子さん」

ああ、からかわれてばっか。

知つているふうならさつと連れていけばいいのに！

第七グラウンドに到着。野戦場よりは狭いし障害物も少ないが、確  
かに実戦訓練には向いている場所だった。

八雲さん曰く、つい昨日補修工事が終わったそつた。キレイだ。

「遅すぎるぞ陽乃！昼休み終了と同時に始めると言つてあるだろ？  
！今何時間目だ？6時間目だ！今日はさらにじっくりやる！」

「いや、迷子になつていたんですつてー！」

「バカかー！」は校庭から階段降りてすぐの場所だぞー迷うわけが  
ないだろ？ー

いやでも・・・

「先生、姫は方向音痴です」

「だーから言つたら？マジなんだつて

アリガトウハ雲さん！ 薫さん！ 涙が・・・涙が止まらないよ！

「まあ今回はどうも故意だったようですが」「

「おまえ、向こうちやつてんだよ。」

「やはりな。  
許せん」

おえ？先生！それボクトージャなくね？ねえ！」

「今日は私の実戦用の鍊金核を見せてやろう。リリーズ！」

片手に持っていた明らかにボクターのそれよりも長いISが発光する。

「その名も【金剛剣】だ！」

ブワアアアアアつと波動を飛ばしながら現れたその鍊金核は、その丈俺と同じくらいはありそうな長さ、そして悠然と光る金色の両刃。

「普通なら振り回すことなんてできないが、体外鍊金の力でこの通

そのままぶんぶん振りまわす。なるほど、これなら十分集団戦にも  
一対一にも使える。

「さあ、実戦訓練だああああああああああああああああああああああああ

!

できるか！死ぬわ！

ポニーテールを照明に照らしながら振りかぶるミナ先生。

ああ、もう・・・なんと言つか・・・

夢でありますよ！」

「ケラケラケラケラ！ なんもん使っちゃダメだろセンセー・リリー  
ズっと！」

ガキイイイイイ

「む！ 薫か！ 邪魔をするな！」

うつすら閉じていた目を開くと、目の前には薰さんの流れるような体が。

その手に握られた一本のトンファーで先生の一撃を食い止めてくれたようだった。

「なん」と言つたつて・・・そんなもんでいきなりぶつ叩いたらいくらく坊主が体外鍊金をマスターしてもたんごぶじや済まないって

ガキンッ

そのまま間合いを取る一人。

「ばかだな、薫は。戦闘とは常に急を要するもの。咄嗟の判断がその身を守るのだぞ！」

そのままとつあえず金剛剣を戻してくれる先生。よかつた……

「んな」と言つたつてな・・・坊主がほんとに実戦に立つのはまだまだ先なんだから。ゆつべつやつてかねーとマジで死んじまつぞ？』

「ぐつ・・・まあ、それもそつだな」

ああ、なんだかんだで薫さんは俺に優しいんだよな。気にかけてくれるといつか。

それに先生もなんか薫さんの言つことを聞くつて言つた。といつかハ雲さんも茶化していたよな、薫さん・・・つ、強い・・・

「あ、ありがと」「やれこまく」

「いいつていいつて。まあ坊主も坊主だぞ？あのくらにならずぐりリーズして避けるなり受けるなりしねーと。こくら靈力や才能があつても意味がねーぞ」

「すいません・・・」

あのくらつて・・・マジで死ぬかと思つたんだが。

しょぼーん

「ケラケラケラ！坊主は本当にかわいいなあー。だっこしてやるから泣くなつて！」

「うつこつひよこつと持ち上げられる。

「「つまつー・つまつと薰さん・おうじてくださいこー。」

は、恥ずかしいやうやら……イヤアアアアアアアアア  
そんなに下へくないのこー平均よりもすうーーつし小をこへらこな  
のこー。

「「ちよつと薰ー・なこをしてくるんですかー。」

「おこ薰ー・ちよつとおまえがそんな態度ではないかー。」

「ケラケラケラー・長身の特權つてやつだな。逃げんぞ坊主ー。」

そのまま俺を……今度はお、お姫様抱っこしたまま走り出す薰さ  
ん。

「ちよつとー恥ずかしいですこー・おうじてくださいこー。」

暴れよつこも薰さんの掛けた加重鍊金のせいで体が動かない。

まあでもなんか落ち着く……つてそんなのダメだろー流されるな  
俺！

「文子びおつお姫様とこつわけですか薰……リワーズ」

「わあー八雲さんがリワーズした！

「姫むらとむるの【トライデント】の鎧にしてあげます」

三叉槍！？

「薰？陽乃？真つ一つに呪を割つてやるぞ！」

# 金剛劍！？

「薰さんなんかヤバいですよ！？」

「ああ、そうだな。」のケトウンエジツを狭すれる

え？ちよこと待って！外には出ないで！ダメだって！

ある人、就業中なんだから大丈夫だよ」と

「生徒会長にならうとするやつがいるね！？ どうでもいいね！？」

・・・ああ、階段を昇り切つてしまふ・・・後ろの二人は目が据わつてゐる

「ケラケラケラ！坊主！加速すんぞ！つかまつときな！」

ガクンツ

そのまま俺はお姫様だつこのまま音速の壁を突き破つた。

氣絶した。



## 第一話・ワルツ第一樂章（後書き）

パンパカパーク

ナナ・ヨシ「オリオン調査レポート報告会略してオリレポート始まるよー始まるよー」

ナナ「さあ始まりましたねオリレポートのパートナーは後書きを利用してこの物語の補完・・・もとい紹介をしていく・・・」

ヨシ「私たちの存在意義をかけた」「ナーーです！」

ナナ「あんた・・・間違つてはいないけじ重こわよ」

ヨシ「だつて~ほんとこ出番無くなっちゃうかもだよ?」

ナナ「そつないなによつて調べてきたんでしょ~? さあヨシへ栄える第一回のテーマはー?」

ヨシ「今が旬! 越中かに道楽食べしきの旅パート4でっす!」

ナナ「スルーします。もう一回やべ

ヨシ「す、すんません・・・はー今回のおテーマはー」

ヨシ、フロップを取り出す。

ヨシ「ドンーオリオン学園都市案内パートーーでーす

ナナ「なるほどね。まあフリップの意味はまったくないんだけど」

ヨシ「気分の問題よー。さあ始めるわよー」

ナナ「OKー。そもそもオリオン学園都市は、大学を中心として四つのブロックに分けられています」

ヨシ「真中に大学の巨大ビル群。工学部系から専門学まで、全てがここで学べます。まあアメリカの摩天楼を切り取ったような感じでっす」

ナナ「そこから北に見た場所が、中等部ブロック。山沿いに加えて狭い場所のため、長崎風の坂の多い街になつてます。オランダ坂ならぬオリオン坂や、路面電車の走る、日本と異国が混ざつた街並みです」

ヨシ「西に行くと初等部ブロック。駅と寮棟のある広めのブロックで、駅デパートや外部系のショッピングが並ぶ参道もあります。下手な町よりもよっぽど充実してるんだって」

ナナ「まあ高いんだけどね~。グロス一本ここで貰うならオリヨン（ディスカウントショッピング）で3本は買えるし・・・」

ヨシ「えっと、寮棟はかなりたくさんあつて、学校別なのが基本なんだけど、グレードによつて入れる寮もあるんだとか。一応完全寮制だからお嬢様とかが入る前部屋スイートとかもあるんだよね・・・ちなみに私とナナは【きさらぎやう】で、まあ平均的な家賃（食費こみ）かなあ」

「

ナナ「わ-----わ-----けつじゅうりんな  
人見てるんだから言ひちゃダメだつて…」

ヨシ「つていうかなんでカイチョーがいんの?」

ハ雲「さあ・・・?」

ナナ「わては尺の問題で作者に凹撲されたな・・・」

ヨシ「ナナ、リアルだね」

カンペ『終わらせます。かつ』よく締めてください』

ナナ「無茶ぶりだな・・・ヨシー昨日徹夜で考え方行くよ」

ヨシ「OK!」

ナナヨシ「次回は・・・」

ハ雲「次回はオリオン学園案内パート2です。またお会いしましょ  
う」

ナナヨシ「…そこで取るか普通!」

作者「次回は少し遅くなるかもしだせん。根性出して更新がんばります!お楽しみに!」

## 第三話・ワルツ第三樂章

それからせりに一週間

といつかこの小説なんか一週間刻みに物語進んでる気がする。

まあ一か用がたちました。

言つてなかつたけど俺が転校してきたのが四月の中頃だから今五月です。

アリアには、まだ一回しかメールを送つていない。

メールつて、意外と難しい物だ。電話よりは簡単だけど。

生活にも、だいぶ慣れてきた。

部屋には、物が増えた。なによりバイト先からもらつお惣菜で冷蔵庫の中身が増えるのが、うれしかつた。

けつこう自分の中で、整理がつき始めているのかもしれない。

バイトはつに薰さんをつけを払つてくれた。（半分）

勉強は相変わらず学年トップの木葉さんが教えてくれて助かつてる。

その他の私生活は八雲さんのサポートでじつにかなつてゐるし

鍊金術のほうは・・・先生の指導のお陰で?まあつこに基本的応用

の最終段階にまで来ている。今度俺用の鍊金核が渡されるんだとか。特務科色に染まつてきている。木葉さん曰く普通は自分用の鍊金核は3年の卒業式の時に渡されるそうだ。一段飛ばしどこかじゃないな。

そんな毎日だった。

何事もないことを、何事もなくこなせるようになることが、なにより難しいことなんだと勉強になつた。

自分は変わつてきている。そう思えた。

この世は、精霊の住むと言われる精霊界と人間界で構成されている。人は精霊界への門をその靈力と奇跡の紋章コントラクトで開き、精霊を呼び出す。

そつすることで力を引き出し、創造し、破壊してきた。

精霊と人は親子のようなもの。そしてその構造がまったく違う精霊には触れられない。

それが千年前、いやそれよりもさらに前から定められたロジック。概念。

では、コントラクトのない者には精霊は呼び出せないのか？

答えはノーだ。

人はその全てが靈力を持っている。

そしてその靈力がある限り、精靈は出てきてしまう。

それが例えば一人の強い欲望、憎しみであつたり大勢の人間の一つに絞られた願いが重なつたときなどだ。

それが野生精靈。前者の場合はそこまでの力はないが、後者の場合はそのものが神として現れる。

野生種はこの世界にあふれていることを忘れてわいけない。

野生種に世界のロジックが通用するとは考えてはいけない。

その日はよく晴れた木曜日だった。

何の変哲もない日常。

だがこの一週間、どうもミナコ先生達が忙しそうな気がした。

あんなに毎日あつたはずの補習も休みになつてゐし、定食屋に薰さんが来なくなつた。

八雲さんも生徒会室に籠つてゐるし。

なにがあつたか聞こうにも、遂には授業にすら来なくなっていた。

「マドカ（木葉さん。名前で呼ぶようになりました）は特務科は特別だからと言つていただけど……」

「ひらひら陽乃クンへ 授業中に外を見てるなんて余裕ねえ？」

やばっ

「ならこの問題余裕で解けるわよねえ？」

席替えで隣になつたマドカに、アイコンタクトで救いを求める。

「『めん、あの先生教えたりすると後が怖いから……』

申し訳なさそうに手を伏せる。

孤立無援とはこのことだ。

どうつでこの授業のときはヨシもナナも大人しいはずだ。

「ええっと……その……」

クスクス笑いがそこかしこから聞こえる。

「まあ早く答えて～？」

くそーこの女ゼッテーノードだ！

ビー

-----

そのブザーがスピーカーから聞こえた瞬間、教室の空気が凍りついた。

みなさんには報告します。大学の施設部隊が野生種の討伐に失敗しました。最終防衛ラインギリギリまで接近して来ています。ただちに3年、2年生の選抜者は所定の位置に付き、その他は地下グラウンドに避難してください。繰り返します・・・・・

こんな時でも淡々と放送するハ雲さん。

でもクラスの中、いやこの学園都市全体は大パニックに包まれた。

「いそいでコウキくん！地下グラウンドに早く逃げて！」

マドカに手をひかれながら地下グラウンドまで引っ張られる。まわりはもう騒然だ。泣きだしてる生徒も一人や一人じゃない。

「マドカはー？マドカは地下グラウンドへの避難なのー？ナナは？ヨシは？」

「私は地下グラウンド警護だよ！それより急げ！編入生の「ウキは所属無しだろ？」

ナナの怒声にも似た声が聞こえる。

そのまま地下グラウンドに放り込まれた。

俺のほかには1年生と2年生が半数くらい。最後の一人が来て全員が集まつたことを、たぶん担当の職員であるつ中年の女性が、青い顔で点呼を取りどこかへ連絡をしているところで、門を閉めにきたヨシ達と曰があつた。

「野生種つて…」  
「はい、つづいてよべあることなの…？」

ヨシの顔は真っ青で、いつもの元氣さは欠片も感じることができるなかつた。

それでも彼女は片手に鍊金核をぎゅっと握っていた。

「ううん。たぶん、この学園ができて以来、はじめてのことだとおも」

「そんな！無茶だ！いますぐ逃げた方がいい！」

「うん・・・でも、みんなを守るためにには私たちが戦わないと…大丈夫。」  
「ウキは私が護つてあげるって！」

その一言を最後に扉は閉じられた。

俺は、その瞬間のミシヒナナ、マドカに、アリアを思い出した。重なった。

静寂。静まり返った空間。でも冷静さとは無縁の場所。

みんなまだこの状況を、整理しきれていないのだ。茫然自失。恐怖はまだ彼女たちにとつては先の感情だ。

「無理だ！・・・俺が？そんなのもっと無理だ！できない！おれには・・・できない、だろ？」

問う相手を探しながら問うてみる

「でもしようがないじゃないか。力がないんだから。力なき者は力がある者に守られる義務があるんだから。」

答えるべき相手を求め答えてみる。

そのまま床に座り込んだ。

まわりは誰一人として唯一の男子学生に注目をしなかつた。

みんなその身を寄せ合つて震えていた。

それを見て俺に何ができる？

頭には言い訳ばかりが浮かんでは消えていた。

生徒会室は一時軍事基地の本部のようになっていた。

もちろん長官が据わるような場所には校長ではなく生徒会長である私が座っている。

「会長、全員が避難を終えました」

さきほど防犯カメラでチェック済みだ。姫も逃げたようだし・・・  
「大学側からの連絡です。最重要の西ブロック防衛のためこちらに手は回せない、野生種を全滅させ次第南へ向づ、耐えてくれ・・・だそうです」

初等部があると同時に中核部に連なる重要なブロックである西地区を力のある大学が護る。一見当然のようだが、事態はそこまで深刻化していくところだ。

「仕方ありません・・・山に面している北と東の人員を全てこちらに回すよう要請してください」

なぜなら普通大学が全てを防衛するようにシステムされているからだ。マニュアルもそれを前提に定められている。

「まだ防衛システムは作動しませんか？」

「いま行っています！ですがもう少しかかるかと・・・」

それはさつきも聞いた。ため息しか出でこない

野生種は加減を知らない。人を殺せないと以外はその全てを破壊のために行動する。

「発生源はここより北に約5キロのあたり。下の村はもう不幸だつたとしか言いようがないな。まああいつらだつて獣。精靈魔導士や鍊金術師の多い都心や街を避けて山奥の方へ来たのだろう・・・」

何の抵抗もできない人々はいつたいどんな気分で破壊されるじぶんの村をシェルターから見ていただろうか。

想像を絶する世界だわい。

「まあ八雲くん。いくら避難がはやく済んだとしても、私たちは初めてに近い野生種との接触だ。こればっかりはどうにもならんよ」

「防衛ラインの人員、全員所定の位置についてます」

「全ての教職員、並びに特務科2名に連絡をいれてください。ミナ」「先生によりますとあと5分で臨戦態勢になります。」

時間がなさすぎる。こんなにも野生種とは賢いのだろうか?野生種用のトラップがそこらじゅうに仕掛けられているといったの!-

「わしらだけで防げるのだろうか・・・。こんなこと、じいじで教師をしているが一回もなかつたぞ」

「それは大学が賢かつたからでしょうね。・・・出来なくて死

にほじないでじょりがこの学園都市が壊滅するのは確かですね

その一言で部屋の中はさらに重い空気になつたが、本当のことだ。

「今わざわざできるのは、生徒と教員を信じるだけじゃの

どりじめもないのだ。多分、私の予測が正しければ・・・

野生種は、現れた。

その圧倒的な存在感を滲ませながら。

それも一匹ではない。何匹いるのかもわからない狼型の群れだ。

第一防衛システムの防御結界はやすやすと破られ、第一防衛システムの対精霊用の鍊金防護壁が破られるのも時間の問題だろう。

まあ十年に一度でるかでないかの野生種のためにそこまで充実した装備は望めない。

最終防衛ラインを覆いつくすように集まつた鍊金術師たちをまとめ上げながら、私はもう一度探索を始めた。

敵の数は・・・200。まだまだ増えている。

それに対して私たちは1000人。

数的には遙かにこっちが上だが・・・私と薰、今は指揮官をしてい

るハ雲を除いたらほとんどが後方支援程度しかできないくらいの実力だ。

「大学に任せっきりにしていた罰だな。薰！リリーズだ！後の者は銃タイプの鍊金核で一斉に攻撃しろ！お前らが最終ラインだ！後ろをしつかり守れよ！」

私より年上の先生方もいるが、まあこの際無視だ。

「リリーズ！さあ、いつでもいいぞ？化け物ども「センセー！私すこし緊張してるかもしんねー」

つたく・・・

「来るぞー！」

「来た！」

ついに戦闘が始まった

野生種はいくらロジックに外れていたとしても人を殺すことはできない。

なぜなら自分を生み出す人を殺すことは自己の生まれを否定することになってしまふからだ。

だが一端中に入られたら街は壊滅するだらうし、怪我では済まない人も出でくる。

そんな状況の中、俺は安全な場所でただ座っているだけだった。

徐々に二ひづりにまで響く破壊音と野生種の咆哮。

だれも騒ぎはしない。ただもう皆震えることしかできないのだ。

そんな中、俺は昔を思い出していた。

俺は昔、魔導精靈士だった。

え？ そんなの聞いてない？

いや、それらしい描写は二つぱいあつたはずなんだけど・・・。

まあいいか。

俺は昔、魔導精靈士だった。

まあ魔導精靈士の中でも一番下の階級、準騎士だった。下には騎士見習いしかいない。そんな階級だつたんだけど。

ま、才能がなかつたのだ。これが本当に。洒落にならないレベルで。

アリアとは隣の家に暮らす幼馴染と言つた感覚で、家族ぐるみです

「ぐ仲が良かつた。

そんな関係が変わったのは、俺の両親が6歳？位のときに死んだ時からだ。

貿易商を営むアリアの家は、俺の家なんかよりも数倍大きい。その家の主であるアリアのお父さんは、すごくいい人で、身寄りのない、他人の俺を引き取ってくれた。一緒に暮らしていた。

もちろん向かいの超大豪邸に住んでるカトレアさまにもお世話になつていた。

その後、アリアとカトレアさまとは同じ小学校、中学校に進みシリウス学苑に入学した。

アリアには人を引き付けるその圧倒的な美貌と凄まじい才能、なにごとも物怖じしない強気な性格で、絶大な人気があつた。いつも周りには人がいた。

カトレアさまにはアリアよりもやわらかな美貌と気品、そして四天空家にしか現れない強力なコントラクトの紋章（普通は利き腕に現れるが、四天空家の場合は背中に現れるらしい。見たことはないけど）があつた。でもそれよりその身を包む優しくてあつたかい雰囲気は、心地の良いものだった。

俺はいつもその陰で隠れて生きていた。それが悔しいのか、嫉妬したのか・・・俺はなにか自分なりの誇れるものが欲しくなつた。

そのころから俺は裏の世界にその身を染めて行つた。

今思えば馬鹿な行為だが、その時の俺はそれがすべてだと思い込んでいた。

中学3年進学と同時にアリアの家を飛び出し友人（そのころはそう信じ込んでいた）のアパートに住みつき、バイトと称して裏の精舞闘連（戦闘に特化した精霊魔導集団）に入り浸つた。

異常な訓練を繰り返しその身を鍛え、禁忌の技を身につけ、遂には固有精霊とのコントラクトまで可能にしていた。

アリアの倍努力しても、アリアの半分も・・・いや、そのまた半分にも追い付くことができなかつた俺にとって、それはとてもうれしかつた。

固有精霊・・・普通の精霊魔導士は四元素であるイフリート、ノーム、シルフ。ウンディーネと契約することで力を引き出し使うのだが、さらに力を身につければ精霊界に存在する固有の精霊と契約することが可能になる。

固有精霊の力はそのすべてを凌駕する。まさに精霊魔道なのだ。

だがそれに伴い、少しずつ。体も心も壊れて行つた。

仲のよかつたアリアやカトトレアさまとも、表面上は一緒に弁当を食べてりしていたが上辺だけのものになつていつていた。

そんな日が長く、たが短く過ぎて行つた。

そして遂に16歳のある裏の大きな大会で優勝した。

そのときにある大物に、数億円もの金額を稼がせた。裏では試合の結果での賭博が主流なのだ。

目をつけられた俺はさらに有頂天になつた。

それからの一年間、あらゆる裏御殿目試合で挑戦者を打ち破り無敵を氣取つていた。

全てを取つた氣でいた。怖いものなんて何もない、失つたものを、埋め尽くした。おもちゃばい、いや「ミミ箱みたいな心の中。

でもよかつた。俺が、俺が一番だ。固有精靈の力は絶大。勝ち組。俺は勝ち組だつた。

だがその日は突然やつてくれる。

それはいつもと同じ決勝戦という名の暇つぶし。軽く捻り潰せるはずだった。

いつものようにコントラクトに力をこめ、いつものようにゲートを開きいつものように固有精靈を呼び出す・・・はずだった。

だが俺の手からはコントラクトがなくなつていた。

なくなつていたのだ。

その日俺は半殺しにされ、裏の世界から捨てられた。

ああ、おそのとき自分の人生が死んでしまつていてことに、はじめ

て気づいた。

病院に入院し、治療を受ける。検査を受ける。  
でも俺のコントラクトは戻つてこない。

離れて行つた人々は戻つてこない。

久しぶりのオモテは、俺にはあまりに眩しく、奇麗過ぎた。

なのにアリアとカトレアさまだけは俺から離れなかつた。

ひどく悲しく、うれしかつた。

それから俺は目線が怖くて前髪を伸ばし、周りの人気が怖くて入院生活を延長させ、最後には一人が怖くてシリウスから逃げ出した。

逃げて逃げて逃げて。

一番近くにいた二人にさえ恐怖し。

でもしようがない。俺には何もないのだから。弱者になり下がつたのだから。

なにもかもを失くした俺はただの空氣。

どんなに頑張つたってダメ。血を吐く努力もした。体を壊すまで練習した。それで駄目だつた。でもあきらめられなかつた。だから裏へ挑戦した。アリアを、カトレア様を超えたかつた。

勝ちたかった。必要とされる、自分じゃなければダメなんだ…といふものが、どうじても、どうしても欲しかった。

それがこの結果だ。

「ただの供給者…・守られる…・他人のために何ができる?何もできないじゃないか」

全てが俺を捨てた。だから俺だって捨てたんだ。

知らないうちに俺はアリアのお守りを握っていた。

「まだ未練があるのかな。逃げだした分際で」

『オマモリ』と縫われたそれは、アリアの手作りだった。

「アリアは縫物も…得意だったから…クッ!」

クシャーっとお守りを握りつぶす。

「クソ!クソ!クソ!俺は…・俺は…・つて クシャー?

布からする音じゃない。

お守りを開けてみた。

「手紙?アリアの字だ」

それは手紙だった

全てを許す、手紙だった。

全てを変える手紙だった

第三話・ワルツ第三樂章（後書き）

ナナ「おひるねやすみは」

ヨシ「ひひせひひせウォッシュン」

ナナ「あつちーじゅぢー

ヨシ「そつちーじゅぢー

ナナヨシ「オリレッポ」

ナナ「・・・微妙だな」

ヨシ「・・・そうだね」

ナナ「まあはじめましょい」

ヨシ「髪切った？今年の風邪はひびこりしこよ？東京は今日雨だつてさー」

ナナ「スルー。さて今回は？」

ヨシ「オリオン学園都市案内パート2...東地区オンラインバージョンー！」

ナナ「まあ東地区はカオスな場所だしな」

ヨシ「でしょお？んじゅ行つてみよー！」

ナナ「えーっと、東地区はズバリ近代科学都市 + ヨーロピアンな雰囲気の作りです」

ヨシ「すん」「く分かりに」「いナビ」ねしか言いよつがないんだよね  
え

ナナ「もう白い研究所が立ち並んで・・・」

ヨシ「その間を石置が伸びるんだよねー」

ナナ「夜になると青や緑やら赤やらの光でチカチカしてゐるし」

ヨシ一たまに爆発起きてるよね？あと蒸氣が噴き出すんだけどあれ危ないんだよねー」

ナナ「まあでも大学を出た後の一つの就職先? つーか大学院の代わり見たいな場所だしね」

ヨシ「現代の十年先を行く科学力なんでしょう？」

「らしいし、ナナ一そんなんハ！」にある物はほとんどがテスターを兼ねてるん

ヨシ「え！？じやあ携帯から立体映像とかでないの？」

ナナ「出ないらしいぞ? 怖えーよな」

ヨシ「じゃあテレビが折りたためないの?丸めたりも?」

ナナ「できないんだつてばー。」この常識は世間の非常識なんだつて！」

ミシ「ふーん。なんかこいつて割とかう」と場所なんだねえ

ナナ「まーね。それに鍊金核だつてでしか作られてないらしいし

し」

ミシ「あつひいんだねー。どこつか私らも三年になつたら固有鍊金核もらえるんだよね？」

ナナ「まあ特務科はもうもらつてるナビな」

ミシ「あつひいよねー。ボクトーなんか一撃でおれちやうし」

ナナ「タイプもこりこりあるし。あたし銃とかがいいなー」

ミシ「ナナ。黒いよ」

ナナ「う、うるせこわねー。もう締めるわよー。」

ミシ「こまかせてないんだけど・・・」

ナナミシ「次回は私たちの学校がある南地区ですー。おつ楽しみにー」

作者「少しあた遲くなつちゃうかもです・・・。ハア・・・。あ、アクセス数が五千を超えたー。これも一重に皆さんのおかげです。これからもよろしくお願ひしますー。」

## 第四話・ワルツ第四樂章

折りたたまれた小さな汚い紙に走り書きされた、綺麗な癖のないアリアの文字。

そう言えば書留ってたっけな。俺途中でわざわざ浮氣したけどあいつさつちつ両方こなしたんだよなー。

おことじ。

『親愛なる「一ちゃんへ

「一ちゃんがよく読んでた本のページが何枚か破れてたでしょ？

あれずっと前になるんだけど、実は気づかしたときによってきたんだ。

ビニにあつたかは秘密。

お守り代わりに入れときました。

ページの裏に書いてあつたけど・・・、「めんね？」

## カトレアとトコアよつ『

裏をめくるとそこには、確かに昔俺が毎朝毎晩読んでいたお氣に入りの本の、そのなかでも特にお氣に入りのページがあった。

見なくなつたと呟いたら・・・・・・破れたのか。

『おひつけ ゆうじや』 ここがした。

「あかのゆうじやよ。 おお ゆうじやよ。 おまえは どうして  
われとたたかう?」 『のきたなきせかこを じうして おもる?』

おひつけ いたえました。

「れぬた せこわい これると きめた。だから わたしは つら  
ぬくやつになつた。わたしが まもる たてになつた。おひつけ  
わたしは おまえを ゆるわぬ ゆるわなにから たおすのだ」

おひつけは ボロボロになつた けんをもひあげ おひつけむかつ  
て はしつだしました。

「あかのゆうじやよ おお ゆうじやよ。 われを たおせば お  
まえはしない。 われのちからで おまえしない。』

ゆうじやは その手を ふつあげ おひつけむかつて ふつおり  
しました。

「かまわぬ わたしは れめたのだ この手をかけて セこわいこ

あわぬよ。 やいがせおひつよ あいがせひるよ。 やいがせよかみよ あい  
「よかこはば」

あかいひかりが あたつをひつま あおひのあじわは べすれまし  
た。

せかこをねおひつ くもせがわせ あたつはあかねこ あねがくじ  
なつました。

やうでや。

せかこをひわす あおひで たおれれたのです。

しかしうねは ねじりで なれました。

せぬひから たすけてくれた ゆひこやは こめせん。

かぐいにじむ いなこのです。

それから こくひを たつたでしょ。

せかこは くいわになつ ひとびとせ げんせはへてこまつた。

ひぬせひとつ くじり おひるひ くじりもつてまつた。

めこじりまこじり なきまつた。

なみだがかれのままで なきまつた。

そしてひぬは ねぬまつた。

せかいをへいわに むさむると。

それから ひめははたらきました。

まいにちまじにじゅ はたらきました。

パンパンパン

とびらが あかく かがやきました。

ひめは ふしづれに おもこながら とびらをひらめました。

「ひめよ われは かえつてきました。 みつしゃは うるさい かえ  
つてきたぞ」

あかのみつしゃは こきていたのです。

それから ふたりは しあわせに くらしました。

『アリビアヒト ハリしました』

本の前に紅の勇者。

よくある、少年が一度は夢見るヒーローが活躍するお話だ。

俺はこの勇者にあこがれて、アリアとこっしょに精靈魔導の訓練を  
受け始めたのだった。

「勇者・・・」

田からは涙があふれていた。じつを見るまわりの田なんて氣にならない。

俺はいつたい何をしてるんだ?

遠くから声が聞こえた気がした。

何もできなかつたのか?

何かしたのか?

いつまで逃げてるんだ?

・・・あの田の俺は、紅の勇者だつた俺は、今の俺を見てどう思つ?

逃げるのか?

田を逸らすのか?

「そんなこと!俺は!」

グシャア

メガネをはずし、握りつぶす。

前髪を払いのけ、前を見る。

もう逃げない。

逃げる訳にはいかない。

あの場所に行かなきや。あの場所に行けば何かができる。

扉の前まで歩く道が、十戒のように割れて行く。

コンコン

「少し開けてくださいませんか？」

「驚いた・・・超イケメンじゃん！」

「ヤバいよねあの顔！かつこよすぎ」

きやあきやあハシャグ馬鹿が一人・・・。

「私はそれよりあの言葉が気になる・・・」

勇者？ヒーロー？見なきや損なのは確かだ。

私は戦場にむかって走り出した。

後ろで止める声が聞こえたけれど、そんなものは・・・無視つてことで。

## 第四話・ワルツ第四樂章（後書き）

ナナ「う～たおう～」  
ヨシ「お～どるひ～」  
ナナ「今夜は～」  
ヨシ「夢～の～」  
ナナヨシ「ラ・ラ・ラ オ～リ～レッポ～」  
ナナ「なかなか決まつたな？」  
ヨシ「だね！ やつぱ//ゴージッ フュアーは伊達じやないね～」  
ナナ「ヨシ～それギリギリアウトだわ」  
ヨシ「んも～～ならこいつがやのフリップを繰り出します～」  
ナナ「だから、見えないんだって・・・」  
ヨシ「今日は東地区の説明で っす」  
ナナ「もひつひこまんざ。東地区はみんなそ～存じの通り、高等部  
地区となつておつま～」  
ヨシ「高校の数は・・・なんと3つ～いや4つ～」

ナナ「はつせりしないんだな」

ヨシ「うとこひよつ、Iの学園都市はどうどん開発がすすんでいくからねー」

ナナ「いや、そんな高校が何個かわかんないような速さはないだろう」

ヨシ「ぐつ・・・ヒ、とうあえず、今わかつてるのはー私たちの大学付属学院高等部、【如月】に、お隣の【睦月】、そこから離れたところにある【水無月】ええーっと・・まだある?」

ナナ「通称なんかつかわないでさ、鍊金に力を入れるとか、勉強にーとか工業系のーとか言つとかないとわづかんないでしょ?」

ヨシ「まあいいじゃん。いろんな趣向にそつた学校が乱立してゐる。それがーこのーことーうわーでーしょ?」

ナナ「そーだね。つとまあこれで学園都市の各ブロックの説明はおわりだよね?」

ヨシ「そだね。どうする?」の先、何紹介してーの?」

ナナ「私に、任せなさいー次回からは登場人物、マル秘リポートよー!」

ヨシ「うわーまじでー? ついでに、いつか会長とか調べんの?」

ナナ「あたんまえでしょーがー。あ次回へ向かって走り出すわよー!」

ミシ「ああー、タロに向かって走れない！」

## 第五話・ワルツ第五樂章

戦局はまさに泥沼と化していた。

もう疲れも何も感じない。ただ目の前の敵をひたすら切り捨てる。そして殴り飛ばす。

後ろから来る銃弾なんか、ヒツの甘い音で聞こえない。

隣にいる薰も既に限界を超えていたことだらう。訓練だって、ここまでは想定していない。

だがそれでもケラケラと笑いながら相手につつこんで行く薰を見ると・・・なんというか・・・

「負けてられん!」おおおおおお連蛇!突破第弐式!

燃えてくる。

次々来る狼型野生種のあーを碎きその身を消し飛ばす。

突破の改良型はその攻撃範囲と威力を増すところがポイントだが、疲労も増す・・・。

だがこの場面を開かない限りヒツヨツもないのだ。

八雲、この場面を開けられるのはおまえだけだ!

だからはやくヒツヨツかしてくれ・・・!!

そこからせりに何時間が過ぎただろうか。果たして何体の敵にダメージを当たっているだろうか。

野生種が恐ろしく強いことは確かだ。一體一體が下手をすれば自分と同等クラス。それでも持っているのはやつぱり気合いの問題だと思ひ。

「恐るべし気合いだな」

「先生！大学の方から加増鍊金弾が届きました！一斉射撃を開始します！下がってください！」

よつやく一息つける・・・

「薰！下がるんだ！」

未だ最前線で激闘している薰に声をかける。

「ええ？なんでまた！？」

「ハチの巣になるぞ」

「んーそいつはいやだな」

自陣の後方に戻る。

さあ、その鍊金増弾つてのはどんな代物なのか？

「打てええええええええええ！」

見せてもらおうが。

銃型の鍊金核を通して、弾を込めるのと同じようにどんどん靈力を注ぎ込むのが普通の鍊金弾だが、その名の通りそれ自体にブースターのような靈力を加速させるシステムが組み込まれているのが加増鍊金弾だ。

ハラダ・アキラ

## 轟音とともに放たれる鍊金弾

敵の野生種に一気に襲い掛かり

- 1 -

「全然効かないじゃねーかよ！ハチの巣になるわきやねーって！」

ええ！？そんな！

「へー！ 薫ー行くぞー！」

「休めるなんて言つから期待したんだけどな・・・ま、しょうがないか」

また切り込んでいく。

「申し訳ありませんーまったく効きませんでしたー！」

「んな」とかい声で言つてんじゃねーってのー！」

「へーもうだめなのかー？」

学園都市の壊滅・・・最悪の事態が、音を立てて迫つてくる。

夕日をバックに、野生種たちの群れはさうこ戀りんでこぐ。

「センサーーーいつたん下がつてーーのままじやあたしらが持たないー！」

「そんなこと言つたつてーー下がるーーはーー！」

クラッ

「なつー。」

鍊金核が明らかに色を失つてきている。

力が切れてきた！？

「センセー後ろー。」

「薰ー！後ろに敵がー！」

「「え？」」

目の前に、野生種の赤い目があった。

時間が、一秒が長く感じた。

走る走る走る。

生徒会室以外は無人となつた学校校舎内をひたすら駆け抜ける。

角を曲がり、生徒が倒したのであるうロッカーを飛び越え、ドアを  
け破り、窓を潜りぬける。

地下へと延びるらせん階段を四段、五段と飛ばしながら、跳ねるよ  
うに下る。

パスワーー・・・ドを・・・

「生体パターン認証ー！ラケゴマー！」

音声パスワード確認。イラッシャイマヤー「コックリー

荒れ果てた研究所を駆ける。

そこは平坦な道のよつ。

そこには邪魔などないかのよつ。

ついに赤い門の前までくる。

生体パターン確認。ヒラキマッセーヒラキマッセー

ゆつぐりと開く赤い門を無理やりこじ開けながら、中に侵入する。

中には見慣れた誰かさんが立っていた。

「さすが生徒会長。仕事が早い」

冷たい目で俺を見ながら黙つて立つているハ雲さん。

「あなたの経験・・・失礼ながら調べさせていただきました」

そうだらうとは思つていたし、だからこそ生徒会室ではなく机から直接来たのだ。

【鍊金術師】としての俺は無力な一男子学生だが、

「その紅鉄甲さえあれば・・・ですかねえ」

その一言にハ雲さんはキュッと一層目を細めた（よつに見えた）

「シリウス学園にいらしたあなたなら対精靈にかけては少なくともこの学園都市内一です。なにか行動を起こすとするなら……と思いまいあなたの靈力を追わせていただきました」

「俺の向こうでの成績は？」存知ですか？」

「……【見習騎士】です」

「それではそれがどうこう意味かは……」存知ですか？」

「それは……」

見習騎士とは魔道精靈士の階級である騎士の中でも最下層の準騎士。最も低い階級から一番田である。

ちなみにアリアは騎士総長【マスター・ナイト】で階級的には第五位。

ちなみに階級は17段階あるから凄いよね～アリアって。

17歳でマスター・ナイトって…長い歴史の上においても、それはない。

「なのになぜですか？俺の実力ならあんな数の敵相手にできない…・つというかハ雲さんの遙かに下の靈力しかないんですよ？」

ハ雲さんはグッと黙り込んだ。

「それとも……俺の経歴知ってるんですか？」

「だと……したら？」

だとしたら随分と芸達者な人だな。

なんて言葉は飲み込んでおく。

「俺は昔、それで全てを失いました」

「・・・・」

「だからですかね。その辛さを、苦しみを、痛みを知っているから

この学園の生徒はおそらく自分らの地元に戻るのだろう。でもこの学園の生活は一度と戻ることはない。

それは、人から聞けばそれだけのことだと考えるかもしれない。

でもその真ん中にいる今を生きる者たちにとって、どれほど悲しいことなのだろうか。

死ないからいいとか、そういうしたことじゃない。

そこにある思い出とか、記憶とかがあつて初めて人は生きているのだと思うから。

「何気にまた全部失いそうになつていい今を、見逃すことができなかつた・・・」

「・・・・・」

「逃げたいのは山々なんですよ。でも、それでも、見逃す、ことはできなかつた・・・」

八雲さんは俺の目を見て一言一言を紡いでいく。

「私だつて、この学園都市のことを使っています。私に居場所をくれたこの学園を。そして初めて友達になつてくれた人を。馬鹿みたいにつきつきになつてくれる先生を守りたいです。でも、それでもあなたを危険な目に合わせたくないんです・・・」

泣きそつた声でじりじりを無表情に見つめてくる。

「やつぱり行かなきゃ。大丈夫ですつて。つましくさます。絶対に」

「どうして? どうしてそう言こられるんですか!」

たしかに馬鹿げてるかもしねない。

「昔、ある人が言つてくれたんですね」

たしかに他の人には訳が分らないのかもしねない。

それでも俺は約束をしたから。向ひつじやだめだつたけど、ひつち

でその約束を嘘にしたくはないから。

「俺が勇者様で私がお姫様なんだって。勇者は無敵が最重要ですか  
らね。たぶん無敵なんだと思います。なにせそのお姫様……あ、  
二人いるんですけどね？めちゃくちゃ強いんせすから。あの二人助  
けるには、もはや無敵じやないと……つていまさらガキの頃に突  
っ込んでもしようがないんですけど」

「無敵に、なつて守りたいんですよね」

紅い鉄甲が光を放つ。

その光を覆うようにルーンの金色が部屋を包む。

「…………」ここまで来て、緊張感のない人ですね。まあ、私は知  
つていましたが

「何をですか？俺が実は裏男だったことを？」

八雲さんは銀色のトライデントを振りかぶりながらこっちを見る。  
無表情なはずだが、どこか呆れたというか、笑つているような感じ  
がある顔で。

「いいえ。あなたがバカなんだってことを

「なんこと今頃いわないでください。」

一気に振り下ろされるトライデント。赤い光に銀の輝きが鋭く突き

刺さる。

グシャアアアアアアアアアアアアア

飛び散る破片に紅の光が乱反射する。

まるで血の流れのような、繊細な黒の彫刻と紅のコントラスト。

矢口の真ん中は鉛座<sup>シロ</sup>をそれは  
備を導く轍跡の連するべ

これが・・・俺の勇者なのがもしれない

「...」  
「...」

カボツ

さつやくばのる。

「ちょっと…そんな簡単に」

•  
•  
•  
•  
•

「グウウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

これが・・・苦痛？選別者の試練！？

死ぬつて！想像以上だつて！

左手がまるで千切れるかのように激痛を放つ。

肘のあたりまである紅い鉄甲が、輝きを増していく。

それに伴い痛みがぐんぐん上がっていく。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアア死ぬ！死ぬ！死ぬつてー！」

「なんだか滑稽に見えてきましたね。本当に痛いんですか？」

「んの女ー！ツツツウウウー！」

「あ、でも少しづつ引いてきたかも」

じつくりと痛みが引いていく。

ツと思つたら

ブツシヤアアアアアア

肘から血が噴き出してきた。

「ぬおあー！ファアアー！」

一難去つて、また一難とはこのことだ。

「じつとしてください！あなたの靈力が散らばつてきて調整ができるいないんです。私が外部から調整します」

そう言つて片手を俺の紅鉄甲にかざす。すると仄かな蒼い光と共に痛みと出血が収まっていく。

ハ雲さんの制服が俺の血でべつとりだが・・・

「あ、すこません。シャツが真っ赤になっちゃいましたね」

俺の右手に手を添えて、うつむくハ雲さんの黒髪は紅鉄甲の光に照らされ、艶やかに輝いていた。

「時間があれば治療をしたいのですが・・・」

「大丈夫ですって。怪我は慣れっこですし」

この学園に来てから四分の一は保健室通いだし。

「心配をかけないでください・・・」

目に涙を溜めて俺を見つめるハ雲ちゃん。「え? なんで?」

「そんなに心配しなくても。大丈夫ですって」

「なんだかいらいらしてきました。こんなにも心配をかけておいて飄々としているあなたにとてもいろいろしてきました」

「いや、その」

「問答無用です」

右手に伸ばした手が今度はグーで戻つてくる。

ハ雲さんは緊急事態のど真ん中に俺を氣絶せんのか!?

「ちょい！泣いてるんですか？」

拳が唸る前に尋ねる。

「え・・・？」

俺の顔面クラッシュショット前で止められる必殺の右。

握った拳を伸ばして頬に当てる。自分で泣いてることに対して  
いなかつたようだ。

「そんな・・・私が泣いてるー？そんなに私は・・・なぜ・・・  
心配したから？」

「ん？何をぶつぶつ言つてるんですか」

すると彼女はキッとこちらを睨みつけた・・・

俺のすねを思いつきり蹴つ飛ばした。

「心配させないでいただきたいですと言つたんです」

ける前に言ひつけ。蹴る前に。

そのまま八雲さんを連れて走る。走る。元来た道を走る走る。

「俺は」のまま前線に向かいます。八雲さんはわざと言つたことを

放送してくださいー！」

「わかりました。姫、ちょっとといいでですか？」

「急に俺のシャツをつかんで止めるハ雲さん。なんだよー。急いでんの  
にー！」

「絶対に無事に帰つてください。怪我したらその数だけペナル  
ティーです」

そう言つて小指を差し出す。

まさかね・・・まさか・・・

「ん。早くしてください。姫は知らないんですか？それとも秋田に  
はないんですか？指きりです」

この年になつて・・・ま、いいかな。

「ゆーびきーりげんまん・・・まら、次は姫の番ですよ

ワンフレーズ交代制かよ

「うつそつーいたら「拷問術入門～上級編～」を一ページ田から順に  
たづめす」・・・指切りたくないな

「まひ、ゆーびきつた・・・絶対に帰つてきてくださいー！」

結局あの涙からまた無表情に戻つたけども・・・こつして分かつた  
一つ一つのハ雲さんを、もう少し見て行きたい気がする。

「はいはい。ゆーびきーつた！絶対帰ってきますよ」

そう言つて俺は八雲さんから離れようとして、

ブツシユウウウウウ

アメリカ大統領みたいな音を立ててまた腕から血が噴き出した。

一痛い！？

え！？なんて？なんて？すか？！

ハ雲さんと離れるたび痛みと出血が増していく

モレバシナリテアベニテ

すなと痛みと出血が止まぬのた

……彼らの靈力支配下「フィールド」の外に出られなによ」「ですね」

つては

「俺はこの紅鉄甲をはめてる限りハ雲さんと離れられないってこと

! ?

「そのようですね。こうなつてはしょうがありません。まずは簡易放送機器を取つて来ましょう。そうすれば移動しながらの放送が可能ですね。」

へー！ってそんな簡単に！？結構衝撃的なもんだと思いますが！？

「時間が本当にくなつてきました。・・・最終防衛ラインが破られたようです」

ハ雲さんの片手に握られたトライデントが、警告音とともに防衛ラインのデータを出していた。

「そんな！急ぎましょ！一通りあえずどこへ行けばいいんすか？」

「放送室へ。それからはあなたにまかせます」

そのまま全力でダッシュをするハ雲さん。

え？消えた！？

俺を置いて体外鍊金使いやがった！

ハ雲さん！血が！激痛が！

「ギヤアアアアアアアアアアア」

薰の後ろを私が、そして私の後ろを薰が護る。

別に前もって相談していたわけではないが、戦士としての感覚と互いの信頼がそうさせたのだ。

再びお互ひ距離を置きながら敵を弾き飛ばしていく。

だが敵が多くすぎる。いくら両脇を結界でせき止め、流れを細くすることで一回で相手をする数を減らしているとは言つてもいかんせん数が数だ。

「くつそー数が多くさうぞー！手が回らなくなつてしまいー。」

薫はトンファーで直で戦う戦い方。その速さに頼つた相当無茶な戦い方だが、一体一体確実に仕留めている。

だが相手が多くさるときには多によつて戦えばいいのだ。

「空気を屠る」の一撃！かかつたな！スウウウウウウウウウウウウ  
ウウウウウウ

息を吸うよつて腹にためるよつて靈氣を集め・・・

そのままこつきに剣に乗せて放つ。

ドゴッ オオオオオオオオオオオオオオオオオオ

一直線に延びる剣撃。そのまま野生種の塊につつこんでいく。

体外鍊金の中でも強化鍊金術、拳に靈力を被せ、空氣を放つようこ

撃つ技、【空屠】

拡散させないよう一点に絞るため、使い勝手が悪くなったり溜めに時間がかかりたりするが数を相手にするならこれが一番だ。

巻きあがる砂埃。

「おじおじセンサーーーその技を合図なしに使つか普通！？」

今私の靈力じゃ、おまえならかわせる程度の威力しか出せんな。

「・・・決ましたか？」

だがこの言葉が出たといつゝとは・・・

砂埃の向こうに光るたくさんの瞳。

これすら効かないか？

「先生ーーもう結界が・・・結界を持ちませんーー」

何！

時間にして2時間。もつと限界が来るこりだつたか・・・！

「じつあるセンサーーーあの結界が破られたらもう私はじゅもたねーぞーー！」

「カウントダウン入ります！ 30・・・ 29・・・」

ミシッとこう音を立てながら、結界にひびが入っていく。

まるでこの空間にひびが入っていくかのようになに亀裂が伸びて行く。

「薰ー靈力供給を始めるぞ！ 私達でカバーするんだ！」

結界に手を伸ばし靈力を供給する。ひびがまるで消しゴムで消すように消えていく。

しかし田の前の敵を切るために手を放した瞬間に結界は崩れていく。

「もう無理だ！ こんな風に道を作つて結界自体にかかる圧力を減らしてんのに崩れちまつてんだ！ この開いた穴を守つてる私らがいくら力込めたって・・・」

「くつーもひ無理なのか！ ？ そんは」とはない！ あつてはならないんだ！

「4・・・ 3・・・ 2・・・ 1・・・ 結界が！」

「結界が決壊した！ ？」

薰の言葉が「冗談になつてゐるなんて氣づく奴がどこにいただろ？ 」か。

横に広がるよつててひたちじりしつと迫る

私と薰を警戒してゐるのだろう。

だが山の裾に広がるよつてこじつけを見つめるその瞳は数数えきれない。

「どうやら私たちほんとんど倒すことができなかつたよつだ。」

一陣の風が頬をなでる。

目の前の絶望に目を逸らすこともできないまま、ただ目からあふれる涙を拭つこともできず。

「悔しいもんだ……こんなところで……私たちの街が……」

震える薰の声に聞かぬふりをする。

握力が出ない。

剣を捨てる。

かくも……私たちは……

「無力だ」



ピ-----ガツガ-----ガガ-----ザ-----

プチッ・・・ガガツ・・・前線の生徒、並びに教員に連絡します。  
只今より対野生種用最終決戦兵器を使用します。巻き込まれる危険  
が非常に高いため、全員最重要防衛ラインY-KKまで下がつてく  
ださい繰り返します・・・

「や、八雲？・・・だが遅すぎた・・・これほどまでに侵入されて

は、どんな錬金術でも間に合わない……」

その瞬間だった。空が紅く染まった。

そこに浮かぶ魔法陣の中心に、よく知る一人の男女が立っていた。



第五話・ワルツ第五樂章（後書き）

ナナ「今日はオリレポはお休みです」

ヨシ「なんで？ねーなんで？」

ナナ「お休みしないとならない理由があんのよ」

ヨシ「とくにないくせにー」

ナナ・ヨシ「評価、感想、お待ちしています。読んでください、ありがとうございました！ぜひ、またのお越しをお待ちしております」

## 第六話・ワルツ第六樂章

その瞬間だった。空が紅く染まった。

そこに浮かぶ魔法陣の中心に、よく知る一人の男女が立っていた。

片っぽの男は口々口々としながらだが。

遠田でも靈力供給のおかげでよく見える。

一人とも妙に血まみれだ。

敵は間近だが・・・え?なんかあつたの?学校内で?

「おお。靈力を体外固定して足場を作つて一時的に浮力を作り出す  
とは・・・これが魔導精霊の力ですか」

「あんまりうごかないでくださいよー」この足場安定させるだけでも  
う靈力が持たないんすから!」

あ、ちなみにこれは風の精霊源シルフの力で浮き場を作る『フロー』  
(俺らの通称。本当はもつと横文字で長ーい)とよばれる技で、羽  
を作つて飛ぶ方法や空気を固定して空を走る技なんもあるんですね。

この技のいいところは靈力を足に集中させるだけで発生させる」と  
ができる所だ。

これを『簡易精霊魔導』っていうんだけど・・・まあ初歩中の初歩

だ。

俺は確かに中等部に入つて一番最初の実技試験で齧つた記憶がある。

あんときや痛かつた・・・

「薄いところよりもなんでしょう・・・体外鍊金の局部体外発動を応用させていますね。なるほど、私たちがまず体内から始めるのに対して体外から・・・いやしかし・・・キヤツキヤツ」

つーか人が回想シーン入ろうとしているときに無表情で無邪気に動くんじゃねー！

「また靈力にノイズが入つてます。気が散りすぎですよ」

くつーいきなり真面目に・・・

「Jの速度ならあと15秒で敵軍勢の中心部に入ります。ですがもうすでに敵の先頭は学園内に侵入しようとしてますよ?」

下を見ると膨大な量の狼型野生種が、単細胞生物のように分裂を続けながら学園内に侵入しようとしていた。

津波と一緒に。

浜辺から見れば先っぽの小さな波しぶきしか見えないが、その裏には膨大な量の水の塊が待ち構えている。

飲み込まれるのは一瞬だ。

「大丈夫ですよ。八雲さん、今から魔力供給を分岐させます。手伝つてください」

魔力を足から全身に切り替える。

流れは歪ながらも、なるほど。そんなに大差はないようだ。

「・・・開門」

その瞬間、鉄甲の紅が空に灯る。

黒の道が金色の羅線へと変わり、空をかたどつていく。

「精霊よわが名のもとにその力を示せ！我、紅の皇姫なり！」

「あ、姫こま自分のこと姫つて言つた

「黙つててください…今この話の中でもかなり盛り上がってる所なんですから！」

そのまま空の線を一つなぎにして力を集中させる。

コントラクトを失つてからは連絡すら取れなかつた俺の固有精霊。

見つけ出せるだらうか・・・。

限りなく深く浅く広く狭い精霊界だ。

個を持たぬ者に個を。

時と空間の間の、影と光の回廊・・・ってなんだそれ

心をつなぐとすぐにわかつた。

ああ、待つてくれていたらしい。

「久しぶりだな

光の線が門をかたどる。

「こりいあつたんで、まあ連絡すら取れなかつたわけだが

門の光は徐々にかすれ、奥には黒い道が見えた。

「姫？ いつたい・・・いつたい何が？」

「ああ、これは『固有精靈別導召喚』です。精靈魔道術のなかでも一番難しい技の一つなんですよ？」

えつへん。難しそうで一般はおろか軍部の戦闘術マニュアルにも載つてない技だ。

門の扉の光が結び、暗い闇の奥から羽ばたきが響く。

「まあ、俺が昔・・・といつてもほんの2年前に契約を結んだ靈氣集合体、夢のある言い方をすれば精靈ですか。を呼び出したんです」

羽ばたきは刹那。

後光射す鳥の翼をたたえた固有精靈。

『相も変わらず女づれですね。姫君さん？』

そいつはいつだって優しい銀髪の。

しかし他の野生種とは一線を置く存在靈力。

「せつかく呼んだんだ。全滅でたのむよ？」

『そちらの奇麗なお嬢さんのことは教えひやくれないのかな？』

「あとでいへりでも教えるよ」

『了解。なりそちりのお嬢さん?・しばし御観覧のほどを』

ウインクを残して敵のど真ん中に舞い降りる。

「頼んだよ。小林さん?」

敵のど真ん中に舞い降りた天使はたった一言つぶやいた。

『行動を停止なさい』

いきなり姫が魔法陣を開いて、そしたら門が現れて・・・

「中から天使が現れた・・・・？」

そして一言つぶやいて

野生種は一瞬で行動を止めた？

んなバカな、だ。

『お嬢さん、天使を見るのは初めてですか？』

天使はやっぱり天使なのであるつか。

「小林さん？ いきなり口説かないでよ」

『そ、そんなことは言わないでください』

「と言つぱり名前は小林なんですか？」

『いえ、私はきちんとミカエルとこう答前があるんですよ』

「でも長いからね。小林さんで十分だよ」

ちゅうとまで

「『バヤシサン』と『カエル』なら確実に『カエル』の方が短くないですか？」

「漢じ『漢字』にしても文字数は一緒ですね』・・・な、なんか響きが『いえ、ミカエルのほうが多い気がします』・・・なんとなくです！そつなんです！」

・・・相変わらず、彼には秘密が多いようです。

## 第六話・ワルツ第六樂章（後書き）

### 新キャラ紹介

ミカエル＝小林さん

『みなさんこんにちは。いや、こんばんわかなか？私と姫様のなれそめの話をしたいところなんですけどね。すみません。作者さんの努力不足だそうです。たぶんここがオリレポに変わることだろうと思いますが、私の初登場挨拶をばと思いまして。よろしくお願ひしますね？』

「いい人そうですね。姫」

「そう言えば八雲、姫って誰のことなんだ？」

「姫って言えば日野しかいないじゃないつすか！ そうだろ？ 八雲」

「とにかくより俺の姫ってあだ名は公式になつてんだ……嘘だろ？」

「あきらめた方がいいですよ。ね、みなさん」

「わ、私は姫などとは……だが日野がそう呼んで欲しいのなら私は……」

「呼んで欲しくなんかないですよー！ といつも小林さんどうにかしろよー！」

『私が出る場面ではないでしょ！ がんばってー。』

「ケラケラケラ！物わかりがいい奴じゃねーか！気に入つたぞ！」

「ああ・・・カオスなんだよなあ～」の人たち

『それよりも姫様、作者さんより言伝を預かっていますよ』

「なになに・・・って字が小さくて俺の視力じゃ読めないや。美奈子先生よんでもうださいませんか？」

「そういうえば・・・ひ、ひ、ひ・・・日野は目がわあるいんだつたな！よし！わ、私が読んでやうひ！」

「センセーがどもつてゐうちに八雲が持つてつちやこましたよ？」

「お読み頂いてありがとうございました、評価、感想のまつをお持ちしております。気軽にお書きください・・・だそうです」

『まあこの文章を書いているのは作者さんですからね。結局は自分で言つてるようなものではないでしょうか？』

「ケラケラケラー！日野！おまえもなんか一発やつてやれよ！」

「まだ僕の心に傷をつける氣ですか！」

「・・・『続べ』」

一般論ではあるが、精靈魔道は限りなく専門的な学問として扱われている。

例えて言つなら大学の研究と似たようなものだ。

庶民の生活にはなんら影響はきたさないが、ひとつ線を越えると海よりも深い知識が待つていて、

・・・つまり、魔法のように便利な道具でもなければ生活の中でも使われることのないものということだ。

そんな学問である精靈魔道には、一つのタイプがある。

一つは前にも言つたが、四大精靈によつてある程度固められた精靈元素をコントラクターで持つて貰うことで様々な事象をおこす物。

二つ目は精靈元素が自我をもち、己を見出したもの固有精靈を自らの靈力で隸従させ、コントラクターを使い使役するもの。

もちろん前者が一般的であるし、たいていの場合はこつちを精靈魔道と呼ぶ。

しかし上に立つものたちは須らく皆後者を身につけていて、

その間には雲泥・・・いや、それ以上の差があると言つても過言ではない。

日本海溝とオーロラくらこの差はあるだらう。

つまり何が言いたいのかと言ひとへ、今俺がやつてのけたことはそれぐらじすごじことなんだつてことだ。

『随分と長い歴史でしたね』

「ちやっかり解説を入れてあるあたりに狡猾さを感じます」

けつ一ちよつと俺がなんか言つと速攻で各方面からバッティングだよ。

「いいからー小林さん、『言霊』はあと何分持つ?」

言霊とは文字通り言葉に靈力を込めることだ。固有精霊クラスになると、靈力の微量な野生種なんかは止まれの一言で身動きができるくなるのだ。

その言霊を使って、精霊を消す靈子分解つていう上級の技もあるけど、それはめったに使えないのだ。

なぜかって? それにはふかい理由と計算式がかかわってくるのだ。  
俺は知らなーい。

『中隊レヴェルなら下級種ですしどこにかかるんですけどね・・・  
大隊レヴェルの数ともなると、いくら私でも五分が限度ですよ』

まあこの数を五分でも止められるのはかなりすごいことだし。  
発音もなんかネイティブだし。

「わかつた。じゃあ靈力供給をストップをせるよ。靈力は安定して  
るよね？」

『イエス。いつでもよろしくいつですよ？』

「八雲さんー靈力を鉄甲から腕に供給します。手伝ってくださいー！」

小林さんと言う天使が出てきたあたりから、なんだか、随分と現実  
離れことになってきたような気がする（私もそう言う世界の住人  
なんだけど）。

「姫、これ以上いつたい何をする気ですか？」

緊迫している空気はない。

「簡単ですよ。鉄甲に供給している靈力を一端『陰と陽』にバラし  
て腕に絡めさせて・・・ってまあ、力を小林さんに送る感じです。

『

いや、それが決して簡単じゃないことは私でもわかる。

靈力の分解に再結合だと！？そんな、専用の鍊金核を使っても難し  
いことを簡単にできるものなの？

普通ならできない。だがこれは鍊金術師としての常識だ。魔道精霊  
なら簡単なことなのかも・・・

「腕に靈力をシフトしたら、すぐにこの場を離れます。小林さんの  
邪魔になりますからね」

『危険ですからね。半径1キロ』

「残念！そんなに強い靈力はおくれませーん」

『・・・カツコつけたかっただけですよ』

黒髪の少年と金髪碧眼の有翼美男子・・・これが俗にいうBで「な  
パッシュヨン？」

「さつさとむ！」に戻つてよね。小林さんいるだけで靈力垂れ流し  
てんだからさ」

『え？いやですよ。折角来たんですから。こちらの女性ともまだ・  
・』

どういかといふと兄弟に近い？

小林さんに靈力を送る。

ジワリと小林さんの六枚の羽が輝きを増す。

下の人たちに見られるのも厄介だし、ここは八雲さんの隠していた  
最終兵器の活躍ついて」とにしておきたい。

「広範囲かつ殲滅用でいい。相手は野生の中でも下級だから、使用靈力は1090一ソルフでいい？」

『派手に2000へりこ行きましょうよ。そつものほうがより細かく演出できますよ?』

「いやだね。小林さんいつも俺がせっかく送った靈力をものすんじゃ無駄なことに使うから」

『私が?いつ?』

「はあ?アルマダでペインスをつぶしたときのあの薔薇はなんだつたのさ!俺がビームにしろつったのにわざわざ花びら型にしてしかも散らしたりしてやー無意味以外のなんだってのさー」

『あのですね、私は天使ですよ?しかも上位の。そんな私がいきなりビームなんか出したら・・・なんでしたつけ?雅?そう、雅に欠けるでしょ?』

「姫、精霊さん、早くしてください。学園の危機を救つためここにいるんだじょ?」

「あ、ああ、そうでしたね。じゃあ小林さん、1100でいくよ。」

『1800』

『1300!』

『1600。これ以下だと足りません』

「わかったわかった!1500!これでいいでしょー。」

『かしきました。では・・・』

不毛な争いが終わつたかと思うと、一気に精靈の羽の輝きが増した。

1500—ソフの輝きだ。

ちなみに1ニンフとは魔道精霊の靈力単位で、私たちがつかうのは1フェア。10年前に1ニンフが10フェアで統一されている。

ちなみに500フア、つまり50一ソフ以上の靈力保有者で鍊金核を作動させることができるとなるといわれている。

センサーが850ニンフだったから、軽くそれを上回っている。

大学部の鍊金術専門の人でさらにその中でも特殊訓練を受けた人が  
1600だ。

あ、  
ありえない！

精霊の羽の輝きがさらに増す。どうやら供給靈力をすべて羽根に集めたようだ。

ロープの長い袖から少しだけ見える右手の人差し指をすつと野生種

に伸ばし・・・

羽から肩へ、そこからは爆発的に肘を経由して人差し指へと集まつた。

するとどうだ。ローブの袖はめぐりあがり、漏れ出ていた光は一つの球体へと形を変化させた。

『天使び―――――――――つむ拡散型!』

光が天から舞い降りる無数の雪のようにその手の先から舞い降り、その光の雪は結晶の「」とき六角形を描く。

瞬間。

野生種に向かいその数多の結晶がやりへと形を変え、目にもとまらぬまさに光速で敵へと落ちた。

野生種へと落ちたのだと判断できたのは、その光の直撃を食らった多くの野生種が一瞬で爆ぜたからだった。

夢ではありえない熱風。

そして目を焼く金の光。

その光はあるで意志をもつたかのように敵へ敵へと爆発を連鎖させていた。

・・・・・しても、途中の雪は必要のない演出だったのです？

第七話・ワルツ第七樂章（後書き）

ヨシ「オーリー オーンをみ~るな!」

ナナ「い~ゆ~へりこ~しゃせせせ」

ヨシナナ「アウト~アウト~オリレッポ!」

ナナ「・・・ダメだね」

ヨシ「うん。ダメだね」

ナナ「はあ~。つと~氣分を入れ替えて!前回は主役陣に持つてか  
れただけど、早速始めるわよ!」

ヨシ「でもさあ、す~じ~へ久しぶりな感じしない?私自分のキャラ  
を忘れてくる気が・・・」

ナナ「ヨシ~やうこい~といひ~、名前が変わつてたりするわ  
よ」

ヨシ「なにそれ怖!~ダメでしょそれは!」

ナナ「そつならないためにも、レポートしていくのが私たちの仕事!」

ヨシ「だね。んじゃーかく~フロップどん!」

ヨシ、巨大なフロップを取り出す

ナナ「久しぶりに見るわ。そのネタ」

ヨシ「いいでしょー? んじゃー早速」

ナナ「はじめますかい!」

ヨシ「今日は、主要キャラクターの名前の由来! 一応、この小説の主要メンバーには、名惑星の名前がついてるんだって!」

ナナ「ま、よーするにRAPGでいう顔つきのキャラつてわけね」

ヨシ「そゆことんで、【太陽】が日乃【水星】がセンセー、【火星】がアネさん」と薰つちで、【木星】がマドカ、【地球】が会長だね!」

ナナ「あつまーい! ヨシ、そんなサーチじゅあーあ? 首飛ばされんよ! いーか? よく聞け? 【土星】がアリアって女の子で、【海王星】がカトーレアさんっていう人だ!」

ヨシ「うつやーそんなとこ」まで調べてたん! ? ナナちょ一瞬ジヤン!」

ナナ「まあ 370日あればこのくらい……ってんな」とこわせんじやないわよ!」

ヨシ「でも助かったよ。やつぱ私らは一人でひとつだね!」

ナナ「私は一人でも大丈夫なのよ!」

ヨシ「んー、でもさ、水・金・地・火・木・土・天・海・冥でいうなうと、まだ出てきてないのもいるつてことだよね？」

ナナ「そーゆ。もしかしたら私たちが…なーんてこともあるか…。そーいや私フルネーム出てたんだつた…。」

ヨシ「へつへーん白鳥ナナ「だもんね~?私はまだ下の名前しかでてないんだな~」

ナナ「うるさいわねー」の御羊ヨシコが!」

ヨシ「ちよつとーー何で出すのよ~」

ナナ「私たちは一人でひとつ。じゃなかつたの?」

ヨシ「出番のためならシヨーがな~じゃない!」

ナナ「あんたね……」

作者「えっと、こんな風になつてます。まだ出てないキャラがたくさんいるので、きちんと出してあげたいな、とは思つてますよ~。それでは次回で~。」

## 第八話・ワルツ第八樂章

果たしていくつの精靈を消したのだろうか。  
敵は、蠢く野生種は、オオカミの形をした精靈達は、初めから何も  
なかつたかのように消えていった。

「すごい・・・」

羽がようやく光を失なつた時、私は思わずつぶやいていた。  
花のような香りが、あたりを包み込む。現実とは思えなかつた。た  
とえて言うなら、お話の。

それも子供向けの絵本のような光景だつた。

『ふう。疲れましたね。』

「まったくだよ。また無意味な演出しやがつて。なんだよーあの雪  
は！」

『必要な演出でしたよ。なかなかきれいだったでしょ？』

ね

『ふう。やはりあなたは文化的ではないのですね。いや、文芸的で  
はない、ですかね』

「無意味な力の非効率的な活用法が文化的だつていうのなら、願い  
下げぞ！」

目の前には、銀の光を纏う天使と、赤い光を纏う少年。  
夢だ。

そう、夢に違ひない。

最終防衛ラインは、大混乱に陥っていた。

目の前の光景が、八雲同様に信じられなかつたのだ。空に浮かぶ金の円盤から落ちてきた光。熱量。それにより田に見える、莫大な靈力の波。

「な、な、なんだつたんだ！あれは！」

「八雲の言つていた、最終、兵器」

「つつたつて靈力数値はざつと見ても四ヶタ越えだつて！？」

「私にもわからん！・・・だが、昔八雲から聞いたことがある」

「なにを？」

「この学園都市の地下には、天精戦争の遺産、強大な力が隠されている。とな

「それがこれ？」

「ああ。おそらくは。だが私は一度も見たことがなくてな」

いつたいどういうものなのか。あの時代の科学力の遺物だとすれば、このようなこと造作もないのかもしれないが・・・。

「あーやばい、なんか思い出した！」

薰が大声を上げる。

「そーいや見たことあつたな！そうだ、確か・・・」

「なに！それはどういうものだつたんだ？」

「あー。えつと。八雲と学校内の点検をするときに、西棟開かずの間からいけるらせん階段の一番下、22ケタのパスワード・・・その一番奥の研究所。うん、やっぱり見たことがあつた！」

必死に思い出そうとする薰。混乱して記憶があやふやになつていて、ようだつた。私も同じように混乱をしている。急かすのは逆効果だらう。

「それで、薰。それはどういうものだったんだ？」

「黄色、いや、金色の古代ルーンで埋め尽くされた、強化ガラスのドームだつたな。えつとー、そう。その中に、赤い籠手？みたいな、ああ、ハ雲は手甲つていつてたな」

「紅手甲のことか？」

「そう、それ！ってなんだよセンセー。知つてんじゃねーか」

「いや、私の知つているのは天精戦争時末期に天空軍によつて開発された兵器のことだ」

「ほらやつぱそれじやん。地下に眠る天精戦争の遺産！」

「おまえ歴史習つてないのか？・・・つてそつだつたな。数学以外はおまえは赤点だつたな」

「すいませんね。特務科いなかつたら落第で」

「だから私はもつと勉学のほうにも力を入れると・・・ん。まあいい。それでだ。その紅手甲だが、当時のほとんどの文献、さらには世界史の教科書にもこう書かれている。“使用したものの精神を侵食し、八割の被験者を廃人に追い込んだ”さらに詳しく言つと、“それをはめたものは激しい激痛、幻惑に襲われ、耐えきつた者でも、その後赤い光を見ただけで発狂した”とな。現在より遙かに発展していた天空軍が不可能だつたんだ。今の私たちが扱えるはずがない」

「でもそれ天空軍の切り札だつたんだろ？だつたらハ雲がうまいことして発動させたんじや」

「本当に学がないというのは、ああ、もう！私は悔しいぞ薰！いいか、その紅手甲の能力は、コントラクトを疑似的に発生させるもの

だ。つまり、精靈魔導士がないものでも精靈の力を使役できるようになるためのものだ。だから仮に八雲が発動させたとしても、基礎も知らない人間にあんな細かな演出付きの力が使えるわけないだろう

精靈魔道。私は何度か対面したことがある。戦つたこともある。だから、わかる。あれは鍊金術とは根本的に違つ。体の使い方、靈力の感覺、すべてが別物だった。

「までよ、たしかあの時、八雲の隣に誰かいなかつたか？」

「あのときつて、ああ、空が赤く染まつて、八雲が私たちの上を通過して行つた時か？」

「そう、変な金色の円盤にのつて」

確かに隣に誰かいた。

「だがあれは……」

「姫ちゃんだつたな。そーいえば」

『

「ハックシュン！」

「ほんとうに緊張感のない人です」

『場の空氣を読めないのが、この人ですからね』

『つるさいな。まったく。・・・誰か俺のこと話してんのかな』

『能天氣、ここに極まれり、ですね』

『おそらく悪い噂だね』

『つるさいよ！本当に！』

つて、こんなことを話している暇はない。最初から感じていた疑問。

低級な野生種が普通鍊金術師のいる場所に来るはずがない。ということ。たとえ群れでも、リスクの高い場所へはふつづけるはずだ。

「ねえ、小林さん」

『ええ、そうですね』

「あー、やっぱり気づいてた?』

『私は精霊です。あなたより、あむらのほうに近い存在ですから』

「?なんのことですか?」

その疑問の答え。ここで考えられるのは一つだ。

「何者かが・・・」

『野生種を使役し、ここを襲わせたようだといつことです』

「そつこいつ」と

ハ雲さんが息をのむ。

「可能、なのですか?』

『精霊魔導士、そうですね。ハイナイトクラス以上ならば、可能で

す』

「そんな・・・どうして!?』

『理由は分かりません。ですが、放つておくわけにはいきません』

『すぐに大学のほうへ連絡をしないと!』

『あー、非常に言いにくいんですが、私が感じますに、野生種使役を行つたのはマスターナイトレベルの人間でしょう。数からしても、質からしても』

『この大学のレベルは分からんんですけど、おやらく返り討ちにあつのが闇の山かと』

八雲さんの顔が、また最初に戻つていく。悲しい、ひどく悲しい日。

「では……もう私たちは……」

「俺が行きますよ」

「え？」

「俺が行つて、ぶつ倒してきます」

『かつこいいですね～このええかつこじー』

「そんなん、でも！」

「八雲さんは、すぐに学校に戻つて、事態の収集を。俺のことは、まあ、特務科の一人以外には秘密でお願いします」「ちょっと待つてください。私が離れれば姫は！」

『2分』

「え？」

『2分までなら、私が食いとめます』

「無理です！大学の力でも太刀打ちできないほどの敵なんですよね？それを一分だなんて！」

心配、されてるんだな。

うれしい、本当にうれしい。でも、だからこそ、

助けたい。そう思える。

「俺を、見ぐびらないでくださいな」

『ですよ。結構強いんですから。まあ全盛期の力さえあれば、ここ

からでも無力化は可能なんですか？」

「悪かったね。じゃあ、ここで降りしますよ。『

「まつげぐださー』

「ん？」

さあ、と、手甲についていない方の腕を握られる。  
細くて、やわらかい。あたかくて、汗で濡つてゐる。

ふわっと、彼女の香りが・・・。

「帰つて、きてください」

顔は、無表情だけど、それでも、思ひは尽せぬ。

わざわざしてくれたまらない。

答える。答えて見せたい。強く、強く、強く思つ。

心の強さそのまま翼になる。

大空高く、今なら、どこまでだって飛べる。

どんな敵でも、負けない自信。

「まかせてください。」

敵は、逃げてゐる。遠くの、森の中。

一瞬で、

もう、一瞬で。

おまえをやつて、安心せせる。

## 第八話・ワルツ第八樂章（後書き）

ナナ「誰も楽しみにしてない。でもやつぱり小説内で活躍できない私たちに出番をくれ！つて」と始まりますオリオンレポート！」

ヨシ「ナナ、長ーー」

ナナ「ううせい！今回から、各キャラクターに一言ーのコーナーよー！」

ヨシ「んじゃ行ってみよー！」

ナナ「ほらー早くー！うううううー！」

日乃「え？なにこれ！なんでこここんなに暗いんだ！？」

ヨシ「いいのよー！」は出番のない私たちの聖域なんだから

ナナ「質問に答えなさい。1、好きな食べ物2、嫌いなもの3、趣味4、特技5、ナナの好きなところ6、ヨシの嫌いなところの計6つよー！」

ヨシ「ちゅ、何言つちやつてんのー！？」

日乃「えーっと、Hビチリが好きかな。嫌いつていうか、苦手なものは、んー。人の視線。趣味は料理。特技も、料理・・・でいいのかな？うん。んで、ナナさんの好きなところは、ハキハキしていく、眼鏡がよく似合って、頼りがいがあるところ。ヨシさんの嫌いなところは、ありません。人を悪くは言いたくないんで。自分言われて

死ぬほど苦しかったし。代わりにいいところは、元気なところ。あと、以外とおつとりしているところかな。短めの髪もよく似合ってます。以上です！恥ずかしい！」

ナナミシノウル・・・

八雲・薰・美奈子・アリア・カトレア「」

۱۷۰

小林『おわりまーす（二回）』

## 第九話・ワルツ第九樂章

男達は、走っていた。

どうやら私の作り出した結界により、うまく靈力が使えないらしい。まさかあの時姫からもらった靈力を、野生種だけに使うことなどしない。

あんな低級には、演出付きの天使ビームでも、靈力半分で足りる。

相当焦つていてることだろう。

自分たちの身内ですら使えるものの少ない固有精靈が現れたのだ。  
しかも別導召喚で。

ハ雲という少女は氣づくはずもないだろう。

姫のつかつた術は、魔道精靈たちの間では、姫が言つ以上に困難な  
ことである。

それほどに、姫は才能に溢れている。

だからこそ、私の主足るのだから。

私達のいる精靈界は、個をもつものと持たない者がいる。

持たないものはただ、空氣のようにただよい、門が開けばそこに吸  
い込まれていく。

しかし個をもつもの、ここでは固有精靈（つまり私なのだが）は、  
滅多なことでは人間界に降りることはない。

自分の中の靈力が震えた時、ただその時人間界へと降りる。相手が  
だれであろうと、関係はない。ただ、己の靈力にのみ忠実なもの。

それが固有精霊なのだから。

固有精霊の姿は様々だ。人間の神を真似ているものがほとんどだが、私のように人型をとっている者は意外と少ない。

自分たちは人とは違う。それが精霊たちの根っこにあるもの。つまりはプライドだからだ。

精霊界は四体の大精霊、イフリート、ワインディ、ノーム、シルフと、精靈王オーディンによつて統治されている。といつても、群れるという概念が希薄なのが固有精霊だから、普段は寝てるか興味のあることに没頭していることが多い。

私は、人という者が非常に興味があつた。彼と出会つた時も、純粋に震えていたこともあつたが、それ以上に興味を惹かれたからかもしれない。今となつてはどうでもいいことだけだ。

「聞いてないぞ！なんなんだあれは！」

「し、しらねーよーとにかく早くここ出て、本部に連絡だ！」

精霊の五感は人のそれとは格が違う。  
全部聞こえている

クックック。

逃がしませんとも。

簡単には、ね。迷路のゴールはひとつだけ。

さあ、はやくそこへと。  
導かれてしまえばいい。

残り時間、2分

現在位置、学園都市、八雲の靈力フィールド圏内離脱直前

「あんな大きな魔方陣書くから、逃げ遅れちゃつたりするんだよね」「と、申されましても。普通はあれほどの野生種を使役するんですねから、規模が大きくなるのは当然ですよ」

「にしたってやりようがあるじやない？靈紙に書いたのを使うとかぐ。とにかく、こんな正直に地面に書くなんてありえないって」

靈紙とは、靈力を吸う特殊な紙だ。

『しかたがないのでは？地面に直接書くのが一番効率よく力が發揮できますし。ま、それ以上に舐められていたのでは？』

「まあ俺も向こう側にいた人間だけど、あんまりいい気はしないな『そうですか。ええ。そうですね』

「なにその笑顔！腹立つ！」

『さあ、フィールドから出ますよ。ここからは、私がサポート回ります。』

「よひしへー！」

『おつと、追いつきますよ。あ、でも敵さんたち、私の靈力封鎖領域から出ちゃいましたね。どうします？』

「実力で倒すよ。といふか、さては結界けつこう薄く張つてたな？」

『残り、1分35です』

「うおーやばい！」

足に吸いつく円盤へ、さらに靈力を送る。  
森を通り越し、こよいよ敵の姿が見えた。

白いローブ。白い帽子。黒いズボン。

シリウス学苑で何度も目にした、精霊魔道士の正装。

背中には、赤いバラと金の十字に、その周りを囲む黒いイバラの文  
章。

二人のうち、先を行く大きいほつの男がこっちに振り返った。

「ちくしょう！」「なりや！“来たれ炎よイフリート！火炎陣！”  
「やるしかねーか！“来たれ風よシーフ！暴風陣！”」

一人の腕が光り輝く。ローブの先から放たれる魔方陣。  
その中心から、靈氣を変換し、靈力へと姿を変え、さらに形を整え  
られた、炎と風が舞い起ころ。

小さいほつが出した風により、勢いを増した炎が嵐となつて足元を  
焦がす。

「一人は戦闘不能に。もう一人は殴り飛ばして連れて帰つて吐かせ  
る。いくよ！」

『了解です』

小林さんから力を借りて、自分の靈力を直接術に変える。  
固有精霊に術を使わせても、あいつらに直接ダメージを与えられな  
い。ここからは俺の出番つてね！

「“來たれ光よ大天使！ビーアーム”」

光速。中級クラスの炎も風も、干渉することのできない力。

ズドン。音が後から聞こえてくる。ブワッ。風がさらに後から唸る。

光の落ちた先には、一人の男が氣絶していた。

小林さんが下に降り、二人の額に手をかざす。記憶を消すためだ。  
もちろん、もう一人のほうは完全には消さない。しゃべってもらわ  
なくてはいけないからな。

『お見事』

「ありがとさん」

『姫、残り20秒です』

「は？えええ——い！帰るよ！」

『了解』

人一人の重さは、靈力の量でカバー。

ギリギリ。残り1秒で無事にハ雲さんの靈力フィールド内へ帰還し  
ましたとさ。

「ハ雲さん、どうでしたか？」

「よ、よく考えたらに、一分そちらで片付くわけがないで、しう。  
体外、れ、連金でようやく入口についた、所ですよ」

真顔でゼーハー言つてゐるハ雲さん。て、鉄面皮！

『姫は気が利きませんからね。まったく。レディーを走らせるとは  
「すいませんでした。本当に』

「い、いいですから、そこにいる男が、あなたの言つていた魔道士です、か？」

「はい。今から吐かせようと思います。早くしないと、残りの仲間が気づいて、本部へテレポーテーションをされてしまいますから。そうなれば、俺たちに追うことは不可能になります」

「な、ならば学園の外にある野外演習場を使いましょう。あそこなら、今誰も来ないはずです。あまり他の人間に見せるべきものだとは思いません」

「ですね。小林さん！そこの男をその場所へ。八雲さん、俺につくまつてください」「

ふわっと、空高く浮上。下を見ると、警報の解かれた学校は、互いに喜び、笑いあう生徒たちでいっぱいだつた。ああ、守れた。よかつた。

「そこです」

学園から少し離れた農村地帯にぽつかりと空いた空間。野球場がいくつも入りそうな広大な土地だ。本当に、この土地には違和感しかない。線路の延びるのどかな農村地帯。そこにいきなり東京を切り取つたような大都会。なんじゃここは？と思われるをえない。

地図上は群馬だが、なんだかなあ。非現実的過ぎる。これなら、前いたシリウス学苑のように、出島のように海の上に作られているほうが納得がいく。

「そこ」の監督室を使いましょう。こちらです。鍵は私が持つてますから、少し待つてください

広大なグラウンドの端にある、まるで前線基地のような無骨な建物中は、たとえて言うなら体育教室のようだった。

「おい、起きろ！」

顔をたたくが、目覚める気配はない。

『私が起こりましょう。なに、ナイトメアを見せれば、造作もないことです』

すつと、手を額に差し出す。

・・・・・ どんな夢を見せたんだ? いや、言わなくていい。俺も夢に見そ  
うだから。

184

「お二、なんだおこなは」としたんだー? 『ハハハ』

さつきからずつとこの調子だ。俺は元が小心者だから、こんなことは当然慣れてない。

イライラするが、もうかなりダメージを『えてしまつて』いる。これ以上やつたら、一生しゃべれなくしてしまつかもしれない。

「姫、私に任せください」

「セセレベダセ」

うーん。でもそれはどうなんだろうか。

『任せてみましょ』

「んー。そうだね。俺がやつてもこいつ何にも言わないし」

八雲さんは、俺の靈力によつて組み伏されている男の前に立つた。

「痛いのと、すごく痛いの、どっちがいい？」

「は？そ、そりゃ、痛くないほうが」

「すぐ痛いのがいいのですね。では」

すっと、八雲さんは小林さんのように、男の額に手を伸ばした。

「体外連金。夢魔」

「ああ？なにをやつたって俺ははかねーぞ！」

光が男の目に入る。口に入る。耳に、鼻に、毛穴に侵入する。

「な、何をやつたって……あ……ああ……あああ……あああああ……」

さつきまで俺たちを睨みついていた男は、もう叫ばない。うつろな目で口を開け、よだれをたらし、鼻水をたらし、涙を流す。

「あああ……な……た……たふけて……」

俺は、目の前の光景に気絶しそうになつた。

八雲さんはただ男の額に手をかざすだけ。それだけだ。攻めは何もしていない。ただ黙つた見ている。人間じゃない瞳。それ以外は何

も変わらない。でもその瞳が、まるで彼女を別人に見せていた。男は、全身をくねらせ、まるで虫のようになに地面に這いつぶさる。

「あああああ……わはつた……しゃへる……わはつた……たふけて……たふけて……たふけて……しゃへる……わはつた……」

『催眠は、連金術でも可能……』

小林さんの声で、はつと、自分が戻つてくる。

「ちよつと一ハ雲をんなにやつてんですか！？」

「鍊金術流の拷問術です。普通ならこんなにひどくいかないはずなんですが……天使さんの悪夢のせいで、精神的にガタがきていたのかもしません」

「鍊金術流の拷問術？なんすかそれ！」

「一種の催眠です。目に、直接靈力を注ぎこみ、相手に幻想を見せるものです」

「そいつは、いつたい何を見てるんですか？」

「恐怖です。自分が、一番怖いと思うのです」

「えげつなー」

『でも、精靈魔道のほうにもありますよね？そいつた術は

「あ……あれも相当えげつなじよね。つていうか俺催眠系は嫌いなんだよ」

『昔死ぬ田に逢いましたしね』

「ヤーヤー

「……しゃぐる、しゃぐる」

「しゃぐるのですね？しゃぐるのなら、解放してあげますよ。ソレのいない場所へ。解放してあげますよ」

「しゃぐる……おれ、たちば、この、ばしょ、ちか、さようだい

な、ちから、しらへに、き・・・た・・

「この場所の、地下にある強大な力を、探しに来たと？」

「それは・・・そほど・・・」

『それは一体？』

「しらはい・・・おれはちは、ただ、しらぐれと、いわれは、だけ  
は」

「それをどうやって調べに来たんだ？」

「れいりょくを・・・そくてい、する。こ、こんらんひ、じゅうじ  
へ、ちかに、もぐる。そして、はかる」

「なるほどね。要するに、この学園の地下に、靈力測定可能な何か  
があるわけだ」

「そうだ・・・」

「もういいでしょ。八雲さん、解放してください」

「・・・・・・・・」

空気が、変わった。ドンッと、押しつぶされそうな、中身をえぐら  
れるような、痛み。体が、震えた。

『いけない！姫！八雲さんを止めてくださいー』

小林さんの顔色が急に変わった。

「八雲さん？八雲さん！」

「・・・・・」

「う、ですね。解放しましょ」

だが八雲さんは一向に手を避けようとしない。いや、それどころか  
光が膨らんでいく。目は光を失い、鈍く光を放っていた。

その光は、紫色。空気に解けるように広がる。

この程度の力なら、自分は過去に何度も対峙してきた。

だが引っかかる。過去の、自分が。過去の。あの、悪夢。

紫の空気は男を包む。

男は、発狂した。エビのように体を折り、蛇のようにうねった。顔は、元の顔がわからないほどに歪み、体中の体液という体液が漏れ出し、あたりに異臭を撒き散らしていた。耳をふさぎたくなる。声。

「や、止めるんだ！八雲さん！八雲さん！小林さん！早く止めよう！」

『わ、たしにはふ、不可能です。今の彼女のその力は、私たち精霊にとって猛毒。こ、ここに立つことも、もう・・・』

ガタツ、八雲さんが両手を男へと伸ばす。

「やめるんだ！早く！早く！八雲さん！八雲さん！」

「ええ・・・わかってる・・・わかってるわ・・・やめれば、いいんでしょう?」

紫。埋め尽くされる紫の光。

八雲さんの、顔が、凄絶にほほ笑んだ。

無表情が壊れていた。

小林さんが、あの小林さんが膝をついていた。

男はついに自分の体をかきむしりだした。俺の拘束は既にかき消されていた。紫の光の束に。

肩を揺さぶつても、まるで彼女の体は鉄になつたかのように、動かなかつた。

目は、もう何もうつしていない。口からは、「わかつたるわ・・・わかつてるわ・・・」とつぶやくだけで、力を止めようとはしなかつた。

紫色に染まる彼女の腕。風が舞い、周りに置かれた家具、教卓からは、悲鳴のような軋みが響いていた。

誰だ。彼女は、誰だ？わからぬ。何が、いつたい何が！？

『ひ、姫、力を、使ってください！彼女はもう彼女じゃない！戸惑つてはいけない！取り返しがつかなくなる前に！早く！彼女を守るために！このままでは・・・は、はあううはあつぐあああつ早く！彼女がつ消えるまえに！早く！』

「八雲さん！八雲さん！止まつて！お願いだ！」

力を、この力を、守るべき人に使うことが、俺にはできない。でも止めるには使うしかない。  
なぜ、なぜ力を、使わなくてはいけないのか！

「くそつ・・・“来たれ光よ大天使！眠れ！”」

俺の伸ばした右手のから、光がまっすぐ八雲さんへ延びる。

止まれ、止まってくれ。

光が届く前に、彼女の左手がそれを握りつぶした。

「効かない、効かないわ。そんな力で、ワタシを止める?」

「そんな!」

『違います! あなたは無意識に力を抜いている! 早く、か、彼女が、とりかこしのツカないコト!』

「小林さん! そんな体が! 消えてるよ! なんで!」

小林さんは、むづづくまつっていた。羽がひどく震えている。目から、血のような涙がほほに線を引いていた。苦しいのだ。あの小林さんが、本気で苦しがっているのだ。

男はもう動いていない。目は開ききり血走っているのに、体はピクリとも動かない。

やばい、やばい、やばいやばい!

『私のことはかまいません! ハヤク! ちカラをかノじょー・トメルのは、あなタニしかデキナイ』

俺も、呼吸が苦しくなってきた。目が、かすむ。回る。視線が定まらない。頭の中が、ぐちゃぐちゃになる。

「わかつてゐるわ、やめればいいんでしよう? 」二つの頭が壊れたら、やめるわ。ええ、そよう。二つの頭を壊すだけよ

彼女が、また笑つた。

人じやない。その顔を見て、初めて彼女が彼女じやないことを、心が理解した。

とめるだけじゃ、だめだ。彼女を、八雲さんを、取り返さず。そうしなければ、全部、全部消える・・・

「あなたは、俺の知らない、誰かだ！」

「ワタシよ。お姫様。八雲よ」

クスッ。その笑顔、その目。

彼女の体で、そんな顔をするな。そんな目をするな。そんな力を使  
うな！

「消えろ！ 出ていけ！」 来たれ光よ大天使！ 破邪！ 顯正！ 」

光が部屋を埋め尽くす。

「あはははははははははははは。消えない。消えてあげない。

「消えろ！返せ！八雲さんを！返せ！」

「私が、ヤクモ。八雲はワタシ。きえ・・・な・・・・・い・・・

八雲さんはもう一度、ほほ笑んだ。今度はこちらを見て。その目線。まっすぐ射抜かれた。腰が砕けそうだった。

八雲さんの体は、ようやく志が抜け、崩れ落ちた。

慌ててそれを片手で支えながら、光に右手を突っ込む。

羽の毛が抜け落ち、うづくまり、半透明になる体。

伸ばした右手に光は収縮し、球状の形に落ち着いた。

「小林さん…ああ、はやく。」

小林さんにむかってその球を放つ。

卷之三

「小林さん！大丈夫？ねえ！小林さん！」

うすくまつていた小林さんの羽に、また光が灯った。

「あ、ありがとうございます。ハル、ちゃんと男は？」  
「ハルさんは」の通り。黙つてゐよ。でも、男は

男のいた場所には、なにもなかった。流れていった血も体液も、俺の靈力が浄化してしまっていた。

「光が満ちる寸前に、男の体は宙に消えたよ。俺の力が、結界を破つたのかも。多分小林さんの結界が完全にゼロになったから、向こうから干渉されて、そのまま転送されたんだと思つ」

『私の結界を破るほどの力を使うとは。姫は相変わらずすばらしい靈力ですね』

へたり込んだ俺は、なんとか力を振り絞つて、腕の中で眠る八雲さんを抱き寄せた。

「うん。大事になる前に止めてよかつた・・・」  
『とりあえず帰りましょ』

「そうだね・・・でも、俺もう動けない」

『私が送りましょう。私もギリギリですがね』  
「ごめん・・・ありが・・・とつ」

俺の意識は消えた。

私の腕の中で眠る一人。

やさしく、八雲を抱きしめる姫。

私の、愛しの姫。

『彼女の力・・・恐らくは、死靈・・・』

そんなはずはない。私の知る限りの知識がそう告げる。  
でもあの苦しみ、痛み。  
体に残った力の残滓が、

彼女が死靈のそれだと、訴えていた。

死靈。死んだ人間の出す負の靈力。人にとっては毒だが、精靈にも  
かなりの猛毒。

でも、八雲は生き人のはず。

なぜ？

・・・いや、それは後々わかることでしょう。

むしろ、そのほうがいい。彼女が精靈のほうが、いい。

今回は、彼女の“あの力”は、私とあの男に向いていた。

だが今後、それが姫に向いたとき。

相手が精霊なら、命を賭して止められるか。

姫を、彼女は愛し初めている。

姫を、私は愛している。

姫を愛する者は、私にとつても愛おしい。  
それが、精霊の、愛。

止められれば、いや止めなければ。  
人の愛は、美しい。

精霊にはない、愛。

慈悲でも、気まぐれでもない、対等な愛。

私は、愛が欲しい。

人の、愛が。

誰かを、人のように、愛したい。

愛はないけど、知ってるから。

欲してしまつ。

人への興味。呑めることがない。

## 第九話・ワルツ第九樂章（後書き）

ヨシ「え？これ？んー。ボウズみたいな、まだほんの小さな子供にやあ教えられない職業さ・・・オリオンレポートって、知ってるかい？」

ナナ「あんた誰？つーかそんな不健全な「コーナーにするな！」

ヨシ「へつへつへーじょーちゃんいい体シテマンナー。おっちゃんとちょっと【オリオンレポート】しない？」

ナナ「エロイ言葉隠すみたいに使つてんじゃないわよー！」

小林『といふより、私を呼ばれたのはお一方ですか？』

ヨシ「あ、そうですそうです！前回から、各キャラクターから一言！つてコーナーやつてて、1、好きなもの2、嫌いなもの3、趣味4、特技5、日乃の好きなところの計5つです！さーどうぞ！」

小林『あら？前回と質問が変わつてますが・・・』

ナナ「本人に自分のことどう？なんて聞けるわけないでしょ！」

小林『そうですね。答え、でしたか。好きなものは愛のある人間。嫌いなものはそれ以外の人間。趣味は姫をからかうこと。特技は姫へと伸びる愛の線を、この目でしつかりと見ることができることですね。姫の好きなところは、愛を持っているところでしょうか。あ、ちなみに姫へと伸びる愛の線なんですが、一番ふといのは・・・』

・』

女全員「・・・・・チツ」

小林『ん？おやおや。みなさんお揃いで。え？恥ずかしいからやめろ？言うんじゃない？御冗談を！こんな楽しいこと止められますか！え？消す？面白いですね。この私を消す、などと・・・ってカトレアさま！それはいけません！そんな、そんな物語の最後のほうで出てくるような技をお使いになられては！みなさんも！コメディーだからって、死ぬ時は死ぬんですよ！・・・まったく。逃げるが勝ち！ですね』

## 第十話・ワルツ第十樂章

「薬はもう効き始めてるはずです」

「すいません、ありがとうございます。もう、起こしても？」

「ええ。起こしてあげてください」

「ハ雲、おいハ雲！起きろつて！朝だぞー！？」

誰かが私を呼んでいる。ハ雲。それが、私の名。大地ハ雲。ダイチヤクモ。17歳。

そのはずだ。それで、あつている。

「ハ雲！目を開けないか！ハ雲！」

また誰かが私を呼ぶ。

ハ雲、と。そうだ。私が、ハ雲。。。

「か、おる？・・・みなこせ、んせ」

薄く、ぼんやりと目に色が映る。

顔が一つ見える。

「ハ雲！起きたか！よかつた！本当に、よかつた・・・」

「泣くなよセンセー。もらつちまつだろお？・・・つとひの鐵仮面は心配掛けやがつて！」

目を、完全に開く。そこには。

一番信頼している人たちが、寝ている私に覆いかぶさつて泣いていた。

「まったく。一人でなんでもしようとして！いつも言つてゐだらう！もつと私たちを頼つてくれと！」

「ほんとだ！いつも一緒にいるくせに、こうこうときだけ離れちまうなんて！心配しまくったぞこの鉄仮面！」

「「めんな、さい」

私にも、涙が流れている。

二人と一緒に、一緒に涙。

前が見えない。

しばらく、三人。何も言わずに、何もせずに。

「日乃がおまえを連れてきたんだぞ。まったく。でもこの程度でよかつた」

「そうだぞ。まさかお前が夢魔程度の鍊金術ミスッちまうなんてな！ケラケラケラ」

夢魔をミスした？いつ？

記憶が、霞んでいた。覚えているのは、姫につかり野外演習場へ行き、鍵を開けて・・・男の前に立つたところまでだ。

「詳しい事情は、おまえが目が覚めてから聞こうつてことになつてゐる。こつちとしてはゆつくりしてほしいんだが、事態が事態だ。悪いがすぐに生徒会室へ行かなくてはならない」

「あの、姫は？どこに・・・？」

「姫ちゃんなら、八雲を預けてからすぐ「どこかに行つちまつたよ。目が覚めたら連絡してくださいってな。なんか、連れがヤバイみたいな」と言つてたけど、おまえら以外にだれがいたんだ?」

・・・・大天使、ミカエル、小林さん。そこははつきりと覚えている。なんだかあやふやだ。私が私を見ているような、私がその私を見ているような。  
なんだろ? あやふやだ。本当に、自分が自分でなくなつたかのような、疑問。

「おい、大丈夫か? やつぱり落ち着いてからのはうがよかつたか?」

先生が屈みこんで覗き込んでくる。

「いえ、大丈夫です。すぐに生徒会室へ向かいましょう。あ、でも最初は私たちだけでお願いします。私自身、すこし整理をしたいので」

「うつし。わーつた。姫ちゃんは? 呼ぶか?」

「呼んでください。彼が深くかかわっています」

「なんだつて?」

「詳しきは、生徒会室で、姫と一緒に」

『起きて、ください。姫。起きてください』

瞼の上から強烈な光が照らす。

なんというか、眼を開けた瞬間に失明してしまった。明りの量だった。

起きる気ないだろーなんだよー俺を襲ってるのか！

「あーもう一起きるからー旦が焼ける！」

『あらまあ、すこません。起きていないかと、思いまして』

起きてるよ。つたぐ。

頭が徐々に覚醒を始める。

ここは？周りを見る。さうか、学園都市の屋上、か。

「さうだ！ハ雲さんは？」

『隣で寝ていらっしゃいますよ。さて、どうします？』

隣で、ゆっくりと眠っているハ雲さん。

こうしてみると、外傷もない。顔は、無表情に戻っている。それはどうかおも思ひうのだが、今はよかつたと安心できる。

「一曰、薫さんたちのところに届けたほうがいいかもね。僕が病院に連れて行つてもいいけど、説明するのが面倒だし」

『となると、問題は記憶でしょうかね。あのときの記憶が、果たして残つているだろうか、ですね』

「うん。どうしよう？記憶を確認するにしても、起れないと無理っぽいね。でも今起きるのは・・・」

『面倒ですね。一曰外にまかせて、こちらでカバーストーリーを作つておくほうが何かといいでしょ。起きた彼女も、記憶があやふやな状態であるならば、さうかと納得できるでしょう』  
『だよね。にしたつて、記憶が残つたままだとさすができないよね』  
『消しましょうか？』

「無理だと思つ。もうハ雲さんは小林さんの力を間近で感じてしまつてゐるし」

『でしたね。抗体が出来てしまつてますね』

精靈の力。人に影響を与える力。深層心理に働き掛ける力は、人に干渉してしまう。

薬と一緒に。力は体内に侵入し、効力を發揮するが、一度使われれば二度目はさらに力を強くしなくてはいけない。これが催眠系の弱点だ。

だから催眠系の術を使うものは、極力靈力を外に出さないようにしないでほしい。

小林さんはハ雲さんに力を浴びせてしまっている。

俺に至つては直接靈力をつかってしまった。

もうこれ以上の強い力は相手の精神を破壊しかねない。

「それにハ雲さんにこれ以上、靈力を使いたくない。でもどうしよう」

『簡単な術をかけて、一日記憶をあやふやにしてしまうのは? 体外からの干渉でなら、不可能ではないでしょう?』

「・・・だね。それしかないかな。わかった。俺がやる」

『いいえ、私が』

「いいよ。したくないからって、それを小林さんにさせるのは間違つてる。俺が起こしてしまったことだ。俺がしつかりけじめをつけ るよ」

『姫のせいではありません。それは大きな間違いです』

「いいや、俺のせいもあるよ。考えなしだった。確かによく知らなかつたからかもしれない。けど、やつぱり俺のせいでもあるんだと思う。あんな事態になつたんだ。誰だつて、原因を憎む気持ちはある。ハ雲さんはとくにそれが強かつたんだ。気づくべきだった」

『わかりました。いや本当に姫は変わらない。うれしいことです』

「変ったよ。昔と一緒ににはしてほしくない」

『いいえ。変わつてません。根っこは同じです。私の靈力を震わせた、愛あふれるその心』

「・・・」

『照れない、照れない。さあはやく術を。遅くなれば事態は悪化してしまうかもしません』

「わかった。八雲さん、すいません。このことは必ずあとで償います」

人が人に靈力をつかう。大切な人に、守りたい人に。

「・・・・・“来たれ光よ大天使！混乱せよー”」

これで大丈夫なはずだ。起きた瞬間は、記憶が混乱してるはず。記憶が正常に戻る前に、覚えているかを確認すればいい。覚えていたら、そのときは相談しよう。話し合えば、わかることもあるはずだ。たとえ八雲さんの苦痛にしかならないとしても、あのときあいつは言つていた。「私が八雲」・・・二重人格？そんなレベルの話じゃない。中身が、変つていた。完全な別人だつた。

「よし。弱めにかけといだから、田覓めたらすぐに確認しどかないとね」

『はやく、その薰さんたちのところへと連れて行って来てください』

「そうだね。あ・・・」

『どうされたのですか？』

「ずっと八雲さんと一緒に氣づかなかつたけど

『けど？』

「紅手甲つて、外れるの？」

試しに留め具をはずしてみると、すると案外、簡単に外れた。

でも腕には、噛みつかれたような傷跡が残っていた。

「痛い、痛いとは思つてたけど・・・。俺、治癒の鍊金術なんて知らないよ?」

『・・・私にはその傷を治すほどの靈力はの残つていません。送つていただきたいのですが・・・』

「無理だよ。どうにかしろ、もう俺には靈力が残つてない」

立つてるだけでフラフラだ。

『血は止まつますね。では隠して、八雲さんをお渡しした後に救護のほうへ行つてこられでは?』

「そうする。あ、小林さんはどうする?..」

『私はここで隠れていましょ。なにがあつたら、靈力で知らせてください』

「わかった。全部終わつたらむづきに帰すね」

長袖の服、袖が破れてるけど・・・上着は教室か。つてことはどこだっけ?

『ここはあなたの通う学園の屋上ですよ。あなたの記憶から、割り出してみました。ちなみに薫さんと美奈子女史は、ここの一階にいらっしゃる』

「ありがとづーじや行ってくるー」

「薫さん、先生ー」

「おお!姉ひやんじやねーか!おまえ避難所からフケたそだな!」

どこ行つてたんだー・・・つて八雲じゃねーか!』

「なに! 日乃!? 八雲! どうしたんだ? なにがあつたんだ!」

二人は正面玄関前で生徒たちの誘導をしていた。

いきなり大声をあげたから、周りの生徒たちも驚いてこひちをむいている。

「すいません。詳しい事情は後にお願いします! とにかくや雲さんを! 気を失つてるみたいなんです!」

「なに! 薫! すぐに保健室へ運べ! それで日乃、いったい何があつたんだ! ?」

「あの、八雲さん、夢魔つていう鍊金術を使おうとして、いきなり氣を失つちゃつたんです」

「夢魔? いつたいあんなものを何に使つたんだ! ?」

「詳しいことは、後でお願いします。とにかく今は八雲さんを! 僕はもう一人の連れのほうへもどります。目が覚めたら携帯に連絡を! ジャ!」

「おい、待て! 日乃! 日乃!」

俺はすぐに逃げ出す。幸い、誰も追つてこなかつた。

ま、追える状況じゃないしね。

『私も、ずいぶんと無茶をしたものですね・・・』

固有精靈の心臓とも言える、精靈核をむいひに置いたまま、あれほど靈力の行使をするとほ。

核があればこの程度なんともないのですがね。

といふか核があれば、わざわざ姫から靈力をもひりつともしなくてよいのですが……。

持つてくるべきでしたね。今更になつて後悔するとは。

姫にはなんとか隠せましたし、まあよしとしておきましょ。

『ぐつ・・・存在が、搖らぎ始めましたか』

消える。この体が消えてしまふ。

まあ、消えてもむこいつの核からまた私は生まれるのですがね。

『ですがこの私が消えてしまえば・・・姫と契約をした、私が消えてしまふということ・・・』

生まれ来るであらうむつ一人の私。でもそれは私だつて、私ではない。

リセットされた私。

『それは・・・困るのでですが・・・』

「・・・小林さん?」

振り返ると、呆然とした姫が。

見られる前に、そつとバラの香りとともに消える予定でしたのに・・・

『無理をしそきました。どうしましょ?』

『まつてて!すぐにむこうへ戻すから!』

『止めてください。靈力の借金は、身を滅ぼすだけだと黙つてるでしょう?』

『大丈夫だ!小林さんが俺の靈力を抑え込んで、それで俺がむこいつ

に帰す！それで大丈夫だよ！

『もうよいのです』

「そんなのはだめだ！俺が勝手に呼んで、さんざん助けてもらつて、  
消えるなんて！」

『呼ばれて答えたのは私の責任でしょう。・・・馬鹿ですね』

「ふざけないでよ！消させない！絶対にむこづに帰す！」

『むこうに核はありますから。消えても死ぬわけではありません』

「でも、契約は消えちゃうんでしょ！？」

『だから、困りましたねーと言つてるんです』

「いやだ、死なないからつて、田の前で友達が消えるのを見つれて？」

『友達？』

「そんなのはいやだ！消させない！いくよ！小林さん！」

私が、友達？

それはちょっと友達少なすぎやしませんか？姫。

いよいよ力が抜けていく・・・・。

消える瞬間。

「いや、まさか本当にいるだなんてねー。君、精霊かい？」

感動の瞬間に、邪魔ものですか・・・。

「誰!?」

「誰つて、研究者ですよ。この大学の」

「大学の研究者?」

「ええ。ここの大学院のほうに研究所を構えてるものです。分野はね、精霊と鍊金核の研究なんだけどね」

その人は、男だか女だかよくわからない人だった。

男にしては声が高いし、女のような肉のつき方をしている。でも、女にしては身長が高いし、手足も長く、骨格が男に近い。なにより顔だ。男のように鋭い目つきを女のように緩めている。

笑顔は纖細で美しい。でもどこか野生的な、情熱に駆られているようだ。そんな雰囲気を出している。

服はスーツの上から、白衣を着ている。胸があるように見える、けれど・・・。

「それが?俺になんの用?」

「いやね、研究所のレーダーで、野生種の靈力の波長を追つてたら、いやに大きな靈力を感知してね。一発で気づいたよ。固有精霊だつて。だからずつと追つてたんだ。で、ここ止まつたから、あわてて追つてきたつてわけ」

「この人、固有精霊を知っている!?」

「君といつしょ。日乃紅姫クン。私は元、魔道精靈士だった人間だ」

「えつ・・・」

『ほう。よく、知つていらつしやる。で?この感動のシーンに水を差して、何が目的なんですか?』

「目的?そうだね。今私は興奮しているんだ。やつと、実験対象が・・・おつと。いけない。君たちを助けよつと思つてね」

「助けるつて・・・小林さんが助かるの!?」

「おいおいおい。よくその精靈を見たまえ。存在の揺りぎが止まつてるだらう?」

『あなたの右手の中のものおかげですか』

「よく気づいたね。そう、これさ』

研究者と名乗る人の手には、小さなペンドントが握られていた。

「これは研究が初めて成功したときに作つたものでね。記念に一部をペンドントにしたものなんだけど、なかには人工の精靈核が入つているんだ」

人工の精靈核だと!?

「そんな・・・馬鹿なことが!」

『いいえ、姫。あれは紛れもない精靈核です』

「つせだ!・づづやつて!』

「君の持つている紅手甲の技術の一端さ。最終的には、それと同じものを作るのが私の研究目標でね。この人工精靈核は、その過程で生まれたものだ。まあ、実用性には欠けるけど、これを鍊金核に応用できないかと思つてね」

「なんでそのことを…」

「私がずっとその紅手甲がどうしてもほしくてね。ずっと、ずっと目に見えるように監視し続けていた。そしたら君たちが持つて行くじゃないか。いや、焦つたよ。でもさうに驚かされたのは、君がその紅手甲を使いこなしたことさ…」

「そんな、馬鹿な…」

「どうだい？この精靈核があれば、その精靈さんは助かるよ

『・・・・いつたい、何が目的ですか？』

『先ほどあなたは、私を追つてきたとおっしゃいましたね。ですが本当は姫の紅手甲が狙いだ、とも言つた。でもそのどちらでもない。どちらもどうでもいいと思っているはずだ。この時点ではあなたはうそをついている。いや、それだけじゃない。あなたはペンダントを記念に作ったと言つていた。でもその中の精靈核は、できてまだ時間がたっていない！うそが一つ。あなたは信用できません。あなたに頼り姫を渡すくらいなら・・・消えたほうがマシですね』

「私があなたの靈力を追つてここまで来たのは真実だよ。それに、研究はさつき完成した、とすれば？興奮して言つてのことの前後が、ひっくり返つたとしてもおかしくないんじやない？」

『それも、うそです。あなたは興奮などしていない。気づいていないようですから言っていますが、あなたの田が、さつきから姫をとらえて離れないのですよ。まるで久しぶりにあつたかのよつな田、そして值踏みする田。本当のことと言ことなさい。本当の、ことを

「いやいや。本当にことね。うでだね。いこよ。紅手甲の研究。それだけだ」

『この期におよんでもまだ・・・』

「もういいよ！小林さん！助けてもらおうよ。この人のおかげで、いま小林さんは消えずに済んでるんでしょう？なら、俺はそれを信じるよ。助けてくれるんだよね？」

「ええ。助けますとも。絶対ではないけども、この大きさの精霊核で揺らぎを止められたのであれば、成功する確率は極めて高いと思われるよ？」

信じよ。それしか小林さんを消させない道はない。

『姫、ここは信用できません！私など、消えてもよこのですから！おやめくださいー』

「小林さん。僕が主だ。僕の従つてもうつよ」

「ありがと。ならばひかりへ。私の研究所は、歩いてもすぐの場所だ」

そういうて、研究者はぺこりと頭を下げる。

信じるしか  
ない。

## 第十話・ワルツ第十樂章（後書き）

ナナ「うー、ドキドキするなー。オリオンレポート、今回のゲストは、なんとあの方！」

ヨシ「緊張するよー。で、では、ゲストの方、どうぞ！」

ハ雲「・・・くらいですね」

ナナ「ああ、こっちです会長！ここに座つてくださいね」

ヨシ「あ、あの！会長には、今から質問に答えていただきます！」

ナナ「1、好きなもの2、嫌いなもの3、趣味4、特技5、日乃く

んの気に入ってる所です！」

ハ雲「好きなものは、パンと学校。嫌いなものは粗野粗暴な人、趣味は裁縫、特技は情報収集、姫の気に入っているところは・・・」

ナナ・ヨシ「ゴクッ」

ハ雲「はて、どこでしようか？」

ナナ「そこでボケるんかい！」

ヨシ「ちょっ！会長になにしちゃってんのよー！」

ナナ「はつ！つい！」

ハ雲「はて・・・どこでしよう・・・」

ナナ「会長が思考の海に潜つてる間にー！」

ヨシ「感想、評価お待ちしておりますーでは、また次回！」

## 第十一話・ワルツ第十一樂章

「会長！会長！起きてください会長！」

「おい慎吾、会長はまだ起きなさらないのか」

「今起こううとしてるんですけど、こんなときまで、まつたく…」

「御前は？あの人を呼んで来るんだ。一発だろ？」

「申し訳ありません、アドルフ。御前は本部会へ確認を取りにいつています」

「もう俺が手筈を整えてる。あとは会長を起こして出発するだけだ」「仕方がない。起きてください…会長…・・・・・ 静香御前がお怒りですよ」

ガバッ

「お静！俺が悪かった！」

「会長、大変です！」

「お静！すまん！何をしたのかはしらんが、すまん！お静！…・・・んあ？つてなんだよなんだよ！まだ4時じゃねーか！外真つ暗な時に俺起こすんじゃねーよ！昨日野生種いくら殺つたと思つてんだよ。寝させろ」

「慎吾！会長が起きたとほかの者たちへ。出発の準備を手配。会長、緊急連絡が入りました」

「緊急連絡？なんだ？」

「学園に野生種が襲撃しました！数は昨日俺たちが倒したのと同じ数です」

「な、なんだと！？」

「野生種が、学園に侵入しました！」

「…・・・すぐに、学園本部へ連絡！大学に残した奴らとの連絡は

？とれたか！？状況は！？」

「本部へは御前が。残つた者たちはみな初等部から本部へつながる西地区的防衛へまわつてゐるそうです」

「南から東へのオリオンパイプは！？」

「あそこは高等部と待機部隊に守つてもうつしかないかと・・・」「無理だ。くつ！すぐに学園へ戻るぞー準備は済ませてあるだろうな？」

「はい。会長の分は御前が」

「わかつた。すぐに飛行鍊金核に乗るよう指示を出せ。10分後に発信するぞ！」

「了解。もう出します」

「全員スクランブル！連金核のリリーズを許可するー行くぞ！」

「・・・野生種の同時多発か？ありえん。百年に何度もあるか・・・まさか」

「名前を教えてくれない？」

人の戻り始めた商店街を抜け、大学の研究所の集まる区画へとはいつていく。

小林さんは、不可視の状態に入つてゐる。精靈核のかけらでここまで靈力は戻るんだ。きっとうまくいく。

にしても目の前の研究者風の人間にについて行つてはいるが、正直本当にこいつは胡散臭い。

まず街に溶け込み切れていない。浮いてゐる。研究者も多いこの学

園都市だ。白衣は多く見かける。だが田の前を歩くことは浮いている。存在が、じゃない。ここにいる空間がもう浮いているのだ。

黒い色の中に、濃い藍色があるような、光の加減ではまったく変わらなくなるような、そんな感じだ。でも後ろから光を当てれば、青だけがはっきりと田につくような、なんといつのだろつか。これは。

「おや？ 興味を持つてくれたのか。いやうれしいものだね」

『興味というより、初対面で召乗らないあなたの常識を疑っているだけです』

「私はツキコ。ツキコだ」

「あー、苗字は？」

「ないね。ツキコ。ただのツキコだ」

「つてことは女性？」

「そうだね。よく言われるよ。男っぽいよね」

女性、女性・・・ああ、言われると女性にしか見えない。男っぽいところもあるが、今は女の部分が“浮いて見える”。

「こりだ。私の自慢の研究所さ」

「えつと、ここニアパートじや？」

「・・・地下、や」

なんか前もこんなのがつたな。地下好きなのか？鍊金術師つてのは

「こり？」

「ああ、こりだ」

「ずいぶんと、なんていうか、その、えーっと」

『見かけ、だけ、は一流なんですね』

「まあね。さ、精靈クン、そこの銀色の台に座つてくれ」

研究所だ。診察室なんて期待できない。あるのは椅子と机。あとは電子機器の山。一際大きな机は、会議用のものなのだろう。

『座りましたが。それにしても、他に人間がいませんね?』

「ここは私だけの研究所でね。個人の研究施設にしてはなかなか豪華だろ?」

「豪華っていうか、なんていうか、でかいよね」

『いけません、姫。華美な装飾は、無駄以外の何物でもありません。質素堅実です』

「それ、小林さんが言つちやだめ」

「いいから、早く始めよう。これが、人工精靈鍊金核だ」

「鍊金核? なんでそんなものが? 精靈核じや・・・」

「鍊金核の技術を応用して作ったんだよ。精靈の靈力波長は実はすごく単純でね。人のそれとほぼ変わらないんだ。違うところ、それは根っこが精靈特有の靈力か人間の靈力かつてことだけで、そこさえ解明できればすぐにでも製作可能ではあつたんだ」

いや、それは簡単じゃない。簡単だつたら、今頃世界は精靈だらけだ。

「でも私は、これを以降に精靈核は作らないよ」

「え? なんで?」

「私は、完成品は一つしか作らないことにしてるんだ。量産する気がなくてね。というか、情熱が冷めるとなんでこうなつたかがわからなくなってしまうんだ」

「と、とにかく! その精靈核を小林さんに!」

「少し待つてほしい。この精霊核は、あくまでも人工の紛いものだ。本物と比べれば、月とすっぽん。『ミミ』と思つてもらつたつていい。

それに頼るつてことは、小精霊である力を削ることを意味する」

「人になるつてこと?」

『そうですね。人と同じように、靈力を空気のように補給する必要が出てきてしまします。力はいつもと同じように送つてもらえれば、大きな術を使うことは可能です。しかし、昔のようには、うまく術を使えなくなるでしょう。元の靈力が削れるわけですから』

精霊としての靈力の制限。人ではない肉体。きっと、これはほとんどないことだ。

「でも、それでも、消えるよりは百倍増しだー消えるなんて、許さない」

「わがままなんだね。君は。そして強情。見かけとは大違いだ」

フツと、ツキコさんは笑つた。普通なら、気に障るのだろうけど、なぜか少しも嫌にならない。懐かしい。初めて会つたはずなのに。初めて見た、顔のはずなのに。

『勝手気ままなのは認めましょう。それより、早くすませましよう。八雲さんが目覚める時間です』

「八雲・・・大地、八雲かい?」

ボソッと、つぶやく。驚き、そして何かはわからない感情。声に震えがまじっていた。

「え、ええ。知り合いですけど? あ、ツキコ・・・さん? も知り合いなの、ですか?」

「そう警戒したような態度でいられるときみしいね。彼女とはちょ

つとした縁があるだけさ」

「さ、始めよ。無駄話が過ぎたようだ。じゃあ、この鍊金核を持つてくれるかい？」

よくよく見ると、精靈核は丸い水晶のよつなものだった。中心に、鈍く青く光るモヤが透けて見える。

「君たちがどうそれを使つかまでは知らなくてね。さ、初めてくれるかな？」

『姫、靈力を少し、分けていただきますか?』この陽の靈氣だけでは、向こう・・・精靈界の半分もありませんから』

小林さんは、丸い精靈核を額にくつつけ、目をつむる。体が鈍く青く光り始める。

「送るよ」

「いいデータがとれそうだ」

結果を言おう。

成功だった。

でもそれは、俺の中の、ツキノさんといつ存在への、言ことつのない違和感を強めていった。

彼女は果たしてどういう存在なのか。

鍊金側の研究者でありながら、元魔道精靈士。そしてその知識は天空人時代並みだ。

でもそれでも、友達を助けてくれた。

「ありがとう。シキノさん」

卷之三

よかつた。本当に、よかつた。

文部省編國語

「姫、  
携帯が」

「ああ、えっと・・・あー薰さんからだー。」

『では、戻りましょう』

「うん、あの、」のお礼は必ず！必ずしますから！すいません！今は時間が無くて・・・」

「いいでいいよ。私は、今とれたデータを早く解析したくてたまらないんだ」

「もう、本当にありがとうございました。行こう！小林さん。」  
『待ってください。今私は、歩くだけでも精一杯で

「大きく、育つものなんだよね。人っていいうのは。分かってはいたんだ。それでも、昔と、変わらない笑顔・・・」

思い出す、あの日々。

見守る。それが。

それが、私の、私の立ち位置。それでいい。

せめて、せめてもう一度。

あの笑顔を、見たい。

## 第十一話・ワルツ第十一樂章（後書き）

ナナ「ハーヴィー！今日は、テンションあげて、行ひやうわよー。」  
ヨシ「オッケイオッケイ！そー、今日のゲストは――――――」

ナナ「この方！姐さんこと、火崎 薫！」

薰「スポットライトか！眩しいけど気持ちいいじゃねーの」

ヨシ「さあ、我らがクラスの仕切り役！姐さんにさつやく五つの質問！」

薰「うっし。どんと来い！」

ナナ「1、好きなもの2、嫌いなもの3、趣味4、特技5、日乃くんの気に入ってる所です！」

薰「あー、好きなものは『おため』のA定食とB定食と日替わり定食、嫌いなもんは根性のない奴、趣味は体を鍛えることで、特技は車の運転かな。あ、言つてなかつたかもしないけど、あたし一回ダブつてつから18なんだよね。ま、後からその話は出るだろーけど。姫ちゃんの気に入つてるとこは、んー。かわいいとこか」  
ナナ「流石、姐さん。言い難いことでもかまわず言つかけやつのね」  
ヨシ「憧れるよねー」

八雲「でもああなつては、女としてどなのかと」

美奈子「まったくだ。薫はもつと女としての慎みと恥じらうこというものをだな」

薰「なんだ？まるであたしが女っぽくないみてーじゃねーか」

美奈子「まったくだ。薫はもつと女としての慎みと恥じらうこというものをだな」

薰「てめーらーそこに直れ！あ、こらー逃げんな！てめーら全員鉄拳制裁だ！」

美奈子「まったく、騒がしい奴らだな。あ、評価、感想お待ちしております。では、続く！」

## 第十一話・ワルツ第十一樂章

携帯電話片手に、もと来た道を一目散！……つていきたいところだけど、それは小林さん的に無理、つてわけで、ゆっくり急いで移動中。

<RRRRRRR···RRRRガチャツ>

「あ、もしもし、薰さんですか？」

「おう、姫ちゃん」

「すいません、さっきは手が離せなくて」

「いいって。それより、ハ雲が目、覚ましたぞ」

「そうですか！よかつた···ハ雲さん、大丈夫ですか？」

「ま、一応はな。でも靈力の過度な使用で、ちょっと靈力にノイズが入っちゃってるから、最低一週間は靈力の使用禁止だけよ」「でも、それぐらいで済んでよかつた！もっと大変なことになつてないかつて···」

「つたぐ。姫ちゃんは心配性すぎんだよ。あんな慌てた顔してきたから、てっきりあたしらもひどいことになつてんじやないかつて、余計な心配しちまつたんだからな！センセーなんて大泣きしたんだぜ？あの年で···つて痛いつ！」

ドゴッと後ろで鈍い音。薰さんたちの様子からして、本当に大事なさそうだ。靈力ノイズなんて、訓練してれば何度か体験するものだ。本当によかつた。

「つてーな。センセーガチで殴つただろ！···え？変われ？へいへい。んじゃ姫ちゃん、センセーに変わるぞ」「の前に、なんで薰さんまで俺のこと姉つて呼んでるんですか？」「え？なんでつて、そんのかわいいからだけど？」

「・・・もういいです。先生と変わつてください」

「ケラケラケラ！ほらセンセー、後よろしく」

しばらく話し声がボソボソと聞こえて、ガタツとこう音と一緒に相手の声が変わつた。それとは打つて変わつて凜とした声。

「もしもし？」

「あ、先生」

「ああ。日乃か？私は大泣きなどしてないぞ」「してたじやねーかよ」  
うるさい薰！こんどは本気でやるぞ！・・・ああ、それでだ。どうだ？そつちの用事は済んだか？」

「はい。もう大丈夫です。で、どうします？」

「生徒会室を使おうかとも思つたんだが、後片付けやらなんやらでな。学園内には職員が大勢いる。ここで話し込むのは少し無理があるかもしれません」

「あー、じゃあ、どうします？」

「そうだな。人が寄り付かないところがいいが、だが八雲もまだふらついている状態だから、できればベッドのあるところで休ませながらじやないと辛いだろう」

「寮は？八雲さんの部屋とかなら・・・」

「それは考へないでもなかつた。だが寮は宴会騒ぎになつてゐらしい。職員宿舎もじきに同じ状態になる。となると場所がないんだ」

確かに、あんな緊張状態から解放されたんだ。一気に糸が切れて弾けてるんだろう。クラスメイトの顔を思い出すと・・・乱痴氣騒ぎだな。

こつちの気もしつづに、とは思わないでもない。だがあと仕事まで当事者が。尻拭いをほかの人間にさせる気なんて毛頭ないし、なにより事態が特殊すぎる。不可能だ。

「俺の部屋は？ほかに住人はほとんどいませんし、たぶんその人たちもほかの場所へ行つてゐると思います」

「いいのか？おまえがいいなら、こっちも文句はないんだが」「大丈夫ですよ。狭いんですけど、モノがほとんどありませんから、

四、五人くらいなら余裕です」

「わかった。確かオリオンハイツだったよな？」

「はい。今俺がいる場所家に近いんで、先言つて準備します」「すまんな」

それつきり、電話は終わり。

『あ、ベッドやらなんやら準備しなくちゃな。

『男の一人部屋に複数の女性を……。いやはや、それが愛、ですか』

『そんなんじやないし、愛は関係ないでしょ』

『それより、私はどうしましょつか。隠れておくにも、今は不可視にはなれませんからね』

『なにいつてんの？説明するよ』

『はい？』

『いや、説明するつて。つていうか、小林さんは現段階でむこうに帰れない、精霊の力を使えない、つてなつたらほとんど人間じゃん。だつたらとりあえずは居場所作つとかないと。もしかしたらむこうに帰れないかもしないんだよ？』

『むこうに精霊核があるのにこっちで精霊核を持つてしまつ、なんて前例がない。何が起こつても不思議じゃない。』

『確かに、一理ありますね。ですがいきなり精霊だと明かすんです

か?』

「うん。俺のことも含めて、全部、説明する」

『姫・・・』

「もう八雲さんには言っちゃったしね。なんか一人に話したら、すつきりしてさ。変えられないんだ。過去なんて。だったらもうじょうがないじゃない?」

『ですが、問題は山積みですよ。すべて話したとして、それ以外の全員に話すわけにはいかないでしょ?。当事者だけにとどめておくべきです』

「カバーストーリーが必要だつて事?」

『それも、なんの矛盾点もない、完璧なストーリーが

「問題山積みだね」

『そう言つたでしょ?』

「ま、最初は隠れててよ

『ど?』

「押し入れ」

「さ、八雲、ここに横になれ」

「すいません。姫、借りますね」

「いえいえ。じゃ、あー、すいません先生、薰さん。少し席をはずしてもらこませんか?」

「おこおこー！」ができてそれはないだらうな

薰さんがムツとした顔で言った。でも今は一番確認しなくてはいけないことがある。

「大丈夫です。えっと、八雲さんと情報を一度整理したくって」「それなら私たちがいてもよくはないか？」

確かにそうだ。どうしよう、のこと、二人が知っているかどうかもわからぬのに、むやみに話すべきことじゃない。

「お願いします。どうしても、確認しなくてはいけないことがあるんです」

すると薰さんの表情が変わった。

「姫ちゃん。ちょっと外でよ」

「え？」

「いいから、日乃。外へ出るぞ」

「先生、八雲は？」

「大丈夫だろ？ 精力は使えないし、なにより今の状態じゃ一人では動けまい」

「あの、なんで外に出たんですか？ 部屋に戻らしてくれませんか？」

「・・・それは、八雲の笑顔のことか？ 姫ちゃん」

え・・・?

「お前も見たのだな? 日乃」

二人は、あの事を知つてゐる? あの壊れた笑顔を見たことがあるのか?

「見ちまつたんだな。・・・安心しろ。姫ちゃんが心配してゐることは大丈夫だ。その時の記憶はハ雲には残つてない」

つてことは、当事者は全く知らないってことか。

「私たちも一度みたことがある」

「その時はなぜ?」

「昔、北関東で鍊金術師を狙つた傷害事件が多発してな。その事件の犯人の精靈魔道士を、調査を依頼された私たちのチームが、犯人の仕掛けた罠に嵌まつて追いつめられたんだ。そのときだつた」

「あの野郎、今でも許せねえ。でもよ、あの時のハ雲は人間じゃなかつた。すぐに先生と私、学生会の先輩で抑え込んだからよかつたんだけどよ。そのまま行つてれば相手は廃人になつてた」

あの時、違和感を感じた時に先生たちは止めたのだろう。俺らがのんきに感心してるときに。クソッ! あの時止めてれば、ハ雲さんは今より苦しむことなんてなかつたからかもしれないのに。

「まさかまたなつちまつたなんてな・・・」

薰さんは、うつむいて、首を振つた。

「理由は私らにもわからない。調べてはいるんだが、前例のどれに

も当てはまらない。本人に聞くのは、それを自覚させることになってしまふ。教えたほうがいい、そして対策を立てればいい、そう思つたんだがな。・・・勇気がなかつた

ふたたび起つてしまつたこと、その理由は自分にあるところ後悔。

「・・・俺にも、話す勇気はありません。ハ雲さんを知つてゐる人ほど、繋がりを追つてゐる人ほど、話すことなんてできないのかもしれません」

本人のことを思つほど、話せなくなる。でも思つてゐるからこそ、話さなくてはならないと、そつやつて板挟みにあつて動けなくなつてしまふ。

「今は、今は話すべきではないと、そつ思ひます。でも近いうちこ  
話さないといけません」

一人の目を見て言つ。逃げじゃない。ただ、今はそのタイミングではないのだ。  
お互に、心の整理をしなくてはいけない。だがどのままズルズル  
といつては今と同じことが必ずもう一度おこる。

「そーだな。覚悟、決めないとな

「ああ。今はまだやることが残つてゐる。それを片づけて、タイミングを見て、みんなで話そづ」

ハ雲さんのことがひと段落して、今やること。それは後始末だ。

「部屋に戻りましょうか」

「やうだな。先に行つとけ。」  
「おれども、茶で一服と相場は決まつてゐる」

「お？ センセーのおじつへならあたしゴルゴンの紅茶のミルクティー！」

「ふつ。田乃は？」

え？ オーリてくれるんの？

「ロ、コーヒーの、ブラック」

「ブラックか。わかつた。ハ雲は、おーいお茶さん、でよかつたよな？」

「そそ。ホットで」

「よし。売店・・・は近くにないな。自販機は？」

「あ、やこの角の所にあります」

「じゃ、行つてくれる

頼りになる人たちだ。

「行こうぜ。ハ雲が待つてる」

本当に。

「姫ちゃん、センセーが何買つてくれるか聞いてやうつか？」

「え？ わかるんですか？」

「絶対ストレートティーを買つてくるんだけど、それはカバーだ。いつもいちごミルクを買つてくれんだよ」

「え？ なんていうか、想像つきませんね」

「あの人甘いもの好きだからな。お礼は甘いもんがいいぞ」

「そうします。薰さんは？」

「は？」

「薰さんは何が好きなんですか？」

「あたし？あたしは・・・酒かな？」

「え！」

「まつてゐからなー」

現在、上空10000メートル。

超高速航空機、飛行鍊金核「星雲」内。

「会長！本部から連絡が  
「なんだ？まさか・・・」

壊滅、の一文字が頭に浮かぶ。

「いえ、そうでもないよつです。まずはこれを」

渡された、メモ用紙。それに書かれた一文。

「な、なんだと！」

「啓太さま、いつたい何が？」

「学園の野生獣の群れが、一瞬で消え去った、らしい

周りの目が変わった。

「会長、詳しいことはこちらで。吉美ーー」のメモリの中の「トータルをこつちに送ってくれ」

「りょ、了解。ちょっとまつてくださいね。会長、送ります」

俺の鍊金核から、大きなウインドウが展開される。

「こつたこづうこづことだ？・・・静香、慎吾もこつちへ。アドルフ、機内無線を機関部へつなげ」  
「すぐに。はい、いいですよ」

「機関部！おい清彦！聞こえるか？今から鍊金核のコアの調整は一任するぞ。飛行機落とすような真似だけはするなよ」

『ガガツ・・・あいあい。でも、この飛行鍊金核のコアって調整難いんすよねー』

「真琴、サポートは任せたぞ」

『了解。・・・清彦、あんた少しは緊張感もつて動けないのかしら？』  
『え？ 緊張ならじしてるよ。今だつて・・・』

「通信を切ります。吉美、データを表示」

田の前に浮かぶ映像は、おそらく学園都市周辺の略図だ。

「この映像は、むこいつの話を聞きながら、私がまとめてみたものです。かなり簡単ですけど、一応この赤い円が野生種の勢力範囲です」  
相変わらず、この男、アドルフの仕事の腕は異常だ。

「野生獣が、学園都市の防衛システムを突破していきます。そして、最終防衛ラインに突入」

円が学園と触れるか触れないかのぎりぎりで止まっている。

「防御システムがこいつもあつさつと・・・」

学園の警備は慎吾の管轄だ。責任を感じているんだろう。だがそれを言つなら俺の、俺たち学生会全員の責任だ。

「そして、約10分後」

学園を囲みこもうとする赤い円が、パッと消えた。

「意味がわからん。アドルフ、どういうことだ！？」

「それがわからないんです。ただ、消える直線に空の色が変わり、強大な靈力を高等部のほうから感知したということ、そして突如振った光の雪、閃光、連鎖して爆発した野生種の姿・・・むこうもかなり興奮していたので、聞き出せた範囲ではこれが全てです」

ますます意味がわからん。

「おやうへ、魔道精靈ではないでしょうか」

全員の沈黙を破ったのは、吉美。

「吉美の言つとおり、そつとしか考えられません。しかしだとすると、なぜそれが学園内から？」

「それだけじゃあねえ。学園を囲むほどの野生種がいた。それほどの数は、最大発生数クラスの数だ。その数が学園を囲んだってことは、野生種がほとんど損害なしに防御システムを破ったことになる。

新記録更新、つてならわからないけどよ、今まで、過去何百年もの記録を、そろそろ破れるとも思わねえ。加えて、同時多発だ。同時に多発なんて、過去何度記録されてる? どう考へてもおかしい。俺はそつちのまつがどうにも気にかかる」「

わからないことが多いさぎる。だが、ずっと、頭の奥でさりげなく一つの仮説。

「静香、おまえはどう見る?」  
「啓太さまの考へと一緒にかと思ひます」  
「アドルフ、おまえは?」  
「私も会長のお考へで間違いないかと」「慎重」  
「おそらくは……考へたくもありませんが」  
「吉美」  
「い、いっしょです」

やはり……間違いなく

「シリウス学苑からの、攻撃つてことか」

## 第十一話・ワルツ 第十一樂章（後書き）

ナナ「一年！」

ヨシ「C組！」

ナナヨシ「美奈子センセー！ わーー！」

水原「金八先生か。わたしの尊敬する教員の一人だ」

ヨシ「やっぱ教師もののドラマとか超見てるんだろうね」

ナナ「だろうな。熱血だし」

水原「うるさい。で？なんだ？この暗い部屋は」

ヨシ「ここは私たちの出番のためだけに作った、特別仕様なのです」

水原「おいおい。不健康すぎないか？あまり感心しないな」

ナナ「いかに先生といえども、ここは私たちの戦場です。やめるわけにはいきません」

水原「白鳥・・・。そうか。ならばもつ何も言つま」

ナナ「いえ、先生には質問に答えてもらいます」

水原「・・・」

ヨシ「1、好きなもの2、嫌いなもの3、趣味4、特技5、田乃くんの気に入ってる所です！」

水原「まったく。好きなものは動物。嫌いなものは虫だ。趣味は映画観賞、特技は数学だ。数学教師だしな。田乃の好きなところは、素直なところだな。あとは素質がある。過去云々を抜きにしても、かなりのレベルだ。将来が楽しみだよ」

全員「つまんね」

水原「な！おまえら！」

全員「おもしろみねー」

水原「お、おまえら！言わせといてそういう態度は許せないな。鉄拳制裁だ！」

全員「シールド展開！」

田乃「え？なんですか？押さないで下さによ。もー」

全員「君の犠牲は無駄にしない・・・逃げろ!」

日乃「なに逃げてんですか!」

水原「ほお。おまえが代表で制裁を受けると

日乃「さ、最後に一言いわせてください!」

水原「許・可・し・よ・う」

日乃「あ、あの、感想、ひ、評価お待ちしております、よ、読んで  
くださつてありがとう」「ぞいまし、たああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああああああ

水原「逃がさん!」

## 第十二話・ワルツ第十三樂章

「みんな、出て行つてしましましたね」

記憶がまだあやふやになつてゐる。頭がスキッとしない。  
体も動かない。

何があつたのか。記憶にはいつた龜裂。  
何か、あつたのは分かる。  
よくないことがあつた。

違和感。強い違和感、重い。鈍痛。

変化した雰囲気。

いや、なにかをされていた訳じゃない。

「私の知らない、私・・・」

やめよ。こんな状態で考え込んでも、いいことは浮かばない。  
暗い氣持が回るだけ。

でも頭には残つてゐる。反射してゐる。  
なにか、氣を引けるもの。

「そういえば、このベッドは姫の・・・」

なんだか恥ずかしくなつてきた。

「姫の、・・・ベッド」

ああ、意識しだしたら止まらない。

『ぐりしょつ、身動きが取れなくなつた。

いや、そんなことだ。たかが、そんなこと。

・・・なんて、そんな、流せることではない！

ああ、今度は変な方向に頭が回りだしてしまつた！

『愛ですね。愛を感じます』

！

「！」小林さん？」

『まさか、この私が押し入れから出でないわけないとは』

小林さんが、のそのそと押し入れから出てきていた。じるだつた。  
え？ なんで？

『いやいや、力を失つてしまいましてね。姫が門を開けなくなつてしまつて、精霊核からの靈力供給がストップしてしまつたんですね』

門が閉じた？ 精霊の門が？

「いえ、その、なんでそんなことに？」

『いかに姫と言いましても、慣れないものを長時間使えばそうなります。いま、姫の靈力は底をついてますよ』

外見が大きく変わつている。

長い金髪に、真っ白なローブの容姿なのは変わりない。違うのだ。

羽がない。それに、あの圧倒的を通り越して、暴力的とも言える存在感が消えている。体中から溢れる光が消えている。

天使が人になつたような、そんな非現実的な雰囲気だ。

『まあ、雑で急ごしらえですがね。なんとかこの世界にとどまつているような状態です』

「あの・・・それでなんで押し入れに?」

『それは聞かないお約束』

到着してみれば、学園内は平和そのもの。残留しているはずの、野生種の靈力すら感じない。正にいつも通りの光景。

「信じられる。本当に野生種の襲撃があつたのか?」

見回す限りお祭り騒ぎだ。

「それは間違ひありません。レーダーの記録を見る限り、確かに野生種はここを襲撃しています」

「ますます、意味がわからんが・・・。アドルフ!-とりあえず、学生会幹部を集めろ。本部に戻つて状況を整理する」

「了解」

「状況を、とにかく整理しなくては、無事だったと安心することもできん」

「そうですね。啓太様、お体は大丈夫ですか？昨日あれほど戦いになつたのに、あまり寝ていないんじや・・・」

「御静。大丈夫だ。それに今はそんなことにかまつてる場合じやない。だろ？」

「それはそうですけど、疲れた状態では、満足な判断ができるかどうかもわかりませんし、それに、」

「そんときやお前がいるだろ？それに慎吾もアドルフもいるんだ。とにかく、はやく状況整理だ」

「・・・はい。ですが決してお無理はなさらないでくださいね？」

「大丈夫だ。大丈夫」

今は、状況を把握したい。

なにがあつたのか。

クソッ。後手に回りすぎてる。

「ん、おじゃましまーす」

薰さんからまさかこの言葉が聞けるとは。何も言わずに入っていくかと思つていたよ。

「こしても狭いよなー」

ま、それでも遠慮は知らないんだけどね。

『すんすん廊下を歩いていく。玄関入って廊下。まつすぐドアのまつ  
へ行けばリビングキッチンだ。

廊下の途中にはトイレと風呂。一応別だけど、洗面所と脱衣所は一  
緒で、全部かなり狭い。洗濯機は寮の一階にあるので共同だ。二層  
式の年代物で、色んな洗剤のにおいが染み付いてるけど、コインラ  
ンドリーで金払うよりはました。ま、使うときは掛けられてる表に  
名前書かなきゃいけないんだけどね。使こすると家賃プラスだし。  
書かずに使うと、ばれたら最悪退寮つて話だ。

家賃はかなり安い。けど、ここは寮のくせに飯が出ない。なんでも、  
部屋にキッチンが付いてるからいいだろ?といつ、先代の寮監から  
の習わしだ。

にしても、風呂、かなり狭い。というか、風呂には浴槽しかないと  
いつても過言ではない。シャワーでためないといけないし。どうか、  
風呂ためたら体洗えないじゃん!と当初はおもつたが、まず温まつ  
てから体を洗う、というスタンスならどうにかなる。ま、一人のと  
きしかできないけど。

ガチャ

「おうハ雲! 寝てないとダメじゃねーか……って誰だお前!」

は?

『すいませーん、姫、狭くて暑苦しいので出ちやいました』

何やつてんだよ小林さん……。

「で？」こいつが、姫ちゃんの言つてた連れか？」「

「はい。俺が契約した固有精霊の、小林さんです」

「「じゅうせいれい？」は？なんだ？それって、魔道精霊師が使うもん  
だろ？え？意味わかんねえ」

「あの、それは、えっと。ちょっと待つてくださいね、俺も、説明  
する順番を考えてたもんで、えーっと・・・」

『姫は突発的なことには本当に弱いですよね』

「小林さんが言つなよ！小林さんが！」

「おじゃまします。戻つたぞ。いや、あの自販機は結構品ぞろえが  
良くてなー・・・・つて誰だお前！」

ああ、事態は悪化する一方なのね。

「「」の際、お前たちのことは不問にする。とにかく、何が起つた  
のかを俺にきちんと説明しろ。混乱してるのは分かるが、俺たちは  
何も知らないんだ。なにをどうすればいいのか、全くわからん」

田の前にいる学生会のメンバー十一人全員が、落ち着きなく田配せ  
をしあつてゐる。混乱してゐるんだ。俺もそうだ。だが、このままで  
は埒が明かない。

「せつせと聞え！俺だつて訳わかつてないんだ！説明しろ！不問に  
するつて言つてんだらうが！」

一斉にビクッ。そんなビビらんでも・・・。

「会長、あの、えーっと、その・・・」

「ケネス、落ち着け。まずは一、そうだな。野生種がいつどうやつて発生したか、からだ。そこから順を追って、ゆっくりでいい。焦らないで、一つずつ教えてくれ」

ケネス・ショーン。学生会整備委員長。19歳で最年少。オリオン学園の各校舎の管理、や全体の用具の整備を行っている。おどおどしているが、責任感と正義感は慎吾並みだ。

「ケイちゃん、そこはあたしが説明する。レーダーに野生種が感知されたのは7・00時。それから大学の部隊を派遣したんだけど、止められなかつたの。そして10・30時に第一防衛ライン突入。あたしたちもすぐに現場に向かつたんだけど、その時はもう第三防衛ラインまであと少しつてところだつたのよ。すぐに学園に緊急警報を出して、そのまま討伐部隊を編成、学生たちを誘導しつつ、応戦体制を敷いたわ。それが10・47時」

桐沢 大輝。学生会厚生委員長。22歳。商店街や学園内の寮の管理を行つていて。俺がスカウトした、体は男だが、心は女という。いわゆるオカマだ。アマリリストいうのが、大輝の今の名前らしいが。

「俺たちに連絡入れたのは、時差的に考えて、そのぐらいの時間だな。対象が第三防衛ライン侵入時に警報発令。マニュアル通りだな。だがなぜもつと早く俺たちに連絡を入れなかつた!」

「それは、会長たちも野生種との戦闘中である可能性があつたからだ。そちらの状況を把握できずに、無暗に連絡を入れるのはどうか、

ということもあった。何より野生種がこの学園の靈力を感じて、避けていつたり、防衛ラインに阻まれ逃げるということも否定できなかつた。・・・今は言い訳にしか聞こえないが、な

新堂 楓。学生会風紀委員。21歳。学園内の風紀を守る、学園内で最も恐れられている存在だ。堅物で古風だが、人情味のある気持のいい女である。

「・・・。そうだな。普通はそう考へるし、普通なら、そつなつていたはずだ。お前らの判断は間違えてはいないだろう。・・・今はそういうことを言つている場合ではないな。それで?最終防衛まで侵攻された訳だな」

「はい。第四防衛ラインを突破されたあたりから、野生種は侵攻のスピードをうんとあげてきました。えつと、10分からずに、最終防衛ライン寸前まで突破されました」

小町 春香。学生会文化委員長。20歳。学園の各図書館と管理、文化部の総括、文化祭の指揮がおもな仕事だ。小柄で、実年齢よりもかなり幼い容姿と甘ったるい声をしており、人見知りする性格だが、芯は強く、やるときはやる奴だと評価している。

「早いな。ということは、恐らくこのあたりから人為的に突破された訳だな。防衛網は?しつかりと組んだはずだろ?」

「組んだコトは組んだが、大学部の隊員以外はほとんどハジメテの対精靈戦だ。必然的に、主要ブロックの防衛に主力を置くことにナル。しかも増殖した。・・・絶望的だった」

サリー・サンジェル。学生会体育委員長21歳。グラウンドの整理、

体育系の部活動の総括、体育祭の指揮を行う。まだ言葉に異国的なまりがあが、かなり上達したほうだ。普段は陽気だが、理性的になつたり、かなり複雑な性格をしている。

「増殖は、野生種なら頻繁に行うことだ。・・・経験不足だった、な。そしてここからだ。何があった。増殖までした野生種が、なぜ爆発し、なぜ靈力も残さず消えた！」

「あたしらで、他の奴らの証言まとめてみたんだけど、共通しているのは空が赤く染まつたこと、光の雪が降つたこと、そしてその雪が光の槍に変わつて、野生種たちに降りそそいだこと。以上よ。でもね、高等部にいた子達が言つたんだけど、その光が出るほんの少し前に、八雲ちゃんの放送が聞こえたんだって。高等部の回線だから聞こえなかつたんだけど、『最終兵器を使うから、下がつていろ』って言つてたみたいよ。しかも、そのうちの一人が、光の輪に乗つて飛んでいく血まみれの男と八雲ちゃんを見たつて」

高等部に最終兵器？そんなものはあるはずがない。管轄以外にも、学園内の点検管理も学生会が行つてている。特に俺の代になつてからは力を入れてきた。それこそ学園内のすべてを。

「八雲つて、あの？美奈子さんの生徒で、無愛想な・・・。だつたよな？御静」

「ええ。たしか・・・そのはずだつたと・・・でも啓太様、あの子はそんな、最終兵器をわざわざ前置きまでしてまで人前で使うなんてこと、しない子だつたと」

静香と一緒になんどかあったことがある。美奈子さんは俺たちの先輩だし、なにより大学に入つたら学生会に入れようと思っていた候補の一人だ。冗談言つてもクスリともしなかつたよな、確か。隣に

いた薰はゲラゲラ笑っていたが・・・。

「どう考へても、おかしいな。性格からして、いつに連絡しているはずだ。そんな物騒なものならなおさらだ」

「あの、お一方の言葉から察するに、その八雲さんは最終兵器の存在を、周囲に隠していたかもしれないところ」とですか？」

アドルフの言つたことが一番可能性が高いだろう。が、どうもそれはないような気がする。命を預けあう仲間に、武器の存在隠す意味がない。なにより効率的でない。あいつは人の上に立つということをよく理解していた。有事の際に己しか使えないなんて、不確定なものに頼ることとなつてありえないはずだ。

「もしくは、ギリギリのタイミングで、なにかとんでもない方法を思いついたのか、ですね」

慎吾のつぶやいた一言。……そういうえば、高等部に転校生がいなかつたか？ たしか、付属女子に初めての男子生徒。あいつ確か、「たしか、その男の子はシリススから来たって、記録を読んだ気がします」

「吉美！ そりなんだな！？」

「え？ あ、はい。ね？ 真琴ちゃん」

「見たわ。珍しいわねって、話した記憶があるわね」

地下・・・。

ある。いや、これしかない！不確定事項が山ほどあるし、なにより奇跡的な偶然が重ならなくてはならないことだ。だが、今考えうる中で一番しつくりくる仮説だ。「これしかない！」そう思える。普段なら笑つて流すようなことだ。でも今はそれしか考えられない。あまりにありえない答え……。

「アドルフ！すぐにシキロ博士を呼べ！確認したいことがある。それと、八雲、薫、美奈子さん、それからその転校生の男子もだ！」

よつやく、事態を把握できたぞ！

## 第十二話・ワルツ第十三樂章（後書き）

ナナ「はーい。みなさんオリレポの時間ですよー」  
ヨシ「でーすよー」  
ナナ「今日のゲストは?」  
ヨシ「ゲストは?」  
ナナ「木葉 円だー！」  
ヨシ「マドカだー！」  
円「ずいぶんと手抜きな始まりかたね  
ナナ「ビッグゲスト続きだつたからねー。マドカくらこならじるさぐ  
らいでいいでしょ」  
ヨシ「出番も私たちあんまし変わんないしね」  
円「はあー。ま、いいわ。あんな濃いメンツに混じるだなんて、私  
には無理だもの」  
ナナ「でしょー?濃すぎると思つのよーね?」  
ヨシ「そうそう。消えちゃうって。私も消えちゃうって!」  
円「で?そんな話なら教室でいいでしょ?なによこい。暗くて狭く  
て」  
ナナ「フッフッフ。ここは尋問する場所。取り調べする部屋よー」  
ヨシ「監査官のさね!」  
円「へ。わかった。じゃ早く終わらせましょ。昼休み終わつちやつ  
ナナ「そういうとこ好きよ。じゃあヨシろしくー!」  
ヨシ「1、好きなもの2、嫌いなもの3、趣味4、特技5、日乃く  
んの気に入ってる所です! いつてみよう!」  
円「好きなものはお漬物。奈良漬がとくに。嫌いなものは身の程知  
らず、かな。趣味は読書。休みの日は一日読んでることもあるわね。  
あとは弓道。特技は・・・弓道でいいかな?一応部長だし。コウキ  
くんの好きなところはーって、「なことまで言わなきゃなんない  
わけ?」

ナナヨシ「「ゼひに」「」

円「・・・意外と男らしこどい」

ナナ「え？聞こえなかつたわよ？」

ヨシ「もつと大声で！」

円「い・や・よ。もう本当に聞かわなくなつたやつ。帰るわよ」

ナナヨシ「「えー！」

円「次、担任のセンセー様よ」

ナナヨシ「「すぐ、帰りましょ」」

円「・・・まつたく。ん？なにかしらこの紙？」

ナナ「やばいわ。宿題全部答え出し切つてないのよね」

ヨシ「あたしじんつぜんやつてないよー！」

円「なになに・・・ここまで読んでいただき、ありがとうございま  
した？つてこれなんか危ない文章じやない。えつと、感想、評価、  
お待ちしております？ほんと何これ？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8097d/>

学園精霊 勇者の時間

2010年10月10日19時33分発行